
L U R I A ~ 翡翠の瞳 空の蒼 ~

紗妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LURIA ～翡翠の瞳 空の蒼～

【Nコード】

N5713A

【作者名】

紗妃

【あらすじ】

天上界と人間界の狭間。自然の力を司り、意のままに操る能力を「魔法」と呼ぶ世界「ルリア」を舞台として、魔法遣いを目指す三人の少年達の友情と心の成長を描く心温まる、けれど、ちょっぴり切ないファンタジー小説。柔らかな金色の髪、翡翠の瞳のリオ。漆黒の髪に漆黒の瞳のアルフ。栗色の髪、大きな丸眼鏡にソバカスが愛らしいルー。かわいい彼等に逢いに来て下さい。

この世は、三つの世界によって形創られる。

混沌から全ての生を生み出した創造主『神』と、その下僕達の世界『天界』

創造主によって創り出された儂い命に縋り付く人間達の世界『人間界』

そして、もう一つ……。

『人間界』が創られる遥か昔、同じように創造主の指先が生み出した世界があった。

それは、人間界の裏側に位置しながら、忘れ去られた世界。

神の加護から離れ、人知れず、ひっそりと存在する世界。

神の力の微かな残り香『夢幻』を司ることを認められた、御伽の者の息衝く世界。

そこに住む人々は、己が世界を『夢幻界』、あるいは『ルリア』と呼ぶ……。

|||||

第一章

魔法遣い養成学校

|||||

< 1 >

早朝の爽やかな陽射しが朝靄を引き裂くように森の奥深くまで射し込む。すると、それまで夜の闇の中で眠るように身を潜めていた木々の枝葉は、生き生きと息を吹き返し、朝露に濡れたその姿は、まるで星屑を鏤めた薄布を纏ったかのようにキラキラと輝き出した。夢幻界『ルリア』の朝は、虹色に輝く雲と、柔らかな陽の光を反射した露の煌きで、宝石を嵌め込まれた絵画のように輝きに満ちて

いる。その美しさは、神と天使のお住まいになる天上界にも決して引けを取るものではないと、ルリアの民は皆、口には出さずとも心の奥で誇りに思っているのだった。

巨大なアーチ状の建造物の上に覆い被さるように伸ばされた櫓の大枝。それにしっかりと支えられた小枝造りの巢の中では、小鳥達が寄り添って暖を取りながら眠りを貪っていた。しかし、枝の隙間から差し込む初夏の陽の光と、巢の遥か下方から聞こえてくる草を踏む軽い音が、彼等を目覚めさせた。羽毛に包まれた首を伸ばすと、巢を支える枝の間から、足音の主の姿が垣間見える。足音の主は皆、アーチをくぐり、足早に先へと急いでいく。

アーチ状の建造物。それは、巨大な門である。

蔦の絡まる門の中央には、古代ルリア文字で、こう書かれていた。

『求めよ　さらば与えられん　大いなる夢幻の力』

しかし、美しい装飾のようなその文字を解読出来る者は、今では極一握りの長老達だけとなっていた。

門を通り抜けた先には、朝露がキラキラと輝く広大な森と、それらを照らし出す眩い朝陽を背にし、赤煉瓦造りの城が、燃え上がるように聳えていた。

門をくぐる者達は、陽が高くなるにつれて、その数を増し、陽の出から一時間程経つ頃には、城へと続く石張りの細い道は人で満ちた。

「おはようございます!」

「やあ、おはよう」

「ねえ、課題出来た?　あたし、全然ダメ!」

足早に歩を進める者達は、声を掛け合いながら、次々に門の中へと吸い込まれていく。彼等の年格好は様々だったが、ただ一つだけ共通点があった。それは、皆が一緒に、フードの着いた墨色の長衣に身を包んでいるということだった。

城へと急ぐ人々に、次々に追い越されながら、一人の少年が門の前で足を止め、眼前に聳える城を見上げた。彼の瞳は、朝陽を受けて深い碧にキラキラと輝いていた。少年も他の者達と同じ墨色の長衣を身に纏っていたが、それは、まだ真新しくみえた。

少年の眼差しの先にある赤煉瓦造りの城、それこそは、夢幻界『ルリア』の力の象徴といわれる『魔法遣い養成学校』であつた。

ルリアに生きる者であれば誰でも、一生に一度は魔法遣いに憧れるものだ。自然の力を自在に司り、風を起こし、雲を呼び、望みの物を瞬時に眼の前に創り出す能力『魔法』は、それに憧れるなどという方が、どだい無理という程に魅力的な能力だ。しかし、生まれながらにその能力を有するのは、ほんの一握りの種族のみ。哀しいかな、他種族に生まれてしまった者が『魔法』の能力を手に入れるためには、能力者に教えを請いながら、何十年、何百年という気の遠くなるような歳月を費やして、一つ一つ技を学び、身に付ける以外に方法は無いのだ。だが、それでも、それがどんなに険しく、長い道程であろうとも、魔法遣いへの憧れを棄て切れない、そんなルリアの民の願いによって、魔法遣い養成学校は創られた。

そこは、魔法遣いを夢見る者が、その夢を叶えるために集う場所であり、個々人の持つ潜在能力を最大限に引き出す方法を基礎の基礎から教えてくれるルリア唯一の学校であつた。それ故、大陸ルリウスを覆うポラリスの森の東隅に、森に抱かれるようにひっそりと佇む五塔造りの赤煉瓦の城は、ルリアの民の憧れなのだ。

しかし、魔法遣い養成学校に入学すれば、即、魔法遣い、……というわけにはいかないのも事実である。魔法とは理論だけで修得出来るものではなく、個々人の潜在能力に依るところが大きい。従つて、魔法遣いとして養成学校を卒業出来るのは、毎年、極一握りの極めて優秀な者達だけなのだ。卒業生がいない年も珍しくない。だからこそ、養成学校の卒業生は、生粋の魔法遣いによって組織され

る『魔曹界』からも一目置かれる、魔法遣いのエリート中のエリートとしてルリア中で認められていた。

「リオ、何してるんだ。遅れるぞ」

『リオ』と呼ばれた少年は、聞き慣れた声と共に髪をクシャクシヤと撫でる優しい手の温もりに応えるように振り返った。

そこには、小麦色の肌に濡羽色の髪と漆黒の瞳、十歳になったばかりという年齢よりも遥かに大人びた、彫りの深いハッキリとした目鼻立ちの少年が立っていた。

自分より頭半分背の高い黒髪の少年に、リオがニコニコと微笑み掛ける。

「おはよう、アルフ。今日も良い天気になりそうだね」

リオは、アルフとは対照的な、月の光に似た柔らかな金色の髪、透き通る白い肌に、シエルピンクの頬と薄紅色の唇をしていた。そして、彼の瞳の色は、ポラリスの森の深緑をそのまま切り取ったような深い翡翠色だったが、陽に透けると深い蒼にも見えた。

不思議な瞳だ、と、アルフは思った。その碧の瞳で真っ直ぐに見つめられ、少し照れくさそうに長めの前髪を掻き上げながら、視線を空へと向ける。朝の陽射しが眩しくて、スツと眼を細めた。

「ああ、そうだな」

口下手なアルフは、何時もボソボソと話す。だが、無愛想な言葉とは対照的に、早い変声期を終えたその声は、しつとりと優しい。

「ねえねえ、二人とも、何やってるのお？ 早く学校行こうよ」アルフとは正反対、高めの声、少し間延びした口調と共に、リオとアルフの両肩に別の腕が絡み付く。「また遅刻しちゃうよお」

柔らかな褐色の髪とトパーズ色の瞳、そばかすだらけの健康そうなローズピンクの頬に、鼻からずり落ちそうに大きな丸眼鏡を掛けた少年が、二人の肩口からチョコンと顔を出した。のんびりとした話し方が、彼にはよく似合っている。

リオは嬉し気に微笑み、褐色の髪の少年に視線を移した。

「ごめんね、ルー。そうだね。昨日も僕に付き合わせて、君達まで授業に遅刻させちゃったんだものね」

「俺は別に構わないぜ。どうせ、授業なんて退屈なだけだしな」

アルフは前髪を掻き上げながら、少し悪戯っぽく笑った。

ルーが無邪気な笑みを満面に浮かべ、アルフの正面に立つ。

「そんなこと言って、アルフ、またサリバン先生と喧嘩しないでよねえ。課題が出来た、出来ないに拘わらず、最短必須履修時間の間は授業に出なきゃならないっていうのは、この学校の決まり。サリバン先生が悪いわけじゃ無いんだからさあ」

窘めるような言葉。

アルフはウンザリした態で僅かに眉を顰めた。

「お前、今日は、やけに優等生振るな」

「えへへ」ルーがチヨコンと舌を出す。「リオの受け売りなんだけどねえ」

「チエツ……」小さく舌打ちすると、アルフは、自分より頭半分背の低いルーの頭を片腕に抱え込み、彼の柔らかな髪をクシヤクシヤと掻き回した。

話下手なアルフにとって、それが飛びっ切り上等の愛情表現であることをよく知っているルーは、くすぐったそうに首を竦めながらも、ニコニコしながら、されるがままになっている。

そんな二人の様子を、リオは幸せそうに見つめた。

今年度の入学式から、既に二ヶ月余りが過ぎていた。

新入生の中でも極めて仲の良い三人は、何時でも何処でも、人目を気にすること無く、こんなふうじゃれ合っている。その微笑ましい姿は、養成学校では既にすっかりお馴染みだ。彼等を追い越し、学校へと急ぐ者達の多くが、暫し足を止め、好意的な視線を彼等に送っていた。

その時、時計塔の鐘の音が高らかに響き渡る。始業十分前を告げる予鈴だ。

「大変！ 急がないと、また遅刻だ。走ろう！」リオが二人を急かす。

アルフとルーは、やれやれという態で顔を見合わせ、小さく肩を竦めた後、リオの後を追って駆け出した。

少年達の小さな背中では、生徒の波に呑み込まれ、すぐに見えなくなった。

第1章 魔法遣い養成学校 No.2

魔法遣い養成学校には三つの規則がある。言い換えれば、規則は三つしかない。

1・制服の着用

1・各課題毎に決められた最短必須履修時間の厳守

1・授業外での魔法使用の制限

それ以外、入学時の年齢も、卒業までの期間も、一切規定は無い。
『魔法遣いに憧れる者に広く門戸を開く』

それが、この養成学校創立者であり、現在も現役トップとして、ルリアの民の厚い信頼と深い尊敬を集める校長先生の方針なのである。

そんな校長先生の理念に感銘し、あるいは、己の潜在能力を信じ、毎年、様々な種族から何百人もが養成学校の門を叩き入学するのだった。

養成学校では、一般教養として、歴史や文化史等のカリキュラムも用意されているが、最も重点を置かれるのは、当然のことながら実践魔法を学ぶ魔法実技の授業である。卒業するには四十七段階の実技課題全てを修得しなければならない。最初の二十段階は基礎課程、残りの二十五段階は応用課程、最後の二段階は卒業課程であり、魔法遣い養成学校の卒業証書兼魔法遣い認定書を手にするためには、これら全てに『優』を貰わなければならないのだ。

しかし、言うは易し、行うは難しとは、よく言ったもので……。

授業が進む中で、生徒達は次第に己の能力の限界を知り、諦め、あるいは絶望し、一人、また一人と養成学校を去っていく。

卒業出来るのは、その苦しみを克服し、己の中に眠る能力を開花させ得た、ほんの一握りの優秀な生徒だけなのである。

魔法遣いになるために用意された、果てしなく長い道程。

それでも、一人前の魔法遣いになるという、たった一つの夢だけを糧に、今年も約三百人が魔法遣い養成学校の新入生となった。

これは、毎年の平均に比して、若干少ない人数と言えた。

新入生が魔法実技基礎課程の第一課題から第七課題までを履修する基礎初等クラスは、AクラスからCクラスまでの三クラス有る。

リオ、ルー、アルフの三人は、そろって基礎初等Aクラスだ。

鐘の音に急かされ、赤煉瓦の校舎の中へと駆け込んだ三人は、人影まばらな構内を慣れた足取りで駆け抜けた。長い廊下と階段が組み合わされた迷路のような構内に、始めのうちこそ閉口したが、今では通い慣れた道。自分の家と同じくらい、よく見知った場所となっていた。

似たような廊下を幾つも通り抜け、塔と塔とを結ぶ吹き抜けの渡り廊下に差し掛かった時、リオに追い付いたアルフが、横を走りながら問い掛けた。

「さつき、何見てたんだ？」彼の視線は、じっと正面に向けられたままだ。「時々、ああして見上げてるよな」

「うん……」リオが照れくさそうに俯く。「学校をね、……見てたんだ。僕も、この学校の生徒なんだなって……、やっと魔法遣いに一歩近付けたんだなって、そう思うと、なんだか嬉しくて……」

「変なお」二人の後方に居たルーが、アルフとリオを追い越しながら、からかうように言った。「一番の優等生のリオが、そんなこと思うなんて、可笑的いや」

「そう、……かな？」リオは少し気恥ずかしげに頭を掻いた。ルーを先頭に、三人が教室へと続く廊下を走る。

途中、チラチラと横目でリオを見ていたアルフは、僅かにリオに身を寄せると、小声で囁き掛けた。

「俺は、可笑的とは思わないぜ」

「え？」

「さっきの話。俺は、お前らしいと思う」

「うん……」リオはアルフの意図を理解し、小さく微笑んだ。「ありがとう。でも、確かにルーの言う通りかもしれないよね。入学して、もう二ヶ月も経つんだもの、そろそろ慣れなきゃ。それに、何時までも遅刻しているわけにはいかないしね」

「まあ……、それはそうだけだな」

艶やかな黒い前髪の奥で、漆黒の瞳が苦笑いを含んだ。

リオが少し悪戯っぽく笑う。

「でも、僕が一番の優等生っていうのは、ちょっと違うと思うよ」

「……何でだよ」訝し気に眉を顰めるアルフ。

リオは楽し気に唇を窄めた。

「僕には、君やルーには到底敵わないことが、まだまだ、たくさんあるもの」

「そんなこと無いだろ」

何時もの謙遜と、アルフは軽く聞き流そうとする。

だが、今回、リオは珍しく引き下がらなかった。

「あるよ。君達が気付いていないだけだよ」

「そうかな」

「そうだよ」

「そうは思えないけど……」

「アルフ、君は……」

二人の会話に、再びルーが割って入る。

「今日は遅刻しないで済んだよ。良かったねえ」

人の話を聞いているのか、いないのか。それがルーの良いところでもあるのだが……。

気が付けば、基礎初等Aクラスの教室の扉は目の前だった。

真っ先に教室に駆け込んだルーに続き、アルフとリオが勢いよく飛び込む。

教室内は生徒達で溢れ、既に席も殆どが埋まっていた。

ざわつく室内では聞き咎められるはずもなかったが、三人は、何

となく足音を忍ばせて教室内を移動した。

リオ達が教室の後方に並んで座れる席を確保し、ホッと一息吐いた時、教室の前方の扉が開き、基礎初等Aクラスの担任であるサリバン先生が、にこやかな微笑みを湛えながら入ってきた。途端に、それまで、うるさいほどに響いていた話声はピタリと止み、生徒達は大袈裟なほどの感嘆の眼差しを先生に向けた。

先生は、艶やかな亜麻色の髪を後頭部で一つに結い上げ、養成学校の規定である墨色の、踝まで届く制服に身を包み、小脇に白い杖を抱えていた。身長よりも少し短く、頭部が渦を巻くように太く丸い白木の杖は、この学校の卒業生が卒業証として校長先生から直に与えられる物であり、空を飛ぶ際にも使われる、魔法遣い養成学校全生徒の憧れであった。

先生は昨年度この学校を卒業したばかりの新任教師であり、平均千年から二千年の寿命を持つルリアの民としては、二百歳そこそこであろうかと思われた。小さな眼鏡を掛けたその顔は充分美しいと言えたが、学問好きの女性に有りがちな、着飾ることには、あまり興味が無い様子であった。お洒落といえば、琥珀色の髪留めと、腰の部分を緩く絞っている組み紐の色が明るいローズレッドという点のみである。

教室は、底に教壇を配した掘り鉢を三つに割ったような扇型の構造をしており、教壇に向かって下る階段状に長机と長椅子が配置されている。リオ達がいる教室の後方からでは、先生の姿は小指ほどにしか見えなかったが、それでも、教卓に右手を乗せて体重を懸け、左手を腰にあてがい、皆の注目を浴びて教壇に立つサリバン先生の姿は、今日も自信に満ち溢れていた。

魔法遣いを目指す生徒達にとって、この学校を卒業し、夢を勝ち取った先生は、正に憧れの存在だ。しかも、若くて美しく、優しい気な女性ともなれば、生徒の大多数はすっかり魅了され、従順な仔犬のような瞳で先生を見つめていた。

生徒達が彼女の一拳手一投足を見守る中、サリバン先生は一つ深

呼吸すると、教室内をゆつくりと眺め渡した。

「今日の授業が、第四課題『物体浮遊』の最終履修となります。今から、第三課題までと同じように確認試験を開始します。対象は身近にある物、何でも構いません。ペン、インク壺、筆箱、……何でもいいわ。私が皆さんの席を順番に回りますから、私の前で実演してみせて下さい。始めにも言いましたが、この課題は、貴方達が第六課題で学ぶ『飛行』の重要な基礎になりますから、おまけは出来ませんよ。みんな、頑張ってくださいね」

女性特有の少し甲高い声に、生徒達の表情が引き締まる。

魔法実技の第一課題から第七課題までが、基礎初等クラスで学ぶ対象となる。このクラスでは、規定の最短必須履修時間を過ぎると、順次、次の課題へ進む。そして、全てに『優』を貰えた者だけが、基礎中級クラスに進級出来るのだ。進級出来なかった者は、七課題全てに『優』を貰えるまで、繰り返し繰り返し練習を続けなければならぬ。

「今回、上手いかなかったとしても、次に頑張ればいいんですからね。皆さんで協力し合いながら、一つづつ階段を昇っていきましようね」

先生は、真剣な生徒達の様子に満足気に微笑むと、次いで、教室中を見渡し、後方隅に座っている月色の髪の少年を手招きで呼んだ。「リオ、貴方には一時限目で完璧な実技を見せてもらったから、今日はいいわ。何時ものように、他のお友達の手助けをしてあげて頂戴」

その途端、教室全体に微かなざわめきが生じ、期待と嫉妬に満ちた視線がリオに注がれた。この三ヶ月余の間、魔法実技の授業の度に繰り返される情景だ。

事の発端は、入学式の翌日。初授業の日の朝まで遡る。

教室へ向かう途中のサリバン先生が渡り廊下に差し掛かった時、彼女を襲った突風。手にしていた授業用の資料が風に浚われ、空へと舞った。

偶然、その場を通り掛かったリオ達三人。初めての場所で迷子になつていたのだ。

資料を追いかける彼女の姿を眼にしたリオは、咄嗟に風を操り、資料を一枚残らず彼女の掌の上にキチンと重ねて戻した。

風を操るなど、上級クラスの技だ。

驚いた先生は、試しに、第一課題の模範演技をリオ達に依頼してみた。

生真面目なリオは、手を抜くことを知らない。彼が皆の前で披露した実技は、先生の予想通り、素晴らしいの一言に尽きた。そればかりか、続くアルフとルーさえも軽々と課題をクリアしたのだ。無論、アルフは気分屋な上に、ほどほどを弁え、ルーは、そんなアルフを真似たので、技もほどほどであったが、それでも初授業の新入生を感嘆させるには充分なものだった。

それ以来、サリバン先生は授業の度に、リオ、ルー、アルフの三人に模範演技を依頼した。

教師としての自尊心よりも、個々人の持つ才能を尊重し、それに敬意を払う。それも魔法遣いとしての立派な分別だと、他の先生達に語っていたらしい。

魔法とは、理論だけで習得出来るものではなく、個々人の持つ潜在能力『夢幻の力』に大きく左右される。その力の大きさは、年齢に全く関係ないと言われてきた。

リオ達の出現は、それを見事なまでに体現していると言ってよかった。

新入生の中でも群を抜いて幼い彼等に出来るのなら、自分にだって……。そんな奮起を生徒達に持つて欲しかった。その意味で、リオ達に実技を披露してもらうことは極めて効果的だと、サリバン先生は信じていたのだ。

今回の課題でも、リオは、はや一時限目で、教卓上の花瓶を軽々と浮き上がらせてみせた。誰もが認めざるを得ない合格だ。

そして、アルフとルーは、と言うと……。

第一課題以降、アルフは気分が乗らないと言って、毎回、最低限のことしかしなかった。ルーに至っては、アルフ以上に気分屋らしく、興味を惹く課題に出会えないからと、こちらもまた、何時も最終履修の時にギリギリで合格していた。実を言えば、二人とも、自分達に向けられる級友の視線の奥に垣間見える負の感情を、敏感に感じ取っていたのだ。

今回も、頬杖をつきながら、つまらなそうに先生の話聞いていたアルフ。面倒くさ気に一言呟く。

「またかよ。いい加減にしろっての」

「アルフ！」

リオは窘めるように小声で言うと、彼の服の袖を軽く引つ張った。アルフが小さく舌を出し、わざとらしく姿勢を正す。皆には、愛想が無く、取っ付き難いと思われるがちなアルフだが、リオとルーの前では、いたって普通の悪戯っ子だ。

少し困った態で肩を竦めた後、リオは急いで教壇へと下りていく。その背中を見送り、ルーはニコニコと手を振った。

いっぽう、アルフは、眉を顰め、口をへの字にまげて机に突っ伏した。リオが先生の手伝いをするのが気に入らないらしい。何時もそうだ。

そんなアルフを横目で見遣り、ルーは小さく笑った。

その頃、教卓では、サリバン先生が満面に笑みを湛え、リオを迎えていた。

「ありがとう、リオ。何時も助かるわ」

リオは笑顔で首を横に振った。

先生がリオの肩に手を置き、教室中を見渡す。

「今から皆さんの席を順番に回ります。頑張ってくださいね。それから、この時間も大切な授業ですよ。先生が行くまでは、何時もと同じように、皆で協力して教え合っているのよ。解らないことはリオに訊いて、少しでも技を磨くよう努力して下さい」

先生は、端から順番に席を回り始めた。

今回の課題は、なかなか高度だ。先生を目の前にした生徒の多くは、汗をかきながら奮闘するが、対象物は、なかなか浮び上がってくれない。焦り、半ベそをかく生徒に、先生は優しく声を掛けた。「先生だって、卒業するまでに何十年もかかったの。それでも、こうして魔法遣いになれたわ。焦らなくても大丈夫よ。貴方達には時間にはたっぷりあるんだから」

その間も、リオは、先生から離れて、級友達の間を行き来していた。その顔には、少し気まずげな笑みが張り付いていた。彼とてアルフと同じ。自分に向けられる周囲の視線に込められた負の感情に気付かぬほど鈍くはない。それでも、リオは先生の依頼を断れないのだ。それで、少しでも誰かの役に立てるのなら……、と。

その時、突然、グレーの髪の少年がリオを呼び止めた。

「先生のお気に入りつてのも、大変だね」

「サライ……」 リオは心底困ったように眉根を寄せた。「そんなこと、ないよ」

だが、サライは、リオの困惑には全く気付かぬ様子で、ニコニコと笑い、話を続けた。

「でも、僕は、まだ君に教えてもらう必要は無さそうだよ」

言いながら、掌の上に置いたペンをじっと凝視する。すると、それは、まるで意志を持った生き物のようにフワフワと宙に浮き上がった。

「サライ、お前、凄いじゃねえか」

「リオと同じくらい出来るんじゃない？」

周囲の者達が、次々に賞賛の言葉を口にする。

サライは顎を突き出し、自慢気に胸を張った。

「魔法遣いを目指そうという者なら、このくらいは出来て当然だと思っけどね」

しかし、視線を逸らした瞬間、ペンは大きく揺れ、そのまま床まで落ちて、リオの足許に転がった。

リオは屈んでペンを拾い上げ、サライに手渡した。

「あ、……ありがとう」

周囲から微かに失笑が漏れる。

サライは気まずげに鼻の頭を掻いた。

リオは気遣うようにサライに微笑み掛けた。

「意識の弦を一本繋いでおければ、視線を逸らしたくらいでは術は解けなくなるよ。大丈夫、少し練習すれば直ぐに慣れてしまうから」
リオの言葉は優しい。けれど、サライの顔に浮かんだ笑みは硬く、ぎこちなかった。

「……やっぱり、難しいよ」

サライは力無く言い、どっかりと椅子に腰を下ろすと、じっと机上の一点を見つめた。

サライが場所を空けたことで、それまで彼の後ろにいた少年が身を乗り出した。少年は、黒い短髪に快活そうな笑みを浮かべ、屈託なくリオに話し掛ける。シューカルク。それが彼の名前であり、皆はシューと呼んでいた。

「なあ、俺、上手く出来ないんだよ。教えてくれよ」

彼は何時もせっかちで、時間を惜しむように話す。それに比べ、リオも、ほんの少し早口になった。

「じゃあ、シュー。そのペンをじっと見て、それが動くことをイメージしてみて」

シューは椅子に深く腰掛け、仰々しく背筋を伸ばすと、リオに言われたとおり、机の上に置かれたペンをじっと凝視した。

「こうか？」

だが、ペンはピクリとも動かない。

ふと気付くと、リオがシューの額に向けて掌を翳し、眼を閉じていた。シューの意識がペンからリオへと移った瞬間、それを見ていたかのようにリオは瞼を上げ、にっこりと笑った。

「僕ではなく、ペンに集中してね」

「……ああ、解った。ゴメン、ゴメン」

シューは恥ずかし気に頭を掻き、再びペンを凝視した。

始めのうちは何の変化もなかった。

しかし、突然、ペンがゆっくりと動き始める。固唾を呑んで見守っていた仲間達は、次々とシューの背中を叩いて成功を祝福した。

「何だよ。お前、出来るじゃん」

「凄いわ。ねえ、どんな感じなの？」

シューは、信じられないと謂わんばかりにリオを見つめた。

「……お前、……何かしたんだろう」

リオは微笑んだまま首を横に振った。

「ううん。これは君の力。僕はただ、それを引き出すお手伝いを、ほんの少し、しただけ」

「ホントかよ」

「うん。だから、君が今念じたように、もう一度念じてみて。きっと、直ぐにコツを掴めるはずだから」

シューは大きく頷くと、先程にも増して真剣にペンを凝視した。

第1章 魔法遣い養成学校 No.3

リオ達が交わす会話は、教室の隅にいるアルフとルーのところまで届かない。だが、何時ものように笑顔で対応しているリオの様子を見て、ルーはニコニコと微笑んだ。

「ねえ、アルフ。リオって凄いな。ホントに先生みたいだよ」

「ふん。無理しやがって……」

アルフは、さもつまらなそうに、机の上で組んだ腕の上に顎を乗せ、突っ伏しながら一点をじっと凝視していた。明らかに機嫌が悪い。彼の視線の先では、瑠璃色の文鎮が小さな円を描きながらくるくと宙を舞っていた。それは、リオお気に入り文鎮で、羽根を休めた小鳥の形をしている。

「アルフってば……」

ルーは少し悪戯っぽく笑うと、アルフに向かって掌を翳した。すると、今までアルフの側で回っていた文鎮が突然動きを止め、吸い寄せられるようにルーの掌の中にすっぽりと納まった。

「もう！ ボクの話もちやんと聞いてよね」文鎮を机の上に置く。

「アルフは、いったい何が気に入らないの？ リオがみんなと仲良くするの、嫌なの？」

「そ……、そんなことないよ」突然の問いに焦るアルフ。「ただ……」

「ただ？」

問い詰めるが如く顔を寄せるルー。

何時もはボウツとしてるのに、こういう時だけは、めちゃくちゃ勘がいい。アルフは心の中で軽く舌打ちし、観念したとばかりに溜息を吐いた。

「ただ……、あいつ、あんなふうに入前が出るのって、ホントは凄く苦手なんじゃないかなって思ってたさ」

大きな丸眼鏡の奥で、トパーズ色の瞳が大きく見開かれる。

「どうして？」

小首を傾げるルーを横目で見遣り、アルフは再度、前よりも深い溜息を吐いた。納得するまでルーは引き下がらない。よく解っていた。

「どうしてって……、何となく、そんな気がするんだよ。無理してるんじゃないかって」

「そうかなあ……？」訝しむ態でルーが肩を竦める。「ボクには、そうは見えないけどなあ。リオは、何時だって、みんなのために何かしたいと思ってるよ。そう出来ること、凄く嬉しいって思ってるよ」

「そうだな」アルフの口許に苦笑いが浮かぶ。「俺が苦手だからって、あいつもそうだって決め付けるのは、良くないよな」

応えて、ルーがクスツと笑う。

「アルフ、変なお」

その時、トパーズの瞳が、教室の隅にいる独りの少年の姿を捉えた。惹き付けられるように視線を向ける。

少年は、たった独り、肩を怒らせながら一心に眼前のインク壺を凝視し続けていた。けれど、彼の意に反し、インク壺が動く気配は無い。少年は、今日何度目かの深い溜息を吐くと、淋し気に肩を落とした。

ルーが椅子から立ち上がる。

それを追ってアルフは顔を上げた。だが、ルーの視線を辿るだけで何も言わなかった。

ルーは小走りで少年に近付くと、明るく声を掛けた。

「ねえ、アース。ボクとアルフね、向こうの席に居るんだよ。一緒にやらない？」

『アース』と呼ばれた少年は、突然頭上から降ってきた声に心底驚いたようで、大きな瞳を更に見開いてルーを見上げた。亜麻色の髪とスミレ色の瞳が印象的だ。後手に腕を組み、小首を傾げて微笑むルーを見つめ、アースは僅かに唇を動かしたが、それは声にはな

らなかった。

「ごめん……」最初の勢いは何処へやら、ルーは困惑し、表情を曇らせた。「ボク、また驚かしちゃったのかな？」

アースは何度も大きく首を横に振った。けれど、下を向いたきり何も言いはしなかった。

ルーが気まずげに頭を掻く。

「ごめんね。ボク、もっと気を付けないといけないよね。ボクは独りでいるのが嫌いだけど、みんなが同じように思ってるわけじゃないんだもの。今、アルフに言われたばかりなのに……。ダメだね、ボク」ちよこんと頭を下げる。「ホントにごめんねえ」

それだけ言い残し、背を向けると、ルーは人込みを縫うように自分の席へ戻っていった。

遠ざかる褐色の髪を、アースは黙って見送った。スミレ色の瞳は眩し気に細められ、口許には微かな笑みすら浮かんでいた。

頭を掻きながら席に戻ったルーに、アルフが素知らぬ振りで声を掛ける。

「また振られたのか？」

「うん……。今日もダメだった」ルーが肩を落とし、力無く首を横に振る。「あの子、何時も独りぼちだから、友達になりたいなって思ってるんだけど……。ボクのお節介なのかなあ」

次いで、自分を元氣付けるように努めて明るく言う。

「でもね、この間、やっと名前だけ教えてもらえたんだよ。アスナンって言うんだって」

「アスナン？」確認するように繰り返したアルフは、親指を噛み、視線を落とした。

ルーが訝しむ態で問い掛ける。

「なあに？　どうかしたの？」

暫し考え込んだ後、アルフは自分の記憶を探るように眉根を寄せ、少し躊躇いながら口を開いた。

「アスナンって……。まさか、アスナン・ポーポレイルじゃ、……」

ないよな？」

ルーは首を傾げた後、それを横に振った。

「ファミリーネームは知らない。アルフ、あの子のこと知ってるの？」

アルフは首の後で腕を組み、口許を少し歪めた。

「ポーポレイルならな。……って言っても、名前を知ってるってだけだよ」

「どうして？　ポーポレイルって、有名な人なの？」ルーが問う。
アルフは驚きを隠すこと無く答えた。

「お前、ホントに知らないのか？　ポーポレイル家といえば、魔曹界きつての名門だろ？」

「ボク、知らない」首を横に振る。

軀を反らし、アルフは半ば独り言のように呟いた。

「確か、ポーポレイル家の独り息子の名前が『アスナン』だったはずだ。でも……」

「でも？」

「そいつ……、ホントにポーポレイルだとしたら、どうして、この学校にいるんだろう。ここは魔法遣いになるための学校なんだぜ。名門魔法遣い一族の跡取り息子が、養成学校で勉強することなんてあるわけないよな……」

訳が解らないとばかりに、アルフは乱暴に前髪を掻き上げた。

いっぽう、ルーは素直に驚きを口にする。

「へえ……。あの子、そんなにすごい家の子なんだ。でも……」瞳に微かに困惑の色を浮かべ、首を傾げる。「……家の名前、言いたくなさそうだった。なぜだろう」

「まあ、名門には名門の事情ってもんがあるんだろう。詮索するのは、やめようぜ」アルフが頬杖をつきつつ言う。

ルーは不満そうな声を上げた。

「解ってるよお、そんなこと。ただ……」

「ただ？　何だよ」先を促すアルフ。

ルーは照れくさそうに笑った。

「あの子ってね、ボクに、……リオと出逢ったばかりの頃のボクに、何となく似てるんだ。何時もおどおどしてて、自信無さそうで……。だから、放つとけないっていうか……。友達にね、なれるかと思っただ。君達にも紹介したいな。綺麗なスミレ色の瞳をしてるんだよ」

「そうか……」

アルフは、それ以上訊かなかった。

ルーも、それきり黙り込み、所在な気に自分の羽根ペンを宙に飛ばし始めた。

その横では、瑠璃色の文鎮がくると回っている。アルフがやっているのだ。

そんな二人に、周囲が感嘆の眼差しを向けていることに、アルフもルーも全く気付いてはいなかった。

程無くして、二人の前にサリバン先生が現れた。いよいよ試験だ。二人揃って立ち上がる。その間も、羽根ペンと濃紺の文鎮は、くるくると小気味良く二人の周りを回り続けていた。

ルーはニコニコと愛嬌たつぷりに、アルフは上目遣いで挑むように、先生を見上げた。試験開始の掛け声を待つ。

だが、そんな二人の思いに反し、先生は、彼等の周囲を回り続けているものに気付くと、大きな溜息を吐いて腰に手を当てた。

「貴方達は、……いいわ」

それだけ言い、次の生徒へと視線を移す。

咄嗟に、アルフは文鎮を空中で掴み、そのまま身を乗り出すように机に手を付いた。立ち去る先生の背に向かって言葉を投げつける。

「チョツと待てよ。こういうことだよ」声は明らかに不服そうだ。

「なんで俺達は試験してくれないんだよ。他の奴等と同じようにやってくれよ」

肩越しに振り返る先生。肩を竦め、首を横に振る。

「……それだけ見れば、充分よ」次いで、気付いたように小首を傾げ、胸の前で腕を組むと、躰ごと振り返る。「そうね。ちゃんとやってなかったわね。……合格よ。二人とも、第四課題合格です」

その言葉にやっと納得したのか、アルフは不機嫌そうながらも勢いよく椅子に腰を降ろした。

彼の頭上に、先生は少し淋し気な視線を落とす。

「……ねえ、アルフ。君は……」言い掛けたが、上目遣いに見上げる少年の射るように鋭い漆黒の瞳に気圧され、一步後退る。「いえ、……いいわ。また、後でね」

その時、突然、歓喜の声が教室中に響いた。

「浮いた！ 浮いたよ！」

声の主はシユーだった。

教室内全員の視線がシユーへと注がれる。けれど、当のシユーは皆の視線などお構い無し、喜びに顔をほころばせ、次々、周囲の友人達に飛び付いた。

「すげーよ。ホントに出来ちゃったぜ。これなら俺、本物の魔法遣いになれるよ！ リオの御陰だよ。ホント、すげーよ、あいつ！」

だが、シユーの歓喜の言葉は、教室の中央からあがった低い声によって遮られた。

「おい、騙されんなよ」

途端に、それまで喜びに頬を上気させていたシユーの表情が強張る。彼は声の主を見付けると、憤慨も露わに言った。

「……今のは、クワイだな。何だよ。俺が嘔吐してるんでも言いたいのかよ！」

本気で喰って掛かるシユー。

「お前が嘔吐いてなきゃ、その金髪坊やが何かしたんじゃないのか？」

クワイは、まるで周囲を煽るかのように、教室中に響き渡る大声で続けた。鮮やかな葡萄色の髪に、土器色の肌。灰褐色の瞳が印象的だ。

「考えてもみろよ。そんなチビが、先生まで感心させるような魔法、遣えるなんておかしいんだ。何か裏があるに決まってるじゃねえか。みんな、そいつの点数稼ぎに利用されてるだけだよ。騙されてるだけなんだよ！」

「そんなこと……」

シユーは言いかけたが、先程の勢いは何処へやら、声は弱々しく、それきり黙りこんでしまった。先程、自分に向かって手を翳していたリオの姿を思い出し、確かにクワイの言うとおり、もしかしたら自分一人の力ではないのかもしれないという思いが頭をもたげたのだ。

その時、リオが静かに口を開いた。

「ペンを浮かせたのは、間違いなくシユー本人の力だよ。僕は何もしていない」

「どうだかな」

リオの言葉を、クワイが軽く受け流す。

シユーの隣にいた少年が、最後の抵抗を試みた。

「でも、俺、シユーの側でずっと見てたけど、今はシユーが自分でやったんだぜ。リオは別の奴の相手をしてたんだから、何か出来るわけないだろう？」

数人が、同意を表し頷く。

だが、クワイは、そんな抗議の言葉すら鼻で笑い飛ばした。机の上に乗せた足を組み替えると、蔑むようにリオを見遣り、口許に意地悪な笑みを浮かべた。

「まあ、いいさ。そいつのこと信じたいなら、そうすればいいよ。でもな、どうせ、そいつは、影でお前らのこと笑ってるんだぜ。せいぜい気を付けるんだな」

「いい加減にしろなさい！」腰に両手を添え、サリバン先生がクワイの目の前に立ちはだかった。「それだけ言うからには、クワイ、今回は大丈夫なんでしょうね？ 楽しみにしているわよ」

クワイは気まずげに頭を掻いた。

次いで先生は、意気消沈した態のシユーに向き直る。

「シユー。何をしよげてるの？ 私の前で成功しないと、合格にはならないのよ。さあ、がんばって」

教室内のあちらこちらから小さな笑いが漏れ、場が和んだ。

しかし、そんな和やかな雰囲気に取り残された者が三人……。

クワイとリオ。

そして、アルフである。大切な友人に対する謂れのない中傷を笑って受け流せるほど、彼は大人ではない。

「また、クワイかよ……！」立ち上がりしな、そう悪態を吐くと、人混みを掻き分けた。

いっぽう、シユーは怒り心頭、再びペンをじっと凝視し始めた。

そんなシユーを心配そうに見つめるリオに、一人の少女が声を掛ける。

「リオ、気にしないほうがいいわよ。クワイが貴方に突っ掛かるのは何時ものことじゃない。出来る子は嫉妬されるものなのよ。私は君のこと、そんなふうには思わないからね」

リオは笑顔で少女に応えようとした。けれど、その笑みは微妙に歪んでいた。

その時、誰かがリオの腕を掴んだ。振り返る。そこには、顰められた一対の漆黒の瞳があった。

「リオ、行くぞ」

「アルフ……」

「あんなこと言われてまで、お前が、こいつ等に教えてやる必要なんかないんだよ」

アルフはリオの腕を引っ張り、ルートの待つ席へと向かう。

だが、二人が中央の席を横切ろうとした瞬間、背に投げ付けられた、先程と同じ声を耳にするや、アルフの足はピタリと止まった。

「そう、そう。お坊ちゃま達は、そうやって連んで逃げてりゃいいんだ。先生の真似事なんて、余計なお世話なんだよ」

振り返るアルフ。その眼に、挑発的に笑うクワイと、彼の周囲にたむろする数人の若者のニやついた笑みが映った。

にわかに、アルフの表情が厳しいものになる。

「何だと……」 噛み締めた奥歯の隙間から言葉が漏れた瞬間、黒髪が踊った。軽々と机を飛び越え、掴み掛からんばかりにクワイに詰め寄る。「てめえ……、大人しくしてりゃ、図に乗りやがって……！」

同時に、リオがアルフを追った。

「ダメ、アルフ！」 友の腕にしがみ付くと、それがクワイに伸ばされるのを必死で制した。「お願いだから、やめて！」

「こら、クワイ！ アルフも！ 今は授業中よ。いい加減にしなさい！」

教室中にサリバン先生の甲高い怒声が響く。

一瞬、皆の動きが止まった。

先生は、さも困ったという態でクワイとアルフに駆け寄ると、腰に両手を添えて彼等の正面に立った。思い切り厳しい表情で二人の生徒を見下ろす。

「クワイ。リオは私がお願いして授業のお手伝いをしてもらっているの。不満があるなら私に言いなさい。それから、……アルフ！」

唇を噛み、上目遣いで睨み付けてくる漆黒の瞳に、一瞬気圧されつつも、彼女は何とか教師としての威厳を保った。

「どんな理由があろうと、喧嘩はいけませんよ。全てを力で解決しようだなんて、人間と同じ発想です。慎みなさい」

アルフの唇が不満気に歪み、何か言い掛ける。

その瞬間、彼の唇をリオが横から掌で押さえ付けた。そのままペコリと頭を下げる。

「すみませんでした、先生」

先生の表情に困惑の色が浮かぶ。

「貴方はいいのよ。貴方を叱ったんじゃないんだから」

「でも、原因は僕ですから」リオは引かない。

逆に、口を塞がれたアルフの方が、眉間に皺を寄せて先生を睨んでいる。

先生は一つ大きく溜息を吐くと、頭を軽く横に振った。

まだだ……。

もう、何度目だろう。何時も、自分は何も言えなくなる。理由は明確だ。リオの言葉が正論なのだから、反論の余地はない。

確かに、クワイとの関係が、……それが、たとえ、クワイの一方的な嫉みの感情によるものだとしても……拗れているのはリオの方だ。アルフは、それを庇っているだけ。

それくらいのこと、解っている。だが、自分が頼んでリオに助手をしてもらっている以上、この場でリオを叱ることは出来ない。彼女のそんな心理を見抜くように、教師としての未熟さを無言で指摘

するように、リオは、原因を曖昧にすることを決して是とはしない。リオは良い生徒だ。優秀で、素直で、文句の付けようが無い。しかし……。

サリバン先生は小さく肩を竦めた。

「ごめんなさいね、リオ。今日は、もういいわ。ご苦労様」

ぎこちない笑みを浮かべると、くるりと背を向け、次の生徒達の指導へと意識を集中する。

その時になって、アルフは、ようやくリオの拘束の手から逃れた。言い足りない文句を、せめて、もう一言なりと投げ付けてやろうと、人込みの中、相手を探す。

鮮やかな葡萄色の髪は直ぐに見付かった。リオのことなど忘れたかのように談笑する仲間達の中、クワイだけは、先程と変わらぬ苦々しい視線をリオに投げ付けていた。

アルフが僅かに眉間に皺を寄せ、視線を細める。

リオに無理やり腕を引っ張られ、渋々席へと戻る間中、アルフはクワイを睨み続けた。そして、席に戻った途端、急に口許を笑みの形に歪め、声高に言い放った。

「言いたい奴には言わせておくさ。負け犬の遠吠えなんか、痛くも痒くもない」

瞬間、クワイの頬が怒りでカッと紅潮する。

それを確認し、更にクワイの気持ち逆撫をするように、アルフは、わざと楽し気に声を上げて笑った。クワイの嫉妬の矛先を、リオでは無く、自分へ向けさせたかった。これ以上、リオを傷付けたく無かった。そのためなら、いくらでも憎まれ役に徹してやる。笑みを浮かべるアルフの漆黒の瞳の奥に、堅い決心が漲っていた。

笑い声を上げたまま、アルフは蹴るように席を立つと、扉を開けて教室を後にした。

「アルフ！」

彼を追って、ルーが部屋から出ていく。

その様子に、周囲がざわめき始めた。

「先生！ すみません！」 囁き交わす声を遮るように、リオの澄んだ声が響いた。

振り返る先生の眼に、揺れる金色の髪が映った。

「退室します！」

直後、リオも教室を飛び出した。

第1章 魔法遣い養成学校 No.5

「アルフ！ 待つて、アルフ！」

校庭を横切ろうとするアルフに、なんとか追いついたりオ。彼の腕にしがみつく。

アルフは渋々足を止め、自分より背の低い友を見下ろす。声には怒りが露だ。

「お前、あんなこと言われて悔しくないのか？ 俺は我慢出来ないぞ！」

それでもリオは、アルフの腕に縋り付いたまま、決して、それを離そうとはしなかった。

「僕は平気。大丈夫だよ。だから、お願い、もうこれ以上、喧嘩なんかしないで！」

懇願するリオ。

アルフには、その手を振り払うことが出来なかった。眉間に皺を寄せ、視線を逸らす。

「お前……、何時だってそうだよ。どうしてだよ。どうして、我慢なんかするんだよ。何時も、凄く辛そうな顔してるじゃないか」

「アル……」

我が事のように憤懣を吐き出す友の姿が辛かった。リオは唇を噛み締めると、アルフの顔を両手で挟み、自分の方に向けさせた。

「何す……？」

アルフは身を仰け反らせ、逃げようとしたが、リオは両手を彼の頬に添えたまま、鼻の先がアルフの鼻にぶつかるほどに顔を近づけた。そして、黒い前髪を両手で掻き分けると、漆黒の瞳を真っ直ぐに覗き込んだ。

アルフの頬がカッと朱を帯びる。

けれど、そんなことにはお構いなし、リオは訴えるように言った。
「アルフ、君こそ、どうしてそんなに怒るの？ 君が何か言われた

わけじゃないんだよ。それなのに……」

「お前のことだから、余計に腹が立つんだろう！」

深い黒の瞳が、射るようにリオを見る。

「どうして、なんて訊くなよ。俺だって、解んないよ。でも……」
恥ずかし気に視線を逸らす。「友達って、そういうもんだろ？」

リオは驚きに眼を見開いた。その視線が柔らかな笑みに変わる。
そのまま、こつんとおでこをぶつけた。

「……ありがと、アルフ」閉じた瞼、長い睫が微かに震えた。「ホントはね、さつき、君が来てくれて、……凄く嬉しかった。気にしない、気にしないって思っけていても、やっぱり、あんなふうに言われるのは、正直……、辛いもの」

「リオお……」やっと二人に追い付いたルーが、リオの服の裾を掴んで引く張る。「アルフを叱らないで。ボクだって、リオがあんなふうに言われるなんて嫌だよ。凄く嫌なんだよ」

「解っているよ」

柔らかな笑みをルーに向ける。その視線は、再びアルフへと向けられた。

「君が、僕のことを本当に心配して怒ってくれたんだっていうことは、解っている。凄く嬉しいよ。でもね、さつきみたいなことは、金輪際しないって約束して」碧の瞳が揺れる。「こんなつまらないことで、もしも君達が怪我をするようなことにでもなったら、僕、どうしていいか解らない。そのことの方が、僕には何十倍も辛いことなんだよ。だから、お願い。もう二度としないって約束して。ね？」

朝露に輝く新緑のように穏やかで澄んだ瞳に間近から見据えられ、アルフの怒りは、恥ずかしさと気まずさに取って代わった。アルフは、照れくささからリオの両手を少し乱暴に退けると、わざと不満気な表情で言った。

「……解ったよ。約束するよ」

その時、終業の鐘の音がポラリスの森に高らかに鳴り響いた。

第1章 魔法遣い養成学校 No.6

リオは、嫌がるアルフを無理に引つ張って、教室へ戻った。どんな理由があるにしろ、授業中、教室を飛び出したことは良くない。それを先生に謝るためだ。

二人の後にルーが続く。ニコニコとした彼の表情からは、罪悪感の欠片も感じられない。ルーらしいといえば、らしいのだが、これから叱られに行くことを認識しているのかというと、極めて怪しくなる。

リオが全体重を掛け、教室の重い扉を押し開ける。

案の定、サリバン先生は教室に居た。リオ達の姿を確認すると、ニツコリと笑い、手招きする。

三人が教室に入り、扉が閉まるのを確認してから、リオはペコリと頭を下げた。

「勝手をして、すみませんでした」

「もう、いいわ」溜息が、そのまま言葉になる。「でも、もうやめてね。他の子が真似すると困るから」

「はい」答えて、再び頭を下げる。

不満気なアルフは、リオに頭を無理やり押さえ付けられ、首だけを前に折った。ルーがそれを真似る。

これで何とか、生徒と教師双方の体面は保てた。そのことに安堵し、リオが二人を促して扉に手を掛けた時、サリバン先生の戸惑い気味の声が、彼等を引き止めた。

「ねえ、アルフ、ルー。貴方達、本当は出来るのに、どうして、やる気を出してくれないの？」

振り返るアルフ。呆れた態で唇をへの字に曲げる。答える気は無いようだ。

リオが友の背を軽く押す。

黒髪の少年は、金髪の友に視線を投げると、肩を竦め、気だるげ

に口を開いた。

「必須履修時間の間は、出来ようが出来まいが、どうせ授業には出なきゃならないんだ。何をしようか俺の勝手だろう。俺は、寄り道するつもりはないけど、無駄なことをするつもりも無い」

「無駄なことって……」先生の美しい眉が困惑に歪む。「始めから真面目にやってくれば、リオと同じように、他のお友達に教えてあげることも出来るのよ」

「友達なんかじゃない」

強い怒気をはらんだアルフの声が、彼女の言葉を制した。リオが止めるのも聞かず、アルフの言葉は続く。

「同じ教室にいるから友達だなんて、そんなの、あんた等の勝手な思い込みだ。俺は、他の奴等のこと、友達だと思ったことなんて一度も無い」

気圧され、先生は我知らず一歩後退った。それでも、その場は何とか持ち堪える。

深い溜息を吐きつつ、視線を褐色の髪の少年へと移す。

「……ルーは？」

「理由なんかないよお」間延びした声が答える。

「それなら……」

「でも、ボク、リオみたいには出来ないもん」

先生は、ぐったりと椅子に座り込み、頭を抱えた。縋るような視線を金髪の少年に向ける。

「リオ、貴方から何とか……」

「サリバン先生」

「なあに？」指先で眼鏡を押し上げる。

だが、少年の薄紅色の唇が紡いだ言葉は、彼女の期待とは明らかに違っていた。

深い碧の瞳が、ほんの少し細められる。

「生意気を言うようですが、僕は、自分がそうしたいから、しているだけです。僕がしているということを理由に、僕と同じことをア

ルフやルーに強要するのはやめてください」

穏やかな口調ではあったが、彼女の口から以後の言葉を奪い去るには充分だった。

再度、ペコリと会釈し、扉を抜けて立ち去る三人の生徒。

彼女は、彼らの背中を無言で見送ることしか出来なかった。

大きな溜息と共に、両手に顔を埋める。

つい先頃、入学したばかりの幼い新入生を嗜めることすら、自分には出来ないのか？ 教師としての自信が揺らぐ。

その時、微かな音を伴い、教室の扉が開いた。

顔を上げた彼女の視線の先に、雲のように白く豊かな口髭を蓄えた老人の姿があった。

「校長先生！」

サリバン先生は慌てて席を立った。そのまま深く腰を折る。

「してやられましたな、先生」深く穏やかな声。

サリバン先生は気まずさにカツと頬を紅潮させた。

「見て、いらしたんですか？」

「覗き見は私の主義ではありません。ですが、聞こえてしまいましたね」

彼女の頬が更に紅くなる。

校長先生の白い髭の奥で、口許が僅かに動いた。彼は、ゆっくりと歩を進めながら、右手で彼女に腰を下ろすよう促し、自らも彼女の斜向かいの席に静かに座った。

サリバン先生は、腰掛けるなり、頭を抱えて大きな溜息を吐いた。

「私……、時々、教師としての自信を無くしてしまいそうになります」もう体裁に拘ってなどいられない。そんな口振りだった。「あの三人は、本当に優秀なんです。多分、この学校始まって以来の……。でも、優秀過ぎて、時々怖くなります」

『あの三人』とは、無論、リオ達のことだ。

校長先生は、穏やかな口調のまま先を促した。

「何故ですか？」

彼女の話は、再度、溜息で始まった。

「ルーは無邪気なだけですし、アルフは反抗的な生徒。あの二人のようなタイプには、よく出会います。苦手ですけど、彼等の気持ちも解らないわけじゃないんです。でも、リオは……」一瞬言い淀み、僅かに声を潜めて続ける。「あの子は、とても良い子です。周りを思い遣り、親切で、本当に良い子なんです。ただ、そういうところが、余計に子供らしくないといえますか……」

校長先生の白い眉の奥で、深い蒼の瞳がスツと細められる。

サリバン先生は、誘われるように言葉を継いだ。素直な思いが、そのまま唇から溢れる。

「決して強い言葉で反抗してくるわけではないのですけれど、その……、あの子の言葉は……」深い溜息。「あの子には、何も言い返せなくなります。時々、解らなくなるんです。あの子が何を考えているのか……」

「サリバン先生。教師は逃げてはいけません」

穏やかな声が、そっと彼女の心を包んだ。

顔を上げた視線の先で、蒼の瞳が優しく微笑んでいた。

校長先生の言葉は、その視線のままに静かだった。

「技を教えるだけが教師の役目ではありません。子供は子供なりに多くの悩みや苦しみを抱え、それと闘いながら成長しているのです。彼等を一個の対等な存在として認め、それでいながら、彼等より僅かに多いであろう人生経験に基づいて導く。それも、教師の大事な役目ですよ」

力なく俯く若い女教師の肩に、大きく温かな手が添えられる。その温もりは、彼女の心深くに染み渡った。

サリバン先生は、一つ大きく頷いた。

「はい……」

第1章 魔法遣い養成学校 No.7

入学式から三ヶ月ほどが経った、ある日……。

一日の授業を終えたりオ、ルー、アルフの三人は、何時ものように揃って寮に帰ろうと、校門へと続く石畳の道を歩いていた。

魔法遣い養成学校は、原則として全寮制である。ルリウス全土から集まる生徒達の生活を配慮しての方針というのが表向きの理由であり、事実、決して強制ではなかった。何らかの理由により、入寮せず、実家や知り合いの家から通う者も、極少数ではあるが、確かにいた。しかし、大陸に点在する様々な部族、種族の寄せ集めである生徒達の殆どは、入学に当って、学校側から入寮を勧められる。それは、原則全寮制とする真の理由が、通学や生活の便という以上に、種族という壁に邪魔されること無く、友情を育み、勉強に没頭出来る環境を生徒達に提供することにあるためだった。リオ達三人も、当然のように寮住まいをしていた。

スキップしながら先頭を歩いていたルーは、後ろの二人を振り返ると、満面に笑みを湛えて言った。

「今日はさ、すつごく天気がいいし、部屋に帰って教科書しまったら、森に行ってみようよ。ね？」

「俺は、構わないぜ。リオは？」

横を歩くリオを見遣り、アルフが訊いた。

「リオが小さく微笑む。」

「そうだね。気持ち、良いかもね」

「じゃ、決まりね！」

ルーは、空に向かって右腕を上げると、二人の背後に廻り込み、急かすように背を押しながら、校門へ向かって駆け出した。

「わあ！」ルーが両腕を広げ、森の深部に向かって走り出す。「森の中って気持ち良いよねえ。ボク、大好き！」

森を訪れて、何時も一番喜ぶのはルーだ。彼の能力は森の波動に似ている。そのため、落ち着くのだろう、……と、これはリオの言だが。

無論、リオにしるアルフにしる、堅苦しい学校生活よりも森の中で過ごす時間の方が何倍も気が休まる。そういうわけで、彼等は暇を見付けては森に遊びに来ていた。

寮の部屋に立ち寄ったため、今は制服ではなく、普段着だ。普段着といっても、制服の丈を詰め、フードを取り去って、不要になった布をズボンに仕立て直したものだから、見た目は制服とあまり変わらない。私服については特に規定はないのだが、彼等は古くなった制服を学校から払い下げてもらい、仕立て直して普段着にしているのだ。

実を言えば、そういう生徒は少なくない。

種族によって服装は様々。それを気にせず、制服と同じように着られる普段着は、魔法を学ぶことのみに情熱を傾ける生徒達にとっては、かえって都合が良い。学校の側に、仕立て直し専門の老女が居り、彼女の生活が成り立っているのは、ひとえに、こういう理由があるためだ。

「ねえ、リオお。ここの森って、ラウ先生のお家の周りに似てると思わない？」

「ご機嫌のルーは、何時もより多弁である。」

「うん。そうだね」
勿論、リオもニコニコと笑みで答える。気分が良いのは彼とて同じだ。

「へえ、そうなのか？」

「うん」

問い掛けるアルフに、リオは頷き、チョツと考えてから言葉を継いだ。

「ねえ、アルフ。良かったら……」黒髪の友の前に廻り込み、顔を覗き込む。「今度、一緒に帰ってみたい？」

「わあ、リオ。それいいねえ」ルーは、こういう場合に限って地獄耳だ。両腕を広げ、駆け寄ってくる。「そうだよ、アルフ。そうしようよ。ね？ 先生、きつと喜ぶよお」

リオと並んで、ルーにまで顔を覗き込まれ、アルフは僅かに身を引いた。

しかし、アルフは解っていた。これが、彼を気遣ったの申し出であることに。

アルフは、家に帰れない。学校を卒業し、一人前の魔法遣いとして認められるまで、家には帰らない。そう決めていた。

けれど、そうは言っても、まだ、僅か十歳の子供である。温かな温もりが恋しくなることもある。

「……うん」少し照れくさそうにアルフが頷く。

それを確認し、リオとルーはニツコリと笑い合った。

ルーが両手を空に向けて高々と挙げる。

「それじゃあ、今日は、かくれんぼしようよ。きつと楽しいよお」

「おう」アルフが嬉し気に答える。

しかし、これには予想外に待ったが掛かった。リオだ。

「陽の光が茜に染まる時には、かくれんぼは、しちやダメだよ」

アルフとルーの視線が、彼に集まる。

リオは、不安気に僅かに眉を顰めた。見上げた空は、事実、陽が西に駆け降りていく途中である。

「森に魅入られて、誘い込まれる。一度囚われてしまったら、二度と人の世界に戻れなくなるよ」

「え、そうなの？」不思議そうに問うルー。

だが、アルフには驚いたふうはない。

「知ってるさ、それ位」平然と言い放つ。

ルーの視線がアルフに向く。

「アルフ、知ってるんだ」

「ああ……」逆に、訝し気に傍らの友を見下ろす。「ルー、お前、ホントに知らないのか？」

「うん……」力無く肩を竦める。

その理由に、アルフは思い当たった。

ルーには幼い頃の記憶がないのだ。ルリアの子供であれば誰でも知っている遊びの大原則ですら知らないのも無理はない。

アルフは、わざと然り気ない態を装った。

「俺は小人族に拾われて育てられたからな」

あつさりとした言葉だが、内に潜む意味は深い。

ルリアの民の寿命は千年から二千年。長命である分、子供は少なく、とても大切にされる。実の両親が生きているのか、死んでいるのかさえも解らない状況下にある子供など、皆無と言っている。そんな世界で、リオ、ルー、アルフの三人は、文字通り『親』がいない。リオとアルフには、それぞれに育ての親はいるが、実の両親のことは一切解らない。ルーにいたっては、養成学校入学までの一期、リオと一緒に、子供のいないラウ夫妻の許で世話になっていたが、リオに出逢う以前の記憶は全く無い。そんな三人が、意図したわけでも無いのに、まるで引かれ合うようにポラリスの森で出逢った。奇跡と言っても決して言い過ぎではない。

アルフの言葉を、リオが補足する。

「小人族は、森に根付いて生きる民。森との関係については詳しいからね」

「まあな。ガキの頃、親父に散々聞かされたっけ。森の神や、木の精霊の話」

「ふーん」

ルーは興味深気に聞いている。

アルフは苦笑いを漏らすと、ルーの頭をクシャクシャと撫でた。

「でも、まだ陽は高い。大丈夫さ。夕方までには寮に戻ろう」

「うん。そうだね」リオにも異存はない。

二人の言葉に、ルーの瞳が輝いた。再度、右腕を高々と挙げる。

「じゃあ、ジャンケンしよ。鬼を決めるよお」

普段、強がっている者でも、どんなに腕力に自信があっても、ジャンケンとは別の次元の勝負である。そのことを、今日もアルフは痛感させられることになった。

自分の握り拳を見つめながら、ガツクリと肩を落とすアルフ。

「アルフが鬼ねえ」屈託の無いルーの声に、現実へと引き戻される。「じゃあ、百数えてから探すんだよ。ズルは無しね」

ルーは楽し気に、リオはアルフを気遣いながら、それぞれに隠れる場所を求めて駆けていく。

木の幹に凭れ、眼を瞑って数を数えながら、アルフは一つ大きな溜息を吐いた。

（こんなふう遊ぶのは、何年振りだろう……。）

ヨチヨチ歩きの際は、村の子供達とも良く遊んだ。大人達も、アルフと自分達の耳や顔の造作の違いを、あまり気にもせず、優しくしてくれた。

けれど、彼の背が伸び、小人族ではない身体的特徴がはっきりと現れ始めると、昨日までの友人は、気味悪がって彼に近付かなくなり、大人達は彼をあからさまに嫌悪した。

孤独な日々の中、森で覚えた独り遊びの数々。でも、それももう思い出す必要など無いんだ。

「九十八、九十九、……百！」

眼を開けたアルフ。そこには悪戯な輝きがあった。

「俺を鬼にしたこと、後悔させてやる……」

その場に不釣り合いなほどの気合がこもったセリフを残し、アルフは駆け出した。

何といつても、相手はリオとルーだ。そう簡単には見付からないだろう。

リスの仔一匹見逃すまいと視線を凝らしたアルフは、次の瞬間、我が眼を疑い、瞼を手の甲で擦った。

リオが……、いた。

しかも、何を考えているのか、何処からでも見通せるほどに大きな木の幹に寄り掛かり、ボンヤリと空を眺めている。

訝しみながら、それでも、足音を忍ばせて、ゆっくりと近寄る。

微かに草を踏む音に気付き、リオが振り返る。口許には穏やかな笑みが浮かんでいた。

「何やってんだ、リオ？」

アルフの問いに答えたものか否か、リオがポツリと呟いた。

「空、……蒼いね」

アルフは窺うようにリオの横顔を見た。けれど、そこにリオの真意を読み取ることは出来なかった。少し戸惑いながら、リオの隣で同じように空を見上げる。そこには確かに、見慣れた蒼い空と、流れる真つ白な雲があった。

「空なんて、蒼いのが当たり前だろう」アルフが言う。

リオは小さく微笑んだ。

「うん、そうだけど……。何となく、嬉しくならない？ 蒼い空って」

アルフは視線をリオへと移し、訳が解らぬという態で肩を竦めた。
「お前さ、空の色くらいで、なんで『嬉しい』なんて言えるんだ？
空、好きなのか？」

「好きだよ。君やルーのこと好きなのと同じくらい、好きかな」
途端に、アルフの頬が朱を帯びる。

リオは、そんなアルフの表情の変化に気付かぬ振りで言葉を継いだ。

「何となくね、空を見ていると落ち着くんだ。そしてね、少しだけ、……哀しくなる」

「……よく、解んねえな」

アルフは紅に染まった頬を隠すように右手で無造作に前髪を掻き上げ、わざと乱暴な口調で言った。

リオは微かに笑い、再び空を振り仰いだ。

「自分でも、よく解らないんだ。なぜ、こんな気持ちになるのか。」
アルフは何も言わなかった。リオには、何処かしら不思議なところがある。そして、それは、アルフにとって、決して不快なものではなかった。

暫く並んで空を見上げた後、アルフは吐き出す息と共に呟いた。

「ところでさ、お前、今、俺達は何やってるか、解ってる？」

「え？」

問うように眼を見開き、振り返るリオ。

アルフは、今度ははつきり、そうと解る溜息で答えた。

「……かくれんぼ」

「あ……」

「隠れなきや、意味がないだろ」

リオは思い切り恥ずかし気に頬を染めた。

「ごめん、そうだったよね」

言いしな、一歩踏み出しかけたリオの腕を、アルフが掴む。驚いたように振り返るリオの深い碧の瞳。

二人の間を、一陣の風が吹き抜けた。

アルフの指先の力が、微かに強まったようにリオには思えた。恐る恐る口を開く。

「……捕まった？」

静かに、しかし、大きくアルフが頷く。

「そうだよね……」

ホウツと溜息を吐くリオ。

アルフが悪戯っぽい笑みを返す。

「勝負だからな」

「やっぱり、君に誤魔化しは効かないね」残念そうに微笑む。「ル

「は？」

「これから」

「じゃあ、一緒に探すよ。次の鬼は僕だね」

数歩歩いたところで、リオは名残惜し気に再び空を見上げた。自然と足が止まる。

彼の後ろにいたアルフは、ぶつかりそうになりながらも、臍を捻って何とか衝突を避け、そのままリオを見下ろした。

アルフの努力に気付かぬまま、リオは独り言のように呟いた。

「あの日も、ちょうど、こんな空だったよね。抜けるくらい澄んだ真つ蒼な空……」

「あの日？」

体勢を立て直し、問うアルフに、ニツコリと微笑み掛ける。

「君と初めて出会った日」

「……」

返事がない。気が付けば、アルフはじつとリオを見つめていた。

リオは、再度、自分が置かれている状況を思い出した。

「あ……、かくれんぼだったよね。ごめん」

慌てて駆け出そうとした瞬間、アルフに呼び止められた。振り返るリオ。アルフは、その場に立ち止まったまま、少し照れくさそうに俯いていた。

リオが小首を傾げる。

「どうか、した？」

アルフは、暫し足許の草を蹴っていたが、やがて戸惑い気味に、けれど、思い切ったように口を開いた。

「俺……、ずっと言いたいことがあって……、お前に。でも、なかなか二人きりになる機会がなかったから、ずっと言えなくて……。あの……」

珍しく言葉を濁す。

口籠もるアルフの姿に、リオはふと不安を覚える。

「ルーが居たら、言えない話？」恐る恐る問い掛ける。

「そういうわけじゃない」アルフは強く首を横に振った。「でも、何となく……、あいつ、気にするから……」

「なあに？」

出来る限り明るく訊く。

アルフはクシャクシャと髪を掻き回していたが、思いを伝える適当な言葉を見付けられない自分自身に苛つくように乱暴に木陰に座り込んだ。そのまま何度か前髪を掻き上げる。

「……ありがと、な」ボソリと呟く。

僅かに聞こえた声。だが、その言葉の意味が解らず、リオは、きょとんとした瞳で黒髪の友を見下ろす。

その視線に、アルフは一瞬、上目遣いで応え、更に照れくさそうに掌を翳して瞳を隠す。

「ちゃんと、礼、言ってなかったから」

「何のこと？」問うリオ。

傍らの草を千切り、アルフが言葉を継ぐ。

「きつと、お前は何の気なしに言っただけなんだろうけど、それでも、俺にとっては、とっても大事な言葉だった。……凄く嬉しかった。だから、……ありがと」

「……よく、解らない」言いつつ、アルフの隣に腰を下ろし、友の顔を覗き込む。

アルフは、照れくさそうな笑みをリオに返した。

「あの日、……俺とお前が初めて出会った日」想い出の日と同じ、蒼い空を見上げる。時を遡る感覚が、何だかくすぐつたい。「入学式の半年くらい前だから……、もう、一年も前になるんだよな。そうだよ。確かに、ちょうど、こんな蒼い空だった。ポラリスの森、カナンの大木の根元で、淡い光に包まれて、膝を抱え、丸くなって眠ってたルーと、お前に出逢ったんだ」

驚くほどに、想い出がすらすらと言葉になる。

「小人族に追われ、逃げ出して、森の中を当てもなく彷徨ってた。生きてることすら嫌になってた俺。そんな俺に、あの時、お前、言

つてくれたんだぜ。俺は、この森に……、この世界にとって必要だ
つて。必要な命なんだつて。俺に出逢えて良かったつて。もう、
…独りじゃないつて」

小さく笑った視線が、そのままりオを捉えた。

風が金糸のような髪を揺らしながら通り抜けていく。

あの時と同じ瞳。穏やかで、優しく、包む込むようで……、綺
麗な碧の瞳。

一年前の光景が、今の二人に重なる。違っていることといえば、
二人の背丈とリオの髪が少し伸びたことくらい。

そのまま過去の時に囚われてしまうことを恐れるように、リオが
俯く。彼の気恥ずかしさは、頬に刺す朱色で解る。

「……覚えていて、くれたんだ」

少し戸惑い気味の、それでも嬉し気な口調。普段、あまり感情を
表に出さないリオにしては珍しい。

「当たり前さ。忘れるわけないだろ」思わず、アルフの語調が強ま
る。伝えたかった、リオに。あの時の、そして今も心に抱き続けて
いる想いを……。「嬉しかったんだからさ、本当に……。俺が今こ
こにいて、こうしてがんばってられるのは、お前のおかげだよ」
「ううん。そんなこと、ないよ」リオは静かに、しかし、何度も首
を横に振った。「あれは、本当のことだもの。僕は、そんなふうに
言ってもらえるようなこと、何もしてない。それどころか、僕は…
…」一瞬言葉を濁し、辛そうに顔を歪める。「僕は、あの時、ルー
の記憶を奪ったんだ……」

「リオ……」

後悔に苛まれるリオの心が、苦しいほどに伝わる。

アルフは、友に掛ける言葉を探した。けれど、見付からない。情
けなさになく唇を噛む。

そんなアルフの心を見透かし、労わるように、それでいて自分を
責めるように、リオが俯いたまま言葉を継ぐ。

「あの時のこと、今でも、すぐく後悔してる。本当に、あれで良か

ったのになつて。考えなしに、僕は、あまりにも出過ぎた行為をしてしまったんじゃないかって……」

アルフは、ほんの少し哀しくなった。哀しくて、俯く。けれど、傍らの草を指先で千切りながら、小声で問い掛ける。

「結局、あいつの記憶は……、今でも……？」短い、確認するだけの言葉。語尾が掠れる。

「うん」リオが頷く。「ルーの夢……。眠る以前の過去の記憶は、夢の花に吸い取られた。目覚めた時には、全てを忘れていたよ。今でも、僕に出逢う以前のことは何も覚えてない」

「夢の実は？」

「僕が持つてる。とても深い蒼だよ。哀しみの深さ、そのままにね」
淡々と語るリオ。それが、余計に切ない。

アルフは、少し恐れるように、窺うように問う。

「……そのこと、ルーは？」

首を横に振ると、金色の髪がサラサラと揺れた。

「知らない。言っていないから」

「そっか……」

それだけ言った。それだけしか、言えなかった。もう、これ以上訊くこと何も無い。訊く必要はない。……訊きたくない。リオを傷付けたくないから。

場の流れを断ち切ろうと、アルフが腰を浮かしかける。

けれど、その動きを、再び口を開いたリオの言葉が制した。

「どうしたらいいんだろうって、今でも、毎日思うよ。夢の実は、ルーの記憶。彼に返すべきだろうか、そうした方がいいんじゃないかって」躊躇うように前髪を弄る。「あの時は、確かに、これが一番良いんだって信じてた。哀しいことなんて、忘れてしまうのが一番だって。でも……」

「でも？」先を促すアルフ。

訊いて欲しい。言外に、そう叫ぶリオの想いを感じたから。
吹き抜ける風を感じてか、リオが瞳を閉じる。美しい横顔に、木

漏れ陽が落ち懸かった。囁く声は少し掠れていた。

「でも、本当に良かったんだろうか。彼の記憶を奪う権利なんて、僕には、……うん、誰にもありはしないのに。子供だったなんて言葉は、きつと言いつにはならない。僕は、あまりにも傲慢すぎたんじゃないかって」小さく息を吐き、窺うように傍らの友の顔を覗き込む。「だから、ずっと相談したかったんだ、君に……」

「俺に？」

「うん」コクリと頷く。「でも、なかなか言い出せなかった」

抱えた膝を引き寄せ、そこに顔を埋める。小さな肩が余計に小さく見えた。

「もしも君が、あの時のことを忘れているのなら、……思い出させたら、僕、嫌われてしまっんじゃないかって、怖くて……、とても不安だったから」

顔を横に傾けたせいで、少し頼りな気な瞳が見えた。それが、アルフの心を締め付ける。

アルフは両膝を付いて身を乗り出し、リオに顔を寄せた。語調が強まる。

「そんなわけ、ないだろ。お前を嫌うなんて、そんなこと、絶対にあるわけない」

少し荒い言葉に込めて伝えたかったのは、真実の想い。

リオは僅かに眼を見開き、次いで、膝の上で組んだ腕の中に顔を埋めた。

「うん。ありがとう」声音は微かに和らいでいた。「……良かった。やっと、言えた。すごく、ホッとした」

アルフは、ほんの少し顔を歪めた。そのまま勢いよく木の幹に寄り掛かると、胡座をかき、首の後で指を組む。視線は睨むように空に向けられた。

「少し、……以外だな」

「え？」

リオは一瞬驚き、その後、彼の意図を理解したように小首を傾げ

ると、少し淋し気に微笑んだ。

「僕は、悩んだりしないようにみえる？」

「ああ」

「そっか」再び膝を強く引き寄せる。「……なんでかな。よく、そう言われるんだ。でも……」

「でも……」リオの言葉をアルフが制す。「すぐ臆病にもみえる」
リオは弾かれたように顔を上げ、傍らの友を見遣った。

アルフは相変わらず空を見上げたまま、独り言のように呟いた。

「だから、以外だって思った」

リオは、少しの間、悩んでいたが、降参とばかりに首を大きく横に振ると、膝を抱えたまま木の幹に背を預けた。

「解らない、アルフ。どういうこと？」

明るさを装いつつも、声には色濃い困惑が滲んでいた。

アルフは、言葉を探すように首を左右に傾けた後、視線をリオに向けた。

「お前ってさ、すごくしつかりしてるようにみえるよ。何時だって論理的に物事を考えて、対処して……」そっと伸ばした指先が、リオの頬に触れる。「だけど、時々、そんなお前の後ろに、別のお前が見えることがある。自分の気持ちを表現するのを怖がって、怯えて、それでいて、強がって、周りから距離を置いて、独りぼっちでいる、お前」指先が髪に触れる。細い金糸のような髪がサラサラと指の間を流れ落ちる。「だから、こんなふうに相談してくれるなんて、以外だった」

「そんなこと言われたの……、初めてだ」温かな感触に、リオが瞼を閉じる。「君は不思議だね。僕の心の奥底まで、全部見通しているみたい。だから僕は、あの時……、始めて君に出逢った時、思ったんだね。もう独りじゃないって」

「え？ でも、あれは……」

ふっと指先が離れる。

開いたリオの瞳を、驚きに見開かれた漆黒の瞳が真正面から捉え

ている。離れていく指先を名残惜し気に見つめながら、リオは呟いた。

「あれは、君のことじゃない。僕のことだよ」

更に見開かれるアルフの瞳。照れくさそうに俯き、草を千切っては風に飛ばす。

けれど、それですら間が持たないと思ったのか、アルフは、突如、乱暴に立ち上がった。その動きを追い、リオの視線が動く。

「俺、……お前は間違っと思ってないと思う、夢の花のこと」問うようなリオの瞳を見下ろし、アルフは小さく笑った。「難しいことは、よく解らないけど、でも、今のままで良いと思う」

アルフと同じように立ち上がり、顔を近付けてリオが訊く。

「……どうして？」

不安気なリオに、アルフは屈託なく言った。

「ルーが、笑ってるから」

小首を傾げるリオ。

アルフは悪戯っぽい笑みを返し、一つ大きく伸びをした。

「この学校の入学式で、あいつと会った時、俺、始め、あいつだって判らなかった。森の中で、……光の中で眠ってたあいつは、凄く哀しそうで、いっぱい泣いてて……。なのに、今のあいつは、楽しそうで、何時も笑ってる。何時も、何時もだ。それって、あいつにとつて一番大切なことなんじゃないかな」頭の後ろで腕を組む。「あの時、お前がしたことが良かったのか悪かったのか、なんて、お前だけじゃない、きつと誰にも解らないよ。でも、今、あいつは笑ってる。凄く幸せそうに笑ってる。それとも、お前には、あいつの笑顔が淋しそうにみえるか？ 無理に創った笑顔にみえるか？」深い漆黒の瞳に捉えられ、リオは視線を逸らすことが出来なかった。見つめ返したまま、呟くように答える。

「うつん、そうは思わないけど……」

その瞬間、リオは夜空の星が煌いたような錯覚に襲われた。眼を瞬かせる。それは、アルフの瞳。

彼はニツコリと笑い、再びリオに指を伸ばした。髪をそつと撫でる。

「なら、大丈夫だ。あいつは、今、幸せなんだよ。だから、お前はあの時のこと、これ以上悩む必要なんかないんだ」指先から伝わる温もりが心地良くて、リオは再びウツトリと眼を閉じた。「だから、お前は笑つてろよ。そうすることが、ルーにとつても一番良いことだよ。そうじゃないか？」

「……うん」唇が自然と笑みの形を創る。「ありがとう、アルフ。やっぱり、君が居てくれて、よかった」

穏やかなリオの微笑み。

少し照れくさくて、アルフは暫し無言で空を見上げた。リオの深い碧の瞳は不思議だ。心が素直になっていく。暖かな光に包まれて融けるように……。

「俺、さ……」アルフが再度口を開く。視線は空へと向けたままで、それでも、友の存在を確認するように、僅かに視点をずらして。「もう一つ、お前に言いたいこと、あるんだ」

珍しいほどに多弁なアルフ。おそらく、ずっと胸の奥に秘め続けてきた想いなのだろう。

リオは小首を傾げながら、そんな友を不思議そうに見た。

「何？」

アルフは、次の言葉を口にするのを、ほんの少し躊躇った。それでも、ギョツと掌を握り、少しずつ言葉を紡ぐ。

「俺は、あの時、ルーを護ることを、お前と、そして、あのカナンの大木に誓った。でも、俺が護るのは、それだけじゃない。……お前もだ」

リオの戸惑いは、その表情から手に取るように解る。だからこそ、伝えたかった。胸の奥で、ずっと暖め続けてきた想いを。掛け替えのない存在であることを……。

少しぶっきらぼうに、けれど、窺うように視線を向け、アルフは言った。

「お前のことも護りたい。いや、……必ず護る。そう決めたんだ」

「アルフ……、どうして？」リオが少しきこちなく訊く。

「決めたんだ」

アルフは足許の草を蹴り、空を見上げると、自分自身に言い聞かせるように呟いた。

「俺が、この学校に入学しようと決めたのは、お前達を護る力が欲しかったから。だから、俺は強くなるよ。入学式の日にお前、言ってくれたよな。まだ、魔法なんて何にも出来なかった俺に、お前、言ってくれた。魔法の源は……」

「魔法の源は、強い想い、強い願い……」アルフの言葉を受けて、リオが無意識に呟く。

「うん」アルフの視線が、今度は正面からリオを捉えた。「それを聞いて、俺、思った。それなら、俺はきつと強くなれる。だって、俺には護りたいものがある。それが、はつきりと解っているから……」

星空を切り取ったような漆黒の瞳の煌きが、ポラリスの森を照らすかの如くリオを優しく包み込んだ。

「俺、まだ一度も、この気持ち、キチンと話してなかったからさ……」

僅かに頬が赤らむ。

リオは、一瞬、胸が苦しくなった。胸の奥が熱くて、それが今にも溢れ出しそうで、視線を逸らした。

「うん」咄嗟に、それだけしか答えられなかった。

そんなリオの態度をどう思ったのか、アルフは語調を強めた。

「必ず護ってやるからな。俺は……」

「アルフ……」顔を上げるリオ。瞳は少し潤んでいた。「……嫌だよ」

アルフは、訳が解らずリオを凝視した。自分の言葉の、いったい何がリオを哀しませてしまったのか、それを知りたかった。彼の言葉にじっと耳を澄ます。

リオは迷いながら、少しずつ言葉を紡いだ。

「僕は、護られるだけなんて、嫌だ。僕だって、護りたいんだ。君やルーの役に立ちたい。君のために、何かしたいよ」

リオは哀しんだわけではない。言葉の端々から、そのことを確信し、アルフの表情がフツと和む。

「……もう、充分さ」それだけ言った。

リオはアルフの横顔をじっと見た。

アルフは空を仰いだまま眩しそうに眼を細めた。

「……空、蒼いな」

リオはアルフの視線を辿って空を見上げた。大きな雲が幾つか、ぽつかりと空を渡っていく。一つ深呼吸すると、微笑んだ。

「……うん。蒼いね。もうすぐ、夏だね」

アルフとリオは、木陰に寄り添い、並んで天空を見つめた。たったそれだけのことなのに、二人とも、不思議なほどに気持ちが安らぐのを感じた。

このまま時が止まればいい。そんなことすら願った。
しかし……。

次の瞬間、二人は同時に『あること』を思い出した。

「そういえば、俺達……」

「かくれんぼの途中だった!」

「ルー!」

「どうしよう! きつと、怒ってるよ!」

リオの言葉が終わるか終わらないかの内に、アルフの躰がフワリと宙に浮き上がった。そのままスルスルと空を駆ける。

「アルフ、魔法は……!」

リオの制止の声は、しかし、アルフの鋭い声音に掻き消された。

「夕暮れが近いんだ! そんなこと言ってる場合かよ!」

リオが空を見上げる。

見渡せば、陽は西に傾き、棚引く雲を微かに茜に染め始めている。夕刻が迫っていた。

リオの背筋を冷たい汗が流れ落ちた。

「うん……。そうだね」

頷くと同時に、リオの躰もスルスルと空へと昇り、風を切って飛んだ。

二つの影が、徐々に赤味を増す雲を掠め、空を駆け抜けていった。

「ルー！」

「ルー、何処だ！」

声を限りに叫びながら、森の中を飛び回る。けれど、いくら探しても、褐色の髪の子は見付からなかった。

空からの探索を断念し、二人揃って、地面に舞い降りる。

足が地面に着いた途端、リオの躰が、その場に崩れた。

「まさか、森に囚われたんじゃない……」

その細い腕を、アルフがしっかりと掴まえた。

「大丈夫だ。光が茜に染まるには、まだ早い」

リオは片膝をつき、強い力で躰を支えてくれる友の顔を見上げた。
「うん、そうだよ」コクリと頷く。白い頬に、僅かに血の気が戻った。

力強い腕に縋るように立ち上がり、褐色の髪の子を探そうと一歩を踏み出す。

その時、二人の眼に同時に、こちらに向かって真っ直ぐに駆けてくるルーの姿が飛び込んだ。

「ルー！」

「何かあったのか？」

叫びながら駆け出す二人。だが、直ぐに足が止まる。

この距離で確認出来る範囲、どう見てもルーは笑っている。しかも、それは、満面の笑みというヤツで、両腕を広げて駆け寄ってくるのだ。

二人は呆然と顔を見合わせた。

「リオ！ アルフう！」ルーが二人に飛び付く。「来て！ ボクね、すっごいもの見付けちゃったんだよ！」

啞然とする二人。

その様子に気付くことすらなく、ルーは彼等の両手を引いて、森の奥へと進んでいった。

引つ張られながら、再び眼を合わせた二人。

何もなかったのだから、これ以上に良いことは無い。

互いの眼がそう語っている。僅かに苦笑いを浮かべ、二人は素直にルーの案内に従った。

深い茂みを抜け、暫く歩く。

すると、突如、眼前に広々とした草原が開けた。

リオとアルフは一旦顔を見合わせ、次いで、一変した周囲の風景を見渡した。

そこには、惜し気も無いほどに木漏れ陽が溢れ、森に抱かれ、護られるように、少し古ぼけた丸太小屋が、ひっそりと建っていた。

風が吹く度、丸太小屋の屋根に落ち掛かる陽の光が、ゆらゆらと揺れた。

何処か近くにあるものか、清涼なせせらぎの音が、耳に心地よく響く。

リオは手の甲で眼を擦ってみたが、夢ではなかった。

「これは……？」

ルーは、リオとアルフの反応に満足そうに笑った。

「綺麗な家だと思わない？」

その問いに、リオが素直に頷く。

「うん。……素敵だね」

「アルフは？」振り返り、黒髪の友に問うルー。

「ああ。……いいな」

「えへへ……」ルーは後手に手を組み、嬉し気に笑った。西の方向を指で示す。「学校は、あっちなんだけどね、ここから、そんなに遠くないんだよ」

そして、重大発表をするように声を落とし、二人の顔を覗き込みながら言った。

「ねえ、リオ、アルフ。ボク達さ、学校の寮を出て、三人で、ここで暮らさない？　ね？」

突然の、しかも予想外の話だ。

リオは、ただ眼を丸くするばかり。言葉が見付からなかった。けれど、アルフは違っていた。我が意を得たとばかりに大きく頷く。

「……それ、いいな」

「アルフ！」　リオが黒髪の友を見遣る。

しかし、アルフはいえ、既にルーと組んでリオを説得する体制。リオの正面に立ち、彼の両肩に手をかけると、その不安気な顔を真っ直ぐに見下ろした。

「なあ、リオ、そうしようぜ」

こういう時の決断の素早さに関して、アルフは折り紙付きだ。しかし……。

「待つてよ、アルフ、ルーも」　リオは必死に抗議した。こう見えて、この二人は結構気が合う上に、意気投合すると止まらないのだ。「僕達は、魔法遣い養成学校の生徒なんだよ。養成学校は、原則として寮に入ることが決まりで……」

何とか思い止まらせようと言葉を探す。けれど、もう無駄なようだ。

「原則だろ？　絶対なわけじゃない」

アルフが言えば、ルーが頷く。

「そうだよお」

「でも……」　言い淀むリオ。

胸の前で腕を組み、アルフが言った。

「俺達三人とも、親無しだろ？　ルリアで親無しが三人も揃うなんて、魔法以上の奇跡だよ。絶対、偶然なんかじゃないって。だからさ、俺達と一緒にいるべきだと、俺は思う。だから……」　息を吸い込む。「俺達、三人で暮らそうぜ」

自身たっぷりに、そう言い切るアルフの顔を、リオは言葉も無く、

ただ哑然と見つめることしか出来なかった。

確かにアルフの言うことにも一理ある。

「それにね、このまま寮にいたら、僕達に親がいないってこと、何時か、みんなに解っちゃうよ。同情されるのは嫌だから内緒にしておこつて、リオ、言つたじゃない」

リオの腕にそつと腕を絡めながら、ルーが言う。

リオは困惑の表情でアルフとルーの顔を交互に見比べた。しかし、その実、自分でも驚くほど、興奮に胸が高鳴っていることに気付いていてもいた。

「家の中に入つてみようよ」

ルーがリオの腕を引く。けれど、リオは躊躇し、その場から動くとはしなかった。

「ダメだよ、ルー。この家、誰のものか解らないんだよ。今だつて住んでる人がいるかもしれない。それを調べないうちに、僕等が住むかどうかなんて……」

「それなら、平気みたいだよ。この森に住む鳥達に訊いてみたんだけど、もうずっと、誰も来てないんだってさ」

「でも、今は住んでいなくても、誰かの持ち物かもしれないし……」
こうなると、これ以上、ルーがリオを説得するのは不可能だ。勝ち目は無い。とうとう、じれったそうに地団太を踏んだ。

「もう、リオは心配性なんだからあ」何か思い当たったのか、おでこに手を当てて、ニツコリと笑った。「じゃあ、明日、校長先生に訊いてみよう。一番の物知りだもの。この家のことも、きつと知ってるよ。それで大丈夫だったら、ボク達、この家に住むよ。ね？それなら良いでしょう？」

「おい、急に校長先生なのか？」

アルフの当然の疑問。一般生徒にとって、校長先生は、それほど身近な存在ではないはずだ。

だが、ルーは当たり前とでもいうように頷く。

「大丈夫だよ。ねえ、リオ？」

「でも……」躊躇うリオ。校長先生のことよりも、その先のことでは頭が一杯のようだ。「僕達、まだ子供だよ。僕達だけで暮らすなんて、……ホントに、出来るのかな……」

リオの心配をよそに、その点、アルフとルーはすっかり乗り気の様子だ。

「大丈夫だよ、きっと」

アルフはリオの肩に両手を掛け、指先に力を込めた。

「俺達、魔法だって、今でもそこそこ遣えるんだし、これから勉強していけば、もっともっと遣えるようになる。一人では無理かもしれないけど、三人集まれば何とかなるさ」

「そうそう、アルフの言うとおり！」ルーがリオの腕に腕を絡め、彼の顔を覗き込むように見上げる。「それに、ボク、お母さんにパ伊の作り方、教えてもらったよ。リオだって、美味しいねって、何時も誉めてくれたじゃない」

得意気なルー。

その隣で、アルフは顔を顰め、ぼそぼそと呟いた。

「毎日パイってのは、勘弁して欲しいなあ……」

「酷いよ、アルフ！ いいもん。そんなこと言うなら、アルフには絶対食べさせてあげないよ！ 君の眼の前で、リオと二人だけで美味しい、美味しい」って食べてやるからね！」

ルーは憎まれ口を返したが、その顔はニコニコと笑っていた。

リオは胸の奥が熱くなるのを感じた。

いいんじゃないのか。二人が側に居てくれれば、きっと、何があっても大丈夫だ。今、心からそう思えた。

風に遊ばれる柔らかな髪を抑え、リオは明るい笑みを浮かべた。

「僕も、料理は得意だよ。何とか……、なるかな。君達と一緒になら僕でも大丈夫かな？」

リオの笑顔につられ、アルフとルーの表情が自然と和らぐ。

「大丈夫。絶対に大丈夫だって。俺が、……いや、俺達がついてるだろ？」

「じゃあ、決まり！ 明日、校長先生に訊きに行こうね。この家、絶対ボク達の家になるよ」

「うん！」

リオは大きく頷いた。

アルフはすっかり気を良くし、大空に向かって両腕を挙げ、笑いながら叫んだ。

「そうと決まれば、遊ぶぞぉ！」

丸太小屋の周りを駆け回るアルフとルーの楽し気な様子を見つめながら、リオは笑った。この家で暮らす日々を思い浮かべると、なぜか自然と笑顔が零れるのを抑えることが出来なかった。

Noi

新しい暮らし

「……、
だっ
たよ
ね？」

「うん」

「思ったより、……凄い、ね」

「うん」

リオは出来るだけ言葉を選び、普段どおりの表情を心掛けたつもりだった。それでも、頷くルーの声は徐々に小さくなっていく。リオは、そんなルーを少しでも元氣付けようと別の言葉を探したが、リオが口を開くより早く、アルフが深い溜息を吐いた。

「冗談じゃないぞ」

こんなとこ、住めるわけが無い。言外に、そんな思いが込められた溜息だった。

それまでションボリと肩を落としていたルーが、とうとう切れた。普段はニコニコと大人しい彼が、アルフに負けじと言い返す。

「そんなこと言ったって、しょうがないでしょう！ 外からだけじゃ解らなかったんだもん！」

「だけどさ、……限度ってモンがあるだろう」

「アルフだって、良い家だって言うてたじゃないか！」

ルーの見幕に押され、アルフは決まり悪そうに頭を掻いた。

「そりゃ、そうだけど……」

三人の少年は、丸太小屋の玄関前に立ち、主を失つて久しい、荒れ放題の家の中を見遣りながら、揃つて大きな溜息を吐いた。

この家を見付けた翌日、リオ、アルフ、ルーの三人は校長先生に面会を求め、許可された。

校長先生は、なぜか、この家のことをよく知っているらしく、リオが懸念していた家自体の所有権について、一切問題無いと断言してくれた。そこは、もう長い間……どのくらいの期間か、その点について校長先生は明言を避けたが……誰も住んでおらず、管理もされてないとのことであつた。

そして、話は次の問題へと進んだ。

魔法遣い養成学校は、原則全寮制。入学して間もない子供三人が寮を出て、彼等だけで生活したいという要求は、いくらなんでも無謀過ぎる。すぐに認められるはずは無いだろうと、内心、リオ達も覚悟していた。それでも、諦めるつもりはなかった。長期戦は覚悟の上だつた。

そして、学校側の先生の多くは、事実、予想どおりの判断を下した。

「彼等は、我々の保護下に置くべきです」

その主張に、殆どの教師が賛同した。

しかし、豊かな白い口髭を撫でながら、校長先生は逆に問い掛けたのだ。

「独り立ちをする時期は、人それぞれ。能力的にみて、彼等は充分独り立ち出来る時期を迎えていると思いますよ。そんな彼等を引き止めて置かなければならない理由とは、いったい何ですか？」

「それは、彼等が、まだ子供だからです」一人の教師が即答する。

「子供……、ですか」校長先生が一つ溜息を吐く。「この学校を全寮制としたのは、そのような意図からではありません。先生方も、無論、ご存知のはずです」

その指摘に応えられる教師は誰一人いなかった。

眼前に並ぶ先生達を見渡し、校長先生は言葉を継いだ。

「哀しいかな、この世界ルリアでは、種族、部族間の排他意識、差

別意識が未だ根強く残っています。ですが、少なくとも、この学校で学ぶ間、子供達には、そのような愚かしい差別意識から解放され、一個人として友情を広げ、己の内に潜む能力を磨いてほしい。それこそが、素晴らしい魔法遣いになるための必須条件であると、私は信じています。その意味で、彼等は充分独り立ち出来ると思っていますがね……」

「しかし、前例が……」

「アイゼンロック先生」

「はい」

「前例のないことを、躊躇の理由とするのは、感心しませんね」

アイゼンロックは恥ずかし気に口を閉ざした。

校長先生が続けて言う。

「前例は、誰かが作らねば永遠に生まれることなど無い。前例を作る機会を得られたこと、私は誇りとすら思います」

そこで一つ大きな溜息を吐く。

魔法遣い養成学校を作って早や三千年余り。その間に組織は大きくなり、自分の意思とは懸け離れた方向に向かって動き始めている。それが良い事なのか、それとも悪い事なのか、正直、判断に迷うこともしばしばだ。だが、彼には信念があつた。神の庇護から離れたこの世界が、独自の道を歩むことは、決して容易いことではない。だからこそ、心の強い子供を育てていきたい。そのために、この世界に自分が示した道は正しかった。そう信じていた。

「私は、この世界に初めて『学校』という組織を創りました。その後、私に続く者は現れてはいませんが、この組織自体、悪い前例ではなかったと、今でも自負していますよ」

その場にいる全員が、ただ頷くことしか出来なかった。

そういうわけで、リオ達の願いは、彼等自身、驚くほどあっさり認められた。そして、その裏で、このような議論が交わされていたことなど、無論、一介の生徒であるリオ達が知る由もなかった。

第2章 新しい暮らし No.2

理由など解らずとも、嬉しいものは、やっぱり嬉しい。

善は急げ、とばかりに、引っ越しは夏休みを利用して行うことになった。

そういうわけで、今日は家の下見に来たのだ。

だが、いざ家の中を覗いてみて、ビックリ仰天。外からでは解らなかったが、家の中は荒れ放題に荒れており、とても人が住める状態ではない。遂に、三人揃って頭を抱えてしまったというわけなのだ。

埃と蜘蛛の巣だらけの室内に足を踏み入れることを躊躇い、アルフとルーは戸口付近でウロウロしていた。

しかし、そんな二人を尻目に、リオはキュツと唇を噛み締めると、足許の小枝を一本拾い上げ、それで蜘蛛の巣を上手に払い除けながら、ツカツカと中へ入っていった。

「おい、リオ、待てよ！」

アルフが慌てて引き留める。

リオは、二人を振り返ってニッコリと微笑むと、その場で小枝をクルクルと回し、その動きに合わせるように家の中を眺め回した。

「ねえ。この家、よく見たら、とても素敵だよ。二人とも、こっちへ来て見てごらんよ」

「……お前、本気で言ってるのか？」

アルフは胸の前で両腕を組み、戸口に寄り掛かりながら、ウンザリした表情でリオを見た。彼の肩口から顔を出したルーが、不思議そうに家の中を覗き込む。

埃の積もり具合から、その家が、もう長い間使われていないのだということは容易に想像、いや、確信出来た。その状況で、『素敵』という言葉は、どう鼻屑目にみても、二人の口からは出てこなかった。

た。

けれど、リオは、彼等の表情などお構いなし、部屋の奥へと入り込むと、埃だらけの柱やテーブルに手を掛け、埃を払った。舞い上がる埃の煙。リオは、埃を避けるように顔の前で手をパタパタと振りつつ、顔こそ顰めながらも、それらをしげしげと眺めた。埃の底から現れたのは、美しい木目と精巧な造形。途端に、リオの口許が嬉しそうにほころぶ。

「だって……、ほら」少しの間、埃の舞う空気が澄むのを待ち、リオは言った。「柱なんて、こんなに立派な木を使って創つてあるから、凄くしつかりしてるし、家具だって、……ご覧よ、細かな細工の施された、とても手の混んだものだよ。掃除さえ済めば、文句なしに素敵な家だよ。何より……」その家で一番大きな窓を開け、そこから外を眺める。「此処は、素敵な場所だもの」

家が建っている場所は、森の中にぽっかり開けた平地で、森の緑と平地の緑が絶妙なコントラストを成していた。リオが開けた窓からは、小さな湖を眺めることが出来る。その水面には陽の光が燦々と射し込み、風の動きに合わせてキラキラと輝いていた。森伝いに流れ下る小川が湖に注ぎ込み、サラサラというせせらぎが耳に快く響く。

リオは窓から顔を出すと、心地よい微風に髪を遊ばせた。養成学校に入学した時より少し伸び、肩に触れるほどになった柔らかな金色の髪は、風をはらんでキラキラと輝いた。

アルフは、暫くの間、リオの横顔を眩し気に見つめていたが、やがて、一つ大きな溜息を吐くと、徐ろに左袖を捲り上げた。

「しょうが無いな。じゃあ、やるか」

「やるって……、何を？」

隣にいたルーが訝し気にアルフを見上げる。

入学時には、さほど差の無かった三人の背丈は、一人、アルフだけがグングンと伸び、今では、他の二人に比べ、アルフが頭半分抜きん出ている。並んで話しをする時、ルーとリオは決まって彼を見

上げなければならなかった。

「決まってるだろ。掃除だよ、掃除」

短いアルフの言葉。

ルーは、さもウンザリとした態で肩を落とした。

「でも……、大変そうだよお」

「大変でも何でも、ここに住むって決めたんだから、しょうが無いだろ？ 今更、やっぱり寮に残ります、なんて、口が裂けても言いたくないぜ、俺は」右袖を捲り上げる。「今日中には無理でも、少しずつやれば、夏休み中には引越せるさ」

先程まで、文句ばかり言っていた当人の言葉とは思えない。ルーは上目遣いでアルフを見ると、小声で不平を漏らした。

「……こんなとこ住めないって、さっき言っただばかりのくせに……」

「何か言ったか？」

「何でもない！」

言いしな、逃げようとするルー。けれど、一歩遅く、頭上にアルフの拳骨が降ってきた。

頭を抱え、その場に座り込むと、ルーは不満気にアルフを見上げた。だが、それ以上、何も言わなかった。

そんな二人の遣り取りを、独り、離れた場所からニコニコと見ていたリオは、その笑顔のまま言った。声には、少し悪戯な響きがあった。

「ねえ。……使っちゃおうか？」

「え？」

二人揃ってリオを見る。窓を背に、逆光に縁取られた姿。アルフとルーは眩し気に眼を細めた。

リオが少し声を潜める。

「使っちゃおうか、……魔法」

「……いいのか？」

「ホントにいい？」

優等生のリオの口から出た言葉とは思えず、アルフとルーは驚きに顔を見合わせた後、身を乗り出した。

リオはといえば、照れくさそうに視線を泳がせ、躊躇い気味に言う。

「校長先生は、養成学校の学生であるうちは、授業以外で不用意に魔法を遣ってはいけません、それによって取り返しのつかないことが起こるかもしれないから……、っておっしゃってたけど、ここは僕達の中なわけだし、誰も、見ていないし……」

「……だな！」

「賛成！」

二人は両手を挙げてリオの提案に賛同した。

「じゃあさ、どうする」

ルーの問い掛け。

リオが一步前に出る。

「言い出しつぺだからね、僕がやるよ」

手に持った小枝を軽く回す。

すると途端に、さっきまで蜘蛛の巣と埃だらけだった家の中から、埃と塵、更に、その場を埋め尽くしていた、あらゆる汚れの類が消え去り、まるで、新たに磨き上げられたかのような輝きを取り戻した。タンスやテーブル等の家具類、暖炉や床までも、埃を拭い去ってみれば、風合いのある美しい調度品へと変貌を遂げた。

「ほらね。やっぱり素敵なお家だよ」

リオは満足気にニコニコと笑いながら周囲を見回した。

「じゃあ、次はボクね」

ルーが両腕を頭上に挙げると、窓から心地よい風が流れ込んできた。息苦しかった室内は一変し、清浄な空気に満たされる。それだけで、家の中の景色は更に澄み渡った。

「凄い！ どうやったの？」

リオの素直な感嘆の言葉に、ルーは照れくさそうに鼻の頭を掻いた。

「大したこと、無いよ。家の周りの空気を、ほんの少し動かしただけ。風は流れるからね」

「へえ……。やっぱり、こういうことは、ルー、お前が一番得意なんだな」

今回ばかりは感心の態でアルフが言った。徐ろに腕を捲る。

「さてと……。次は、俺の番だな」

軽く口笛を吹く。すると、見る間に、家中のランプに灯が灯り、暖炉には赤々とした炎が燃え上がった。

「凄いや、アルフ。やっぱり、火を遣わせたら君には敵わないね」
これもまた、リオの素直な賞賛。

気を良くしたアルフは、ほんの少し得意気に胸を張った。

「俺だつて、これくらいは出来るさ」

しかし、鼻高々といった様子のアルフを見遣りながら、リオとルーは顔を見合わせた。

「でもね、アルフ……」二人は揃って深い溜息を吐き、声を揃えて言った。「もう夏なんだから、暖炉は必要無いんじゃない？」

気が付けば、暖炉の中で燃え上がる炎によって、周囲の温度はみるみる熱くなっている。

アルフは気まずげに頭を掻くと、指を鳴らし、火を消した。

リオが小さな笑い声を漏らす。それにつられるようにアルフとルーが笑った。

すっかり綺麗に整えられた家の中に、三人の明るい笑い声が木霊した。

今朝、この家に初めて足を踏み入れた時には、いったいどうなってしまうのかと、三人とも途方に暮れたけれど、ほんの少しの魔法で、見違えるほどに綺麗になった家の中は、こざっぱりとしていてとても住み心地の良さそうな場所に思えた。戸棚には、日用品や食器類までもが整然と並んでおり、しかも、それらは造られたばかりのころの輝きを放っている。今すぐに、この家で生活を始めても、なんら不便を感じることは無いと思われた。また、調度品に至って

は、どれも細かな細工の施された質の良いものばかりで、この家の前の持ち主の趣味の良さが窺えた。その上、それら全てが、まるでリオ達が自分で選び、揃えた物であるかのように、彼等の手にしっくりと馴染む物ばかりだったのだ。

綺麗になった家の中、リオ、アルフ、ルーの三人は揃ってテーブルに腰掛け、満足そうに家の中を見渡した。

「やっぱり、素敵なお家だねえ。ボク、きっとこの家が大好きになるよ」

頬杖を付きながら、ルーが楽し気に言った。

それに応えるようにリオが笑う。

「ホントに、凄く不思議なお家だね。今日、初めてこの家に入ったのに、とても居心地が良い。まるで、ずっと住んでいたみたい、何もかもが、しっくりと肌に馴染むよ。何故だろうね」

「さあな。でも、確かに良い家だよ。此処でなら静かに暮らせそうだ。早く引越して来ようぜ」

椅子の背に凭れ掛かり、両手を頭の後ろで組んだアルフが、のんびりとした口調で言った。

耳には、小川のせせらぎと小鳥の囀りが心地よく響いてくる。そんな森の音に耳を澄まし、窓の外に視線を投げる漆黒の瞳は、とても優しく微笑んでいた。

満足そうな二人の様子を静かに見つめていたリオは、アルフの背後、暖炉の上に、微かな光を見たような気がした。

「……あれ？」

不思議な感覚に捕われ、椅子から立ち上がる。そのまま、テーブルを迂回してアルフの背後に回り込んだ。

「どうしたんだ、リオ？」

「何かあるの？」

アルフとルーは、椅子に腰掛けたまま、リオの動きを眼で追い、そう声を掛けた。

リオは二人に小首を傾げて応え、暖炉上の蝋燭台の影を覗き込む。

そこで見付けたもの、それは、金色に輝く一本の羽根だった。

「これ……。何でこんなところに……？」

呆然とした態のリオの呟きに、アルフとルーが近寄ってくる。リオに頬が触れるほどの距離で覗き込んだかと思うと、二人揃って驚きの声を上げた。

「なんだ、それ」

「金色だ。綺麗だねえ」

リオは、二人の素直な驚きの声を聞きながら、小さく笑った。そして、再び羽根を見つめ、不思議そうに言った。

「これって、……多分、天使の羽根……、だと、思うよ」

「天使？」

「うん……」なぜか、齒切れが悪い口調。「どうして、こんな所にあるんだらう。天使がこの世界に来るなんて、……今では有り得ないことなのに……」

囁きにも似たりリオの言葉。

アルフはリオの横顔をまっすぐに見つめ、異議を唱えた。

「天使って……。そんなはず無いだらう。だって、これ、金色だぞ。天使の羽根ってのは、白いものだろ？」

リオはアルフを振り返り、再び小さく笑いながら頷いた。

「うん。普通の天使の羽根は、確かにそう。純白だよ。これは、多分、聖天使の羽根……。じゃ、ないかな……？」

「聖天使？」

「……って、何だ？」

二人揃っての質問。こういう時には、やたらと気が合う。

リオは小首を傾げ、記憶を手繰るように、一言一言、ゆっくりと言葉にした。

「天上界ってね、僕達が普段思っている『平等』『博愛』のイメージとは、ちよつと違っていて、ホントは封建的な縦社会で、厳しい上下関係があるんだそうだよ。一口に天使といっても、彼等には位というものが与えられていてね、一般的に『天使』っていわれて、

人間界で人間達を導くのは『守護天使』、その天使達にあれこれ命じるのが『大天使』といわれるんだって。普通、『天使』っていうと、『大天使』までだと思われがちなんだけど、本当は、更にその上位に五人の天使がいる。それが『聖天使』。神から直接お言葉を戴けるのは、聖天使だけなんだそうだよ。数多居る天使達の中でも最も美しく、背には金色に輝く二対の翼、頭上には二重の光輪を擁するんだって」

リオは、感心の態で彼を見つめている二人の視線に気付くと、小さく舌を出し、肩を竦めた。

「僕も、以前、ラウ先生から教えて戴いただけだし、それも、たった一度か二度くらいだけだから、あまり詳しくは知らないんだ。今度、ちゃんと調べてみるね」

それでもアルフは、感心しきり、一つ深い溜息を吐いた。

「お前の育ての親だったラウ先生って、人間界のことを調べてる人なのかと思ってたけど、天上界のことにも詳しいんだ。凄い人だな」「ラウ先生の専門は『人間心理学』と『天上界史』なんだって。総称すると『異世界人類学』。……よく解らないよね」

リオは再度肩を竦めた。そして、暖炉に寄り掛かり、微風に綿毛を揺らす金色の羽根を、肩越しに振り返ると、独り言のように呟いた。

「でも、これが本当に聖天使の羽根だとしたら、……なぜ、こんな所にあるんだろう。聖天使が天上界を降りるなんて、そんなこと、あるわけがないのに……」

リオは、少し躊躇いながらも、そつと腕を伸ばし、その羽根に触れた。

その瞬間、羽根は純白の小鳥へと姿を変え、窓を擦り抜けて、何処へとも無く飛び去っていつてしまった。

リオ、アルフ、ルーの三人は、暫し呆然と、小鳥が飛び去った空を見つめた。

Noi

第三章

ポラリスの森の東端に位置する魔法遣い養成学校は、真夏の森の深緑に、ひっそりと溶け込みながらも、その佇まいからは、歴史と実績とに裏打ちされた伝統と威厳とを漂わせていた。

時計塔の鐘の音が、今日一日の授業の終了を告げ、高らかに響き渡る。その重い響きが、森の隅々にまで伝わり、消え去った頃、明るい笑い声と共に校舎から駆け出してきた生徒達は、次々と校門を潜り、思いおもいの方角へと散っていく。

通常であれば、授業終了と共に、生徒の波は養成学校の隣の敷地に建つ寮へと続く道に押し寄せる。けれど、今日は前学期の終了日。明日から夏休みを迎えるというわけで、生徒の多くは、いそいそと帰省の途に着いた。

養成学校は、原則として全寮制。生徒の殆どは親許を離れ、独りで寮暮らしをしている。一般の生徒にとって、親許に帰れるのは、休暇がまとまる夏休みと冬休みの二回だけなのだ。彼等の心が漫ろになり、一旦寮へ帰る時間すら惜しんで一刻も早く帰省しようとするのも頷けようというものである。

けれど、勿論、何事にも例外はあるもので……。

自然と足早になる生徒の波の中、何時ものようにゆっくりと、肩を並べて歩く三つの影。確かに、彼等は寮へ向かつてはおらず、正反對の森の奥へと続く道を進んではいるが、次々と彼等を追い越していく多くの生徒達にみられるような浮き足立った様子は微塵も無かった。

彼等は、周囲の様子などお構い無し、顔を見合わせながら一つの話題に熱中していた。

「ねえ、やつぱり、もう少し片付けた方が良いと思うよあ」

相変わらず、おっとりとしたルーの口調。

「あのな……」それに答え、アルフは、今日何度目かの深い溜息を吐いた。「何度も同じこと言わせるなよ。充分、片付いてるだろ？とにかく、俺は、あれでいいんだ。俺の部屋なんだから、片付いていようが、いまいが、俺が良ければいいじゃないか。そんなに片付けたけりゃ、居間だって玄関だって、場所は他にいくらだってあるだろ？」

「そこはね、いいの。もう、ゼーんぶ綺麗になってるから」

ルーはニコニコと笑いながらアルフの正面に立ち、腰に手を当てた。

「君は良くて、ボクは困るのあ」彼の言葉は、無邪気な笑顔に似合わず、辛らつだった。「物を大切にするのは凄く良いことだし、君が何処に何を仕舞ったのかさえ覚えていてくれば、ボクだって何にも言わないよあ。でもね、探し物の度に手伝えって言われても、ボクだって困っちゃうんだよ」

「手伝えなんて言っていないだろ」不満気に抗議するアルフ。

「言葉で言わなくなつて、凄く困った顔して扉の前に立たれたら、気にしないわけにはいかないでしょう？」先程のお返しとばかり、これみよがしに大きな溜息を吐く。「大体、アルフ、この間の日曜日、予定より早いけど、引越し済ませちゃおうって、突然、君が言い出してさあ。だからボク達、魔法……」

滑ってしまった口許を、アルフが素早く抑える。

肩を竦めながら、ルーは周囲を見回したが、彼等の会話に注意を払っている者など誰もいなかった。そのことを確認し、二人は揃って肩から力を抜いた。

口許を覆っていた手が離れた途端、ルーは声を落として言葉を継いだ。

「……魔法で荷物を運び出して、片付いたね、良かったね、これで夏休みは、この家でゆっくり出来るねって言ってから、今日までに、

ボク、もう五回以上、君の探し物、手伝ったよ。それもさあ、明日の授業で遣うものばかりなんだもん。放つとけないじゃないかあ」するとアルフは、少し情けなく見えてしまうほど、顔を顰めた。彼のこんな表情には滅多にお目に懸かれない。

「何だよ。別に、俺は……」言い淀む。

けれど、今日のルーは容赦が無かった。余程、腹に据えかねていたものとみえる。

「ボクはね、手伝うのが嫌だから、こんなこと言ってるんじゃないんだよ。でもさ、アルフ、何時だって、リオには見付からないようにって、うるさいんだもん」

「僕、気付いていたよ」リオがニコニコしながら言う。

アルフとルーは顔を見合わせ、揃って気まずげに頭を掻いた。

「チエ……」

「知ってたんだあ……」

「二人でござこそやってればね、嫌でも気付くよ」リオが足早に二人に近付き、小首を傾げてアルフの顔を覗き込む。「どうして僕には手伝わしてくれないんだろって、声を掛けてくれるのを、ずっと待っていたんだけどな」

陽に映えて、深い碧の瞳がキラキラと輝いた。

「だって、お前は、さ……」アルフは後手に手を組み、戸惑うように、気恥ずかしげに視線を逸らした。「忙しいかなあって、思ってた」

「どうして？」

「先生の手伝い。頼まれたって言って、家に帰ってからも、何やかやとやってるだろ……」

リオが眼を見開く。次いで、少し気まずげに俯き、瞳を伏せた。

「……ごめん」

逆に驚いたアルフが、顔の前で両手を強く振る。

「いいんだ！ 俺は、別に……」

「うつん……」リオが顔を横に振る。「そうだよ。これからは、

やめる。ごめん、僕、全然気付かなくて……」
一瞬、彼等の間に気まずい空気が流れた。

第3章 白の訪問者 No.2

それを、のんびりと間延びした声音が、見事なまでに打ち破る。

「ほらあ、アルフ」

「何だよ！」

苛々と答える。

だが、大概の相手なら怯えてしまつてであろう鋭い声も、この相手には効果はないらしい。相変わらずノンビリ口調のままだ。

「やつぱり、もっと綺麗に片付けようよ。そうしたら、余計な時間也使わなくていいんだしさあ」

言いたいだけ言つと、ルーは、そのまま背を向けて、さつさと歩き出した。

その背中を、アルフの不満気な声が追う。

「チエツ……。ルー、お前、最近、口が悪くなったぞ」

「君の影響です！ ねえ、リオ」

くるりと振り返り、褐色の髪を揺らしながら言つ。視線の先では、深い碧の瞳が笑っていた。

「君の部屋だもの、君が居心地が良いなら、今のままでも構わないけど……」

つい先程までの気まずい雰囲気など何処へやら、リオの笑みに、アルフもホツと表情を崩す。

何時でも、そう。雰囲気明るくするのはルーの役目。そして、じゃれ合うようなアルフとルーの話をまとめるのはリオの役目なのだ。

「でも、探し物をする時間を減らすのは、いいことじゃないかな。その分、一緒に遊んだり、話をしたり出来るしね。これからは、僕も、家には学校のお手伝いを持ち込まないようにするから。ね？」
リオの提案は、いちいちもつともだ。不満などあるはずがない。ルーは頷きながらニコニコとアルフを見上げた。

当のアルフといえば、何となく上手く乗せられたような気はしたものの、リオの提案が十分に満足出来るものであることは確かだった。ちよつと考え込む素振りの後、コクリと一つ頷く。

「……解った。そうするよ」

「大丈夫だよ。ボクも、リオも、ちゃんと手伝ってあげるからねえ」

「心配しないで、アルフ」眉根を寄せるアルフを気遣い、リオも補足する。「君が使い難くなるようなことは絶対にしないから」

「そんなこと、気にしちやいない。ただ……」

「ただ？」リオとルーの声が重なる。

アルフは照れくさそうに長めの前髪を掻き上げ、ポツリと呟いた。

「……悪いな」

一瞬、なんのことが解らず、顔を見合わせるルーとリオ。言葉の意図するところが分かった瞬間、ルーはアルフに抱き付いた。

「ばっかだなあ、アルフは」

続けてリオが言う。

「僕もルーも、お節介で手伝うんだ。君は、迷惑がたつて良いんだよ。それに……」

「君等は、相変わらず仲が良いね」

三人の会話に、突然割って入る声。

急に背中に投げられた、しかし、聞き慣れた声に、リオが振り返る。

そこには、リオ達と同じ基礎初等Aクラスの面々がいた。見知った顔に、リオがニツコリと笑みを返す。

「やあ、サライ。君、今日は家に帰るんじゃないかった？ いいの、こんなにノンビリしてて？」

サライは唇の両端を上げて答えた。

「僕の家は、そんなに遠くないからね。今から出ても、夕方までには着くさ。それより……」

「それより、お前等、寮から引越したんだって？」サライが言い

掛けた言葉を、彼の背後から顔を出したシューが横取りする。「どうしてだ？ 皆と一緒に寮暮らしも悪くないと思うけどなあ？ 此処はメシも美味いし、掃除だってしてくれるし」

「それは、ね……」

言い淀むリオを庇うように、アルフが間に割って入る。

「お前等、何にも解ってないんだな」余程、腹に据えかねていたのだろう、珍しく多弁になる。「理由が訊きたけりや、俺が教えてやるよ。俺達が寮を出たのはな、お前等がうるさいからだ。俺達は先生じゃないんだぞ。放課後とか休みの日まで部屋に押し付けて来て、課題教えてくれなんて言うなよな。その話を校長先生にしたら、今すぐに寮を出てもいいってさ」

そんなの嘘だ。

リオとルーは内心そう思ったが、一瞬視線を合わせただけで、口に出しはしなかった。

齒に衣着せぬアルフの話し振りは何時ものことで、皆、慣れたものの。誰も気にはしなかった。

「ひつでーなあ」そう言いながらも、笑っている。

「大丈夫。食堂はね、これからも使っていて、校長先生の許可、貰ってあるんだあ」

アルフの無骨さを補い、ルーが無邪気な笑みを浮かべながら言った。

「でもさ、お前等が住む家って、そんなに遠くないんだろ？ なあ、夏休みが終わったらさ、課題、教えてもらいに行ってもいいか？

先生に訊くより、お前等の方が解り易いんだよ。頼むよ」

「お前、俺の話、聞いてなかったのか？」

アルフが、身を乗り出し、さも不満気に言う。

第3章 白の訪問者 No.3

リオはクスクスと笑いながら、そんなアルフの腕に手を掛けて引き止めた。

「アルフ、僕が話すから……。ね？」

友を宥めつつ、リオは同級生達に向き直るとニツコリと微笑んだ。「勿論さ、ジギー。僕で役に立つのなら、何時でも声を掛けて。わざわざ家まで来てくれなくなつて、放課後、いくらでも時間はあるんだからね」

「リオ、いい加減にしとけよ。こいつ等、際限ないぞ」アルフが同級生達に対峙する。「おい、お前等。リオが何て言おうと、俺は絶対、家に入れてなんかやらないからな。ずうずうしく押しかけてくるなよ」

「そう固いこと言うなよ」誰かが悲痛な声を上げる。

丁度その時、こちらに向かつてくる一組の集団が、リオの眼に留まった。集団の中心で楽し気に笑っているのは、土器色の肌に、鮮やかな葡萄色のちじれ毛の少年。

「クワイ……」

リオは呟くと、無理に笑顔を作り、少年達の集団に小走りに近付いた。

「クワイ。あのね……」

クワイの視線は、一瞬、確かにリオを捉えた。けれど、友人達との会話に声をあげて笑い、あからさまにリオを無視して歩き去った。リオは、クワイの背中を淋し気に見送るしかなかった。

深い溜息を吐き、顔を上げると、そこには、心配そうな二対の瞳。アルフとルーだ。

「平気。大丈夫だよ、行こう。」

リオが小さく笑い、二人を促す。こんな時、何も言わず側にいてくれる二人の優しさが、リオには嬉しかった。

しかし……。

「やめとけよ、リオ」ジギーがこれ見よがしに大声で言う。「あいつらは、どうせ落ちこぼれなんだ。第一課題も満足に出来やしない。一年も経たないうちに辞めちまうさ」

リ才は急に表情を硬くした。

「ジギー、今の言葉、訂正して」

「何だよ、リオ。何、ムキになって……」

言いかけたジギーの表情が、次の瞬間、強張る。

リオは笑っていなかった。碧の瞳は、僅かに顰められている。

「もし、君が、授業の課題をクリアすることだけが魔法だと思つてゐるのなら、それは大きな間違いだよ。魔法の力は、何を切つ掛けにして開花するか解らない。それは、ルリアの民に等しく与えられた可能性なんだ。その可能性を否定する権利なんか、誰にも無い」

きつぱりと言い切られ、ジギーは慌てて言い訳の言葉を探した。

こんなに才を見るのは始めてだった。

「ごめん、ごめん。もう言わないよ。……」
「たたく、リオは真面目だからな」

乾いた笑いを漏らす。

それでも、リオの表情に再び穏やかな笑みが戻ったことを確認するやいなや、課題を教えてもらう約束を、しっかりと取り付けた。

これ以上この場にいたら、どんな約束をさせられるか解つたものじゃない。アルフはリオとルーの背を軽く押し、集団を抜け出した。そのまま、視線だけ振り返り、低く言う。

「……来るなよ」

「勘弁してよ、アルフ」

アルフの言葉を、どの程度、本気で聴いているものやら、同級生達は手を振って、さっさと散っていった。

彼等の後ろ姿を見送りながら、リオがアルフの腕を肘で突く。

「もう……。言い過ぎだよ、アルフ」

アルフは明らかに不満気にリオを見た。

「リオ、お前こそ、あんなこと言って、どういっつもりだよ。あいつ等、ホントに押しかけてくるぞ」

「大丈夫だよ、アルフ」

ルーが明るく言う。

「何だよ、何が大丈夫なんだよ！」

極めて不機嫌なアルフ。

だが、ルーは、やはりノンビリと応じた。

「だって、さっき、リオ、家に来てもいいなんて、一回も言わなかったもん」小首を傾げ、隣のリオの顔を覗き込む。「ねえ、リオ。でも、どうして？」

リオは一瞬躊躇い、しかし、少しはにかむように答えた。

「だって、……あそこは、僕達の家だから……」

ルーは瞳を輝かせて、先を促すように、じっとリオを見つめた。

アルフまでもが、無言で次の言葉を待っている。

リオは、照れくさそうに微笑み、ボソボソと言葉を継いだ。

「僕は、君達が思ってくれているほど、社交的じゃないんだよ。自分の領域に入り込まれることには、その……、凄く、抵抗が、……あるんだ。だから……」前髪を弄り、視線を逸らす。「やっぱり、あそこは僕達の大切な場所だし、その中には、他の誰も、……少なくとも、君達が認めてくれた人以外には入って欲しくないんだよ」思い掛けないリオの告白。

アルフもルーも、驚きの眼差しでリオを凝視し、継いで、お互いの顔を見つめ合った。

アルフは小さく笑うと、腕の中にリオの頭を抱え込み、柔らかな髪をクシャクシャと撫でた。アルフは何も言わなかった。けれど、それだけで良かった。アルフがリオの想いを理解してくれたことは、容易に解ったから。

三人は言葉もなく、ただニコニコと笑い合った。

「なあ、リオ」

突如、アルフが思い出したように口を開く。

「なあに？」

リオは、アルフを見上げて微笑んだが、漆黒の瞳は笑ってはいなかった。つられるようにリオの眼差しも真剣になる。

ル―は二人の顔を交互に見比べた。けれど、声を掛けることはなかった。

「俺さ、さっきは何も言わなかったけど……」アルフは一瞬躊躇い、だが、思い切ったように言う。「クワイのことは、放っておけよ」

「アルフ……」

「お前、あいつがすぐに突っ掛かってくること、気にしてるんだろ
う？」

リオは無言のままアルフを見つめ続けた。

第3章 白の訪問者 No.4

アルフが言葉を継ぐ。

「あいつが喧嘩っ早いのは、しょうが無いし、その理由だって、きつと優等生のお前を嫉んでるだけだよ。放っておけば、そのうちクラスも分かれるさ。それに……」僅かに眼を細める。「魔法の力は、本人次第だ。周りが、いくら気に掛けたって、どうなるものでもないだろう」

不思議そうにアルフを見上げるルー。

「いっぽう、リオは小さく頷いた。

「うん……、解ってる」口許に微かに笑みを浮かべる。「大丈夫だよ、アルフ。僕は、そんなこと、気にしていないから」

だが、アルフは納得しなかった。胸の前で腕を組み、眉を顰める。「ホントに、そうなのか？ 俺にはお前が必要以上に気にしてるように見えるけどな」だが、視線は直ぐに柔らかくなる。「大丈夫だ、リオ。放っておいたって、やばいと思えば、あいつの方から話し掛けてくるさ。誰に訊くより、リオに教えてもらうのが一番解り易いってのは、クラスのみんなが言ってることなんだから」

彼の言葉は、時にぶっきらぼうだけれど、何時も深い労わりが込もっている。それがよく解っているから、リオは素直に頷く。

「うん……。ありがとう、アルフ」

小さく息を吐き、肩を竦めて微笑む。周囲を安心させる笑みだ。

「でも、心配しないで。誰にでも好き嫌いがあることくらい、僕だつて弁えてる。これだけの生徒がいれば、話が合う人、合わない人、話し易い人、苦手な人……、色んな人がいるのは仕方ないことだもの。ただ……」小首を傾げる。「ただ、クワイは……」

「……なあに？ クワイがどうかしたの？」

リオの肩に抱き付き、ルーが問い掛ける。彼には、二人の会話が解り難いようだ。

「うつん。なんでもないんだよ、ルー」リオは、柔らかな褐色の髪を撫でながら優しく微笑んだ。「ただね、僕なんかでも、何か、彼の……、クワイの力になれることはないかなって、何かの切っ掛けになればって、そう思って……。それだけだよ」

「ふーん」

訝し気に、けれど、一応、リオの説明に納得した態を装うルー。

だが、アルフは、そう簡単には納得できなかった。

「まったく……」大きな溜息を漏らし、前髪を掻き上げる。「あいつ等の言葉じゃないけど、リオは真面目だからな。真面目過ぎるんだ」

「そんなんじゃないよ。違うんだ。だた……」リオは小さく首を横に振り、呟いた。「クワイを見てると歯痒くなるんだ。彼は強くなれるはずなんだ。護るべきモノがあるから。ホントに、ちっぽけな切っ掛けさえあれば……」

アルフとルーは、顔を見合わせ、肩を竦めた。

それに気付き、リオが照れくさそうに笑う。

「ごめんね。早く帰ろう」

二人の腕に、腕を絡め、リオは駆け出した。

彼の顔にある笑みが本物ではないことに、アルフもルーも気付いていた。けれど、何も言わなかった。今は、まだいい。これ以上、つまらない話に時間を割いてもしょうがない。今の自分達には、やらなければならないことが山積みなのだから。そう思った。

しかし……。

その日は、何時にも増して色んな出来事が一度に訪れた日だった……。

第3章 白の訪問者 No.5

後に振り返り、ルーが思い出し笑いをしたように、リオ達が初めての夏休みを明日に控えた『その日』は、色んな人に出会う日だった。

クワイの事が、とりあえず一段落し、三人が揃って新しい家へと向かう途中の小道でのこと……。

突然、木陰から、独りの青年が飛び出してきたのだ。

二人との会話に夢中になっていたリオは、直前にアルフに腕を掴まれ、後方へ引っ張られなければ、恐らく、その青年と真正面からぶつかっていたであろう。

「あ！ す……、すみません！」

アルフに肩を支えられ、咄嗟に、そう言葉にし、リオは深々と頭を下げた。

いっぽう、青年の方かというと、初めのうちこそ驚きに眼を見開きはしたが、三人の姿を認めると、不思議そうに首を傾げた。そして、リオ達の顔を順番に見渡していくうちに、彼の表情は徐々に笑みへと変わった。

「君、……『リオ』、だね。こんなふうに君に会えるなんて、森の中をぶらついてみるのも悪くないな」

リオとは対照的に、浅黒い肌に銀髪の青年は、印象的なブルーアンバーの瞳を細め、ニツコリと微笑んだ。

見ず知らずの相手に名を呼ばれ、リオはきょとんと眼を丸くした。「なぜ、僕の名を……？」

しかし、皆まで言い終わらぬうちに、リオを背に庇うように、アルフが間に割り込んだ。

「誰だよ、あんた」

アルフは、相手を上目遣いでじっと凝視した。疑心に満ちた鋭い視線だった。

けれど、青年は一向に臆すること無く、更に表情を崩した。

「やあ、元気な子だね。黒髪の君は『アルフ』、……だったかな？」
「お兄さん、ボクの名前、知ってる？」

眉を顰めるアルフの横からルーが顔を出し、問い掛けた。その表情には、屈託など欠片も無かった。

青年は、ルーの視線に合わせて屈み込み、小首を傾げて笑みを浮かべた。

「大きな円眼鏡の君は……、『ルー』だね。どうだい？ 合ってるかな？」

ルーが無邪気に驚いてみせる。

「当りい。三人とも当りだよ。凄いや。でも、どうしてボク等の名前、知ってるの？ お兄さん、誰？」

素朴な疑問。

青年は、首を回して自分の資格好を確認すると、頭を掻きながら大声で笑った。

「ああ、そうか。今日は制服を着ていないから、その質問も道理だね。失礼したよ」背筋を正して、三人に握手を求めるべく腕を伸ばす。「僕は、魔法遣い養成学校の、……いわゆる、君達の先輩つてところかな。でも、君達は僕のことなんか知らないよね。初めまして。僕の名前は、デュラギリス。友人はデュランと呼ぶよ」

「デュラギリス……さん？」

リオが驚きに眼を見張る。珍しく、アルフの表情にも緊張が走った。

二人の驚きの理由は、眼を輝かせながら身を乗り出したルーによって代弁された。

「デュラギリスさんって、今、卒業課程にいて、来年には卒業間違い無しって言われてる、あのデュランさん？」

デュランは膝を折り、視線の高さを三人に合わせた。その顔には温かな笑み。

「僕の名前、知っててくれたの？ 光栄だなあ」

「養成学校にいて、お兄さんの名前、知らないわけ無いよ。五百年ぶりに、養成学校の最短卒業記録を十年も更新するだろうって、すんごい噂だもん」

ルーが無邪気に言った。

その隣で、アルフは相変わらずリオを背に庇うように立ったまま、相手をじっと睨み付けている。

その視線に気付いたデュラン。笑顔が苦笑いに変わる。

「でも、僕が来年卒業出来るかどうかは、まだ解らないんだよ。卒業課題、チョツと手間取ってるしね。それに、今は、僕なんかより君達の方が有名だよ。養成学校始まって以来の優秀な三人組のことは、最近、あまり学校へ行っていない僕の耳にまで届くほど、専らの噂だ。その噂の君達に、こうして会えるなんて、ホントに光栄だよ」

「あんだ、何が言いたいんだ？」

アルフは、不愉快さを隠すこと無く、投げ付けるように言い放った。

第3章 白の訪問者 No.6

デュランは肩を竦めると、少し困ったように眉根を寄せ、首を傾げた。

「別に、他意はないさ。噂どおり三人一緒に居るところを偶然見掛けたんでね、話をさせて戴く栄光に与りたいと思ったただけさ。いけなかったかい？」

「貴様……。からかいに来たのか？ だったら俺が相手になってやる！」

デュランの一言一言が、アルフの感に触った。怒りは弥増すばかりだ。

そんなアルフの怒りを感じ取ったデュランは、顔の前で両手を大きく左右に振った。

「おいおい、やめてくれよ。僕は平和主義者なんだから」

「俺はな、今、物凄く苛付いてんだ！」

アルフが一步にじり寄り、デュランは一步後退った。

アルフは更にもう一步進み出ようとしたが、彼の行く手を阻むように躰の前に伸ばされた腕に気付き、足を止めた。

その瞬間、リオがアルフとデュランの間に躰を滑り込ませた。

「どけよ、リオ！」

アルフは言ったが、リオはその場を動かうとしなかった。背後のアルフを振り返り、小声で囁く。

「僕が話すから……」

「リオ！」

アルフは明らかに不満気な表情を浮かべ、リオの肩に手を掛けたが、もう片方の腕をルーに引っ張られて、渋々口を閉じた。

リオは、アルフとルーに小さく笑い掛けると、デュランに向き直り、ニツコリと微笑んだ。

「お話をお聞きます」

デュランがホツと息を吐く。次いで、三人の顔を交互に見比べつつ笑った。

「噂どおりだね」

リオの顔から笑みが消えた。

「僕達のが、どのような噂になっているのか、残念ながら僕は知りません。しかし、噂で判断されるのは本意ではありません。直接お話させて戴いて、噂ではない僕達を、貴方ご自身が評価して下さい。どんな評価を下されようとも、僕は、……いいえ、僕達は、全く気にしませんから」

「可愛い顔をして、性格は見掛けどおりというわけでは無さそうだね。……面白い」

リオの深い翡翠色の瞳を見つめ返し、肩を竦めると、デュランは、今度はにこやかに笑った。

「安心したよ。君なら決して負けないだろう。『嫉妬』という名の魔物には。それに……」

リオの背後で、何時でも飛び出せるように姿勢を低く構えるアルフト、彼の腕を引っ張りながら、こちらを心配そうに凝視しているルーの姿を瞳の端に捉え、デュランは言葉を継いだ。

「君には、良い友達が居るようだからね」

リオが一瞬眼を見開く。口許に温かな笑みが零れた。

「僕には、貴方のおっしゃりたいことが、よく解りません。でも、一つだけ、お答え出来ます。僕には、本当に素晴らしい友人がいます。彼等に出逢えたこと、それだけが、今の僕の誇りです」

素直な、心からの言葉。

デュランが微かに肩を竦める。そして、リオの肩に掌を置くと、そのまま一步前に進み、リオ達三人の間に立った。訝しむように見つめる三対の瞳の前で、デュランの顔から微笑みが消えた。

「魔法遣いを目指す者が、全員、君達みたいに無欲なわけじゃ無い。力への憧れが強ければ強いほど、妬みや嫉妬も大きくなるものだ。この先、色々な噂が君達の耳に入るかもしれない。妬みや嫉妬は、

謂れの無い下卑た言葉となつて君達を襲うだろう。僕も、……いや、僕でさえ、そんな噂に悩まされたのだからね。でも、噂なんてものは、自分に都合良く考えればいい。そんなもの、気にすることはない。養成学校は、君達に期待しているよ。君達は、きっと、僕など足許にも及ばぬくらいの功績と榮譽によつて、養成学校に名を残すこととなるだろう。色々な障害は有るだろうが、真つ直ぐに能力を伸ばし、この世界ルリアの発展に寄与してくれたまえ。これからのルリアは変わらなければならないのだから……。我々の命の長さは、変化や発展を阻んできた。しかし、今のままではダメなんだ。ルリアに必要なのは、過去の伝統や慣習に捉われない、変革なんだ。僕は君達に期待しているよ。共にルリアの未来のために尽力しようじゃないか」

次いで、デュランは、リオに正対すると、小柄な彼を見下ろして言つた。

「これは、君達と同じように噂に悩まされた、お節介な先輩からの忠告だ。荷物にはならないから、頭の何処かに残しておいてくれ」その顔に再び笑みが浮かぶ。「まあ、真面目な話は、これくらいにして……。君達に会えて、ホントに良かったよ。噂だけでは人は判断出来ない。リオ、君の言うとおりだね。何時か僕も、君の素晴らしい友人の一人に加えてもらいたいものだよ。どうかな？」

探るような問い。

リオは真つ直ぐにデュランを見つめ返した。その深い碧の瞳に木漏れ陽が映え、キラキラと輝く。

「有難うございます。でも……」小首を傾げ、微笑む。「残念ですが、多分、それは無理だと思います」

「なぜ？」

デュランはリオを真似て首を傾げた。

リオは、二人の会話にじつと耳を欹てているアルフとルーを振り返り、幸せそうな笑みを浮かべた。

「彼等は、僕にとって、本当の『家族』なんです。『家族』は、意

図して得られるものではありませんから……」

デュランが一瞬、キョトンと眼を見開く。やがて、声を上げて笑った。

「これは、一本取られたよ。参った、参った」

デュランはリオに握手を求め、アルフとルーに手を振り、再び、独り、森の奥へと去っていった。

背の高い背中を見送った後、リオは二人を促して森の家へと足を向けた。

「すっかり遅くなっちゃったね。早く帰ろう。片付け、してしまわないと……」

二人は無言でリオの後に付いて歩を進めた。

第3章 白の訪問者 No.7

しかし、アルフは不満気に足許の草を蹴り、ルーは少し困惑の態で、明らかに言葉を探しあぐねていた。

そんな様子を眼の端に捉え、リオは話の切っ掛けを与えるように、楽し気に口を開いた。

「デュランさんって、面白い人だったね。先輩のあの人の方から、僕達に声を掛けてくれるなんて、本当なら有り得ないことなのに。気さくな人だね」

リオの言葉を受け、ルーは何か言い掛けた。しかし、言い淀む。

「ボク……」

明らかに、何時ものルーらしくない。

「どうした、ルー？」

最後尾にいたアルフが、ルーの肩に手を掛け、訊いた。

ルーは、首を左右に何度か傾げたが、困惑も露に呟いた。

「ボク……、あの人、あんまり好きじゃないなあ……」

思い掛けない言葉。

アルフとリオが、揃って驚きを口にする。

「へえ……。お前がそんなこと言うなんて、以外だな」

「君が、誰かを『嫌い』だなんて言うの、初めて聞いたよ。どうかしたの？」

ルーは、途惑うように顔を顰めながら、言い訳するように言った。

「ボクだって、好きじゃない人くらい居るよあ。みんなのこと、君達と同じようには思えないもん」

「ホントに、どうしたんだよ。珍しいな」からかうようなアルフの言葉。

遂にルーは拗ね気味に唇を尖らせた。

「ボクにも、良く解んないよ。でも、何となく嫌なんだもん」

「お前がそう言うなら、俺も気を付けるよ」

「アルフ、君まで……」

リオが眉を顰める。

しかし、当のアルフは、一向に悪びれる様子も無く、腰に手を添えてリオを見遣ると、口の端を微かに上げた。

「気にすんな。俺は嫌いな奴の方が多いんだから。あいつも他の奴等と同じってだけさ」次の瞬間、表情を陰しくする。「それより、リオ。お前、気を付けろよ」

「何？　どういうこと？」

不思議そうに問うリオ。

アルフの表情が、ますます陰しさを増した。

「あいつ、妙にお前に興味があるみたいだったから。あんな奴、ろくなもんじゃないさ」

「アルフ、よく知りもしない人のことを、そんなふうに言うものじゃないよ」

「お前は、どうして何時もそうなんだよ。嫌なものは嫌だって言えよ。少しは人を疑えよ」

「アル……」

リオは困り果てたように眉根を寄せ、口を噤んだ。

アルフは、リオから視線を逸らし、一つ大きな溜息を吐いた。けれど、それだけでは高ぶった感情は抑えられなかった。声を荒げ、言葉を継ぐ。

「嫌なんだよ、俺は！　お前は他人を信用しすぎる。だけどな、人なんて、すぐに裏切るんだ。お前が誰かに裏切られた時、傷付いて落ち込んで、悲しそうにしてる姿なんか、俺は見たくないんだよ！　そんなの、俺は、嫌で嫌でしょうがないんだよ！」

そう叫ぶなり、アルフは森へ向かって駆け出した。

「アルフ！」

追いかけようとするリオ。けれど、その足を、ノンビリとした声が引き止める。

「大丈夫だよお、リオ」

「ルー？」

「アルフなら、何時もと同じ。絶対に、独りで先に帰ったりしないよ。途中の木の陰で、きつと待ってるからさあ」

「うん……」

アルフの消えた森の奥を覗き込むように見つめ、リオは頷いた。一つ大きく溜息を吐くと、褐色の髪の子を見遣り、小首を傾げる。

「アルフ、どうしてあんなに怒ったんだろう。……ルーには、解る？」

「うん。多分ねえ」

「どうしてなの？」

ルーは肩を竦め、僅かに舌を出した。

「そのうち解るよ。アルフは単純だからさあ」リオの腕に腕を絡める。「ねえ、それより、早く帰る」

第3章 白の訪問者 No. 8

丁度、家と学校との中間地点、鏡の泉の辺に二人が差し掛かった時、リオが、急に足を止めた。つられてルーも立ち止まる。

見上げるルーに、リオは何事かを思い出したように瞳を大きく見開き、次いで、心底済まなそうに謝った。

「ごめん、ルー。僕、すっかり忘れていたけど、今日の放課後、校長先生に呼び出されていたんだ。急いで行かなくちゃいけない」遠くに見える時計塔を振り返り、困惑の態で言葉を継ぐ。「ホントにごめんね。それと、アルフにも伝えておいてくれないかな。ごめんなって。帰ったら、片付け、必ず手伝うからって」

「うん、解った」ルーはコクリと頷き、パタパタと手を振った。「いつてらっしゃい」

リオは、ルーの答えに安心したのか、ニツコリと微笑むと、直ぐさま踵を返して、今来た道を引き返そうとした。けれど、一旦足を止めて振り返り、口に両手を添えて叫んだ。

「ホントに、ごめんね！」

「ボクがいるんだから、心配しなくても大丈夫！ それより、早く帰ってきてね！」

ルーが大きく手を振る。

リオは、それに手を振って応えようと、くるりと背を向けて走り出した。

「校長先生が、リオに何の用なんだよ」

聞き慣れた、ぼやき声。

ルーが振り返る。

木陰から顔を出したのはアルフ。小さくなるリオの背中を見つめながら、不機嫌そうに唇を尖らせている。

「なあんだ。そんなどこにいたの？ リオ、心配してたよお」

小首を傾げ、ルーが、少し責めるように言う。

「……ごめん」

素直に謝るアルフ。

こんなにしおらしい彼の姿は滅多に見られない。ルーは楽し気だ。
「きつと、何か、お手伝いだよ。君の片付け、手伝えなくてごめんでさ」

「うん……」

「その分、ボクが手伝ってあげるからさ。いいでしょう？」

答えないアルフ。先程までの元気は欠片もない。少しボンヤリとして、何事か考えているようだ。

暫しの沈黙の後、やっと口を開いた。

「なあ……」

「なあに？」

再び、短い沈黙。けれど、自分から言い出したにも拘わらず、アルフは首を横に振り、肩を竦めた。

「……いや、いい。何でも無い」

「変なアルフう」

面白ろがる態で、しかし、それ以上は追求しない。それがルーの良いところでもある。

「じゃあ、さつさと帰って、さつさと片付けましょう！」

「おい、俺の部屋なんだからな」

ぼやきつつ、それでも素直に帰路に着いた。

第3章 白の訪問者 No.9

生徒達が下校した後の養成学校は、昼間の賑やかさとは対照的に、淋しいほどに静かだ。

長い廊下の突き当り、一番奥に位置する校長室は、一際、静寂に包まれていた。部屋の窓から外を眺めていた豊かな白髭の老人は、ドアをノックする音に振り返った。

「お入りなさい」

声に従い、大きな重い扉を開けて現れたのは、美しい金髪の小柄な少年。リオだ。

部屋の中、壁際に独り佇む校長先生の姿を見付けると、その顔に何時もと同じ愛らしい微笑を浮かべた。

「こんにちは、校長先生」

「やあ、こんにちは、リオ。元気でやっていますか？ 今日急に呼びたてて、すまなかったね」

「いいえ。校長先生にお会い出来て、僕、嬉しいですから」

満面の笑みで答えるリオ。

満足気に頷いた校長先生は、ゆっくりと歩を進め、部屋の中央に置かれた机の奥にある自分専用の椅子に腰を下ろした。

リオは、校長先生のゆったりとした動きを楽しそうに見ていたが、促されて、机の横の椅子に、ちょこんと腰掛けた。

リオが椅子に落ち着くのを待って、校長先生が口を開く。

「寮からの引越しは、終わったそうですね。新しい家の住み心地はどうですか？」

リオは、僅かに小首を傾げた。

「まだ、良く解りません。一週間しか経っていませんから。でも、

毎日、本当に楽しいです」

素直な答え。

校長先生は白髭を揺らし、にっこりと頷いた。

「それは何よりですね。しかし、親友との三人暮らしとはいえ、子供ばかりでは色々と不便もあるでしょう。何か不都合なことがあれば、何時でも私に言って下さい。私は、この学校の校長として、生徒諸君が快適で充実した生活をおくれるように配慮する義務があるのですから。それに、君達が寮を出て、あの家で暮らすことを最終的に承認したのは私です。その責任も果たさせてくれなければいけません。解りましたか？」

校長先生の然り気ない気遣いに、リオは心から感謝した。その想いが零れる笑みとなる。

「ありがとうございます、先生。でも、あの素敵な家に住めるよう手配して下さっただけで充分です。僕達なら、本当に大丈夫です。」

アルフとルーは、とても頼りになるんですよ」

「そうですか。それを聞いて安心しました。しかし、約束して下さい。困ったことが起きた時には、必ず私に相談するとね。間違っても遠慮などしてはいけませんよ。それこそ、私に対して失礼というものです。いいですね？」

校長先生が優しく微笑む。

リオは少し照れくさそうに、小さく頷いた。

リオは、校長先生の笑顔が大好きだった。この老人に対して、まるで自分の肉親のような親近感と好意すら抱いていた。それは、リオが養成学校に入学するまでの間、親代わりに育ててくれたラウ夫妻に対する以上の想いだった。しかし、なぜそう思うのか、その理由はリオ自身にさえ解らなかった。

リオは、校長室の窓から見えるポラリスの森に視線を向けた。

この学校に入学して、もうじき四ヶ月が過ぎようとしている。しかし、森は、リオが入学した時と少しも変わらず、否、緑は深さを増し、そこにある。そのことが、不思議なほどにリオを安心させた。

穏やかな時が流れていく。

校長先生は、そんなリオの横顔を、暫くの間、じっと見つめていたが、やがて、ゆっくりと口を開いた。

「ところで、リオ。今日、君をここへ呼んだ理由を、まだお話していませんでした。実は、一つ、君にやってもらいたいことがあるのです。引き受けてくれますか？」

リオの驚きは、大きく見開かれた深い碧の瞳で解る。先生は小さく微笑み、組んだ掌の上に、白い髭ごと顎を載せた。

「私の頼み、……いいえ、『課題』と言っておきましょうか。これを無事終了することが出来たなら、その時点で基礎課程修了としましょう。それに値する能力が、君には充分にあります。本来であれば、既に応用課程に進んでいて、何の支障もない能力です。ですが、最短必須履修時間を定めている我が校としては、入学して僅か半年足らずの君を応用課程に進ませることは異例中の異例。周囲を納得させられるだけの結果を、形にして示さねば、後々、混乱を生じる要因となってしまうでしょう。そのための……、結果を残すための『課題』です。解りますね？」

リオは、椅子に行儀良く腰掛け、校長先生の話をじつと聞いていた。しかし、先生の言葉の端々に、微かながら何時もと違う響きを感じ取った。戸惑いがちに口を開く。

「先生……。何を隠していらっしゃるのですか？」

先生の表情が少し歪む。

リオは慌てて自分の発言を訂正した。

「ごめんなさい。僕……」

「いいえ……」先生が、ゆっくりと首を横に振る。「なぜ、そう思うのですか？ 私が何かを隠していると……？」

リオは暫し先生の顔をじつと見つめた。碧の瞳を僅かに伏せる。

「先生が、校則を破ってまで、誰か個人に便宜を図ろうとなさるなんて……、おかしいと思っただけです。それに……」視線がすっと上がり、真っ直ぐに眼前を見る。「なぜ、僕だけのですか？ 今の

僕程度の能力を評価していただけたというのであれば、それは、僕だけじゃ無いはず。少なくとも、アルフとルーが居ます。彼等だって能力は同じ位です」

校長先生は静かに、リオの次の言葉を待った。リオは戸惑いつつも言葉を継いだ。

「僕は、みんなと一緒に良いんです。急いでこの学校を卒業しなければならぬ理由は、ありませんから」

校長先生が優しく、けれど、僅かに自嘲を含んで微笑む。リオは、とても感の鋭い子だ。この子を相手に、今からしようとしている話しが、何処まで通じるか、自信がなかった。そして、こんな幼い子供を相手に、そんなことを考えてしまう自分自身が可笑しかった。

「これは、私の思い上がりでした。許して下さい、リオ」

リオは、少し頬を赤らめ俯いた。やはり、校長先生は何時もと同じだ。少しでも疑った自分が恥ずかしかった。

「僕の方こそ、生意気なことを言ってしまった。すみませんでした」

「いいですよ。私の思慮が足りなかったのですから」

「そんな……」

恐縮するリオ。

そんな彼を包み込むように、校長先生が笑った。

「それでは、おあいこということにしましょう。それで良いですね？」

「はい」リオの顔にも、笑みが戻る。「有り難うございます」

校長先生は、椅子の背に深く凭れ、胸の前で腕を組んだ。

「話を戻しましょう。『課題』という表現は適切ではありませんでした。そう……、お願いです。リオ、私のお願いを聴いて戴けますか？」

「はい。僕でお役に立てることがあるのですしたら、何でも……」

先生は満足そうに深く頷き、じっとリオを見つめた。その顔に、もう笑みは無かった。

第3章 白の訪問者 No.10

窓から、斜めに夕陽が差し込み、大きなテーブルの奥の椅子に凭れ掛かる校長先生の顔を照らした。その光は、真っ白な髭と髪を燃え立つように紅く染めあげ、深い皺を、より深く浮き立たせた。

リオが出ていった後の校長室の中。

独り残った校長先生は、大きく溜息を吐き、更に深く椅子に身を沈めた。

大切な教え子に、たった今、自分が指示したことは、本当に正しかったのか、判断しかねていた。こんな困惑は、初めてだった。

暫くの間、じっと天井を凝視する。彼の脳裏には、昨日、この部屋で起こった出来事が、今、眼前で展開されているかの如く、まざまざと浮かんでいた。一つ一つの会話を租借し、全てを反芻する。その作業を終えた時、彼の決心は固まった。これから先、何が起ころうと、自身の責任として、最後までリオを護り通すことを。それが、たとえ、天上界に、……あまつさえ、神に逆らうことになるうとも……。

昨日の出来事……。

それは、異界の住人の突然の訪問で始まった。

校長室は薄暗かった。

何時ものように椅子に座り、じっと前方を見つめているのは校長先生。彼は灯りを付けようとはしなかった。

夕暮れ時の柔らかな光が、側面の壁に配された三つの大きな窓から差し込み、その部屋の中央付近、先生の視線の先にじっと佇む二

つのシルエットを形作っていた。

影の主の長い金色の髪と空色の瞳は、薄暗がりの中で色を無くしかけていたが、特有の美しい、しかし、何処か無機質な風貌と、何より、夕陽に紅く染めあげられた大きな翼が、彼等が何者であるかを如実に物語っていた。

……天使。

神の庇護の許を離れて以来、ルリアの地を天使が訪れることなど、殆ど無いに等しい。ましてや、魔法遣い養成学校の校長室に天使が足を踏み入れたのは、創立三千年の歴史の中で初めてのことだ。

陽は消えていく。

部屋は紅から次第に色を失い、やがて灰色へと色を変えた。その灰色さえも闇に染め変えられるまで、長い沈黙が続いた。

遂に業を煮やし、校長先生が口を開く。

「いつたい、何時まで、だんまりを決め込まれるおつもりかな？

貴方達が天の花園を出で、このような遠方まで足を運ばれるには、それ相応の理由が御有りのはず。ご用件をお伺いしましょう」

その言葉を待っていたかのように、年若い天使が話の口火を切る。彼の口調は、天使としての自信に満ち溢れていた。

「では、問う。ここに『リオ』という名の子供が居るだろう。その者の力量を教えてもらいたい」

校長先生の口許が微かに歪む。天使の、特に歳若い天使の口調は、何時、何処で聞いても耳障りの良いものではない。けれど、そんな思いを億尾にも出さず、机の上に肘をついて、その上に顎を載せると、瞳を閉じた。

「これは異なこと。なぜ、そのようなことをお尋ねになる？ 魔法遣いになるうという一生徒のことなど、天上界の皆様のお耳に入るとも思われませぬが」

若い天使は、小さく肩を竦めた。

「その者に、もしも素質があるのであれば、天上界に連れていこうと考えている」

校長先生は眉を顰め、身を乗り出した。

「……これは、これは、何とも奇怪なことを申されますな。天上界が人手不足ということなど、有り得ぬでしょう。そのような嘘を吐かれてまで、なぜ、リオを欲されるのですかな？」

「お前には関わりのないこと。知る必要は無い」

若い天使は、明らかに見下した態度で、短く答えた。

校長先生の顔から、何時もの柔和な笑みが消え去った。生徒達には決して見せたことのない厳しい表情で、若い天使を見据える。

「この学校の生徒は、全員が私の子供も同然。しかも、リオは親のいない子。私がポリリスの森で拾い、知人夫妻に預けて、育てて戴いた子です。彼は、そのことを知らないが、私は彼の父親同然と思つています。子供を預けなければならぬかもしれないというのに、親が、その理由さえ知る必要はないと言われるのか。話せないような理由なら、今すぐお引き取り戴くしかありません」

「貴様、天上界の決め事に逆らうか？」

高飛車な言葉と口調。

先生の瞳が更に厳しいものに変わる。両の手で机を強く叩くと、若い天使を見据えたまま、ゆっくりと椅子から立ち上がった。発せられたのは静かな声音。しかし、裏には、明らかに強い怒気が込もつていた。

「我々は、夢幻界ルリアに住まう者。ルリアは、天上界の庇護無くしては生きられぬ人間界とは違う。遠い昔、天上界の支配を拒否し、神がそれを認められたはず。いわば、その存在をして、天上界と同等の立場にある。お主等、若い天使どもは、過去の歴史さえ知らぬとみえる。天上界の決め事など、ここでは一切通用せぬ。さあ、帰られよ！」

「なに！」

見下していた世界の、くたびれた老人から浴びせ掛けられた予想外の反抗の言葉。若い天使は驚き以上の怒りに身を震わせ、一歩足を踏み出した。

「よせ……」

それまで無言で二人の遣り取りを聞いていた歳嵩さの天使が、若い天使に背を向けた状態で、彼等の間に割って入った。

若い天使は、あからさまに不満気な表情で、年嵩の天使に訴えた。
「お止め下さるな！ このような無礼者には、我等天上界の偉大さを再認識させなければなりません！」

「お前は黙っている！」

年嵩の天使の強い口調。

若い天使は一瞬で萎縮し、次いで、渋々引き下がった。

第3章 白の訪問者 No. 11

年嵩の天使は、天使特有の柔らかな、けれど、何処か無機質な微笑みで校長先生に向かい、ゆつくりと口を開いた。

「大変ご無礼致しました。この者には、言葉遣いから教え直しますゆえ、なにとぞご容赦下さい」

「ぜひ、そうして戴きたいものですな」

校長先生は言い、瞳に鋭い光を宿したまま、再び椅子に身を沈めた。

年嵩の天使の口許に僅かに苦笑が浮かぶ。

「……先程、この者が申し上げましたとおり、本来であれば、下界の住人に天上界の事柄を語ることは、掟に反することなのですが……まあ、良いでしょう。貴方には、正直に申し上げます。ですが、このことは他言無用。この場だけの話として戴きます。宜しいですね？」

校長先生は無言で頷いた。

それを確認した後、年嵩の天使はゆつくりと語り始めた。

「……実を申せば、この地で『リオ』と呼ばれている彼の者は、我々の手違いにより、天上界から夢幻界に堕ちてしまった、我々の仲間なのです」

「なっ……！」

校長先生が言葉を失う。

天使は続けた。

「本来であれば、即刻連れ帰るべき処ではありますが、彼の者が、この地に堕ちてからの年月の長さを考えますと、天使としての素質及び能力を失っている恐れも十分に配慮せねばなりません。それ故、天上界に迎えるにあたって、事前に、その力量を確認しておきたい、というわけなのです。……ご理解いただけますでしょうか？」

年嵩の天使は、窺うように白髭の老人を見た。

先生は、暫くの間、机の上で組んだ掌を、無言で凝視していたが、ゆっくりと顔を上げ、視線を眼前の天使達へ向けた。

「……先程のご質問にお答えする前に、一つ、お訊きたい。なぜ、あの子は堕とされなければならなかったのですか。天上界において手違いなどということがあろうはずが無い。そんな、いい加減な話では、私は騙されませんよ。何か、必ず理由が有るはずです。それを、お教え戴きたい」

「……それは、残念ながら、申し上げることは出来ません。何卒お許し下さい」

天使は、それきり、その件について硬く口を閉ざした。

先生は暫く考え込んでいたが、突然、弾かれたように顔を上げた。顔色が、明らかに青ざめていた。

「まさか、あの子の、……リオの瞳か？ あの深い碧の瞳のために……」

「どうか、もう、それ以上は……」

年嵩の天使は、真っ直ぐに手を差し出し、先生の言葉を制した。

窓から差し込む光は、何時の間にか、淡い月明かりに変わっていた。その光に照らされ、校長先生の顔に刻まれた皺が、より深く浮かび上がった。蒼い瞳には、深い哀しみが宿っていた。

暫く無言だった先生が、ゆっくりと口を開く。

「……私の見る処、あの子……、リオには、魔法遣いとしても、天使としても、充分以上の素質があります。しかし……、言葉だけでは、お信じにはなれますまい。貴方達が、ご自分のその眼で、直に確かめられると良い」

「……と、言われますと？」

「彼に一つ、課題を与えましょう。その結果を見て、貴方達が判断されてはいかがですか？」

「なるほど……。解りました。では、お言葉に甘え、そうさせていただきますしょう」

答えるが早いか、天使達は早々に踵を返した。

先生は椅子から立ち上がり、先に立つて扉を開けて、天使達を送り出した。

年嵩の天使が、再度、校長先生に向き直り、軽く会釈した。

「ご配慮、感謝いたします」

先生は小さく微笑んだが、次いで、微かに眉根を寄せ、重い口を開いた。

「このことは、本人にも……？」

年嵩の天使が頷く。

「今はまだ、内密に願います。彼の能力の程が解るまでは」

「本当に……、本当に、あの子は、天上界に受け入れられるのですか？」

不安気な先生の言葉。

天使は、それを、にこやかに笑い飛ばした。

「ご安心下さい。素質があれば、必ず天上界に迎え入れます。何より、彼は元々、我々の仲間。天使なのですから」

天使達が去った後、校長先生は独り、校長室の椅子に深く身を沈め、物思いに耽った。

室内には、窓から差し込む月明かり以外、灯りは無かった。

彼は、机の上に肘をついて指を組み、その中に顔を埋めて深い溜息を吐いた。

「ここ暫く、天上界から何も聞こえてこぬと思っておれば、……馬鹿者どもめ！ 何と愚かなことを……！」

天使達はエリート意識の塊。そんな世界が、理由はともあれ、一旦下界へ墮とされたり才を、本当に受け入れてくれるのか。否、それ以上に、リオが墮とされた理由が、彼の、あの深い碧の瞳であるのなら、天上界に彼の安住の場所があるはずもないのだ。

校長先生は、生まれて初めて、自分の下した判断に迷いを感じていた。

第3章 白の訪問者 No.12

天上界へと戻る空の道の途中、若い天使は、どうにも納得しかねるという思いも露に、年嵩の天使に問い掛けた。彼の声には、天使としてのプライドを傷付けられたことへの強い憤慨が込もっていた。「あの者は、いったい何者のですか？ 分を弁えず、全く、無礼な……」

「言葉を慎め！」

「は？」

訝しむ年若い天使。

年嵩の天使は大きな溜息を吐いた。

「お前には見えなんだか？ あの方の背中に薄っすらと揺らめいていた金色の翼の影が……」

「は？ 金色の……？」若い天使がハッと息を呑む。「まさか……」

年嵩の天使は、じっと前方を見つめたまま、無感動な口調で言った。

「あの御方は、その昔、聖天使様の位に名を連ねていらした方」

「なんと……！」

「時代が時代であれば、たかだか守護天使でしかない我々など、お言葉を掛けて戴くどころか、ご前に侍ることすら許されぬ高貴な御方なのだ」

若い天使の顔色が、瞬時に青ざめた。しかし、直ぐに落ち付きを取り戻すと、おずおずと尋ねた。先程までの威勢は、すっかり萎えていた。

「しかし、そのような高貴な御方が、なぜ今、夢幻界などにおられるのですか？」

「詳しくは、私も知らん。だが、……お主も話には聞いたことがある。三千年ほど前に起きた『天上界の大反乱』のことは……。天

上界の威信を根本から覆したと言われるほどの大事件だった。私も、まだ幼い子供でしかなかったが、……嫌な思い出た。……まあ、それはいい。その大反乱の後、あの御方は、独り、天上界を去られたのだそうだ。夢幻界にいらしたことは、私も最近まで知らなかった。なぜ天上界を去られたのか、去られなければならなかったのか、その理由は……、訊くな。我々が知る必要は無い。元は聖天使様とはいえ、所詮、今は墮落者でしかないのだからな」

年嵩の天使は、憤りも露わに、そう呟くと、翼を大きく羽ばたかせた。

第3章 白の訪問者 No.13

家の前の草原に大の字に寝そべり、アルフは、ボンヤリと空を眺めていた。

今日も良い天気だ。蒼い空に、白い雲がゆっくりと流れていく。その時、彼の耳に、軽く草を踏み、近付いてくる足音が聞こえた。聞きなれた、ペタペタとした音。それを無視し、空を見上げ続けていると、視界の端に褐色の髪が映った。

ルーは、寝転がるアルフの隣に腰を下ろすと、真上から友の顔を覗き込んだ。

「さつきから、何見てるのぉ？」

ノンビリとした話し方。

アルフが気だるげに答える。

「ん……。……空」

「ふん。それで、何が見えるの？」

「別に……」

気のない答え。

ルーは後手に腕をつき、軀を反らしてアルフの視線を辿り空を見上げた。そこには、何時もと同じ、見慣れた蒼い空があるだけだった。

ルーは、そのままの姿勢で、首だけを回してアルフを見下ろし、少しからかうように声を掛けた。

「アルフ、リオのこと考えてたんでしょ？ 心配？」

アルフは、視線だけをルーに向けた。

「そんなこと無いさ。あいつは俺なんかよりずっと強いんだ。心配なんかするわけないだろう」

「嘘ばかり。じゃあ、どうして空なんか見てるの？ 何も見えな
いんでしょう？」

アルフが大きく溜息を吐く。

「俺だって、たまには物思いに耽りたい時だってあるわけ」

「へえ……。そうなんだ。随分『たまに』なんだねえ」

ルーの憎まれ口に、アルフはフンと鼻を鳴らし、聞き流すように
視線を空に向けたが、流れる雲をボンヤリと見ながら、再び口を開
いた。その声音は独り言のようでもあり、ルーに語り掛けるよう
でもあった。

「ただ、さ……」

「ただ？」ルーが先を促す。

「たださ、何となく……。リオは何時も何を見て、何を考えてるん
だろう……。って、思ってたさ」

次いで、片肘をついて軀を起こすと、そんな似合わない言葉を口
にしてしまった自分自身を恥じるように、言い訳するように言った。
「だって、あいつはさ、学校に行く途中でだって、授業中だって……
、雨の日だってだぜ、暇さえあれば空を見上げて、妙に嬉しそう
な顔していやがるから……。だから、あいつの碧の瞳は、この空の
中に、俺には見えない何かを見てるんじゃないかな……。なんて、
そんなふうに思ったりしてさ。だから、あいつが見てるもの、探し
てみたくなっただよ。……。ただ、それだけさ」

アルフは無造作に仰向けに寝転がった。

「でも、いくら見てても、結局、俺には、何時もと同じ蒼い空しか
見えないんだよな……」

「へえ……」

ルーの瞳に悪戯っぽい笑みが浮かぶ。膝を抱えると、アルフを真
似て空を仰ぐ。

「アルフはさ、リオのこと、ホントに大好きで、ホントに大切に思
ってるんだねえ」

思い掛けないルーの言葉。

「な……、何言っただよ、急に」

アルフが飛び起きる。

ルーはニヤニヤと笑いながら、からかうように言った。

「ほおら、慌てた。君が慌てるなんて、滅多に無いじゃない？

……ってことは、やっぱり凶星ってことだねえ」

「バカ言っなよ！」

「なんで『バカ』なの？ だって、誰かと同じものを見たいって思うのは、その人と同じ心を持ちたいってことでしょ？ それは、その人のことが好きだからだよ。誰かを『好き』って思う気持ちって、凄く素敵なことだよ。リオだって、そう言ってた。どうして隠すの？ アルフ、可笑しいよ」

アルフは、傍らの草を千切りながら、何やら口の中でモゴモゴと呟いていたが、やがて、その場に胡座をかくと、諦めたように一つ溜息を吐いた。

「……そりゃあ、好きだぜ。お前だって、リオのこと好きだろう？」

「うん。大好き！」

屈託の欠片も無いルーの答え。

アルフは、少し面食らったようにルーを見つめたが、苦笑いと共に、視線を再び空へ向けた。

第3章 白の訪問者 No.14

そんな、口下手な黒髪の友の心の中を見透かすように、ルーが問い掛ける。

「リオさ、校長先生のご用だからって言って、凄く慌しく出掛けてったよねえ。何時もと違って理由も行き先も教えてくれないし……。ちよつと変だった。ねえ、なぜだと思う？」

「知らないよ。それに、あいつのお手伝い好きは、今に始まったことじゃないだろ」言葉とは裏腹に、不機嫌そうなアルフ。「それより……。お前達って、校長先生と知り合いなのか？」

「うん」コクリと頷いた後、ルーは小首を傾げ、訝しむようにアルフを見た。「あれ……。言ってなかったっけ？」

「どんな知り合いなんだよ」不満気な声。

ルーが楽しそうに友の顔を覗き込む。

「へえ……。気になるんだあ？」

「何だよ！ 気にしてなんかいないよ！」

口調は荒いが、酷く照れくさそうな表情。

「アルフ、変なお」ルーがポツリと呟く。

その声は、幸いなことにアルフの耳には届かなかったようだ。

何を言っても全く堪えないルーの様子に焦れたのか、アルフは、遂には地面を叩き、拗ねたように唇を尖らせた。

「いいよ、別に」

そのまま、片膝をついて立ち上がりかけた。

ルーは、大袈裟に肩を竦め、ペロリと舌を出すと、悪戯っぽく笑った。

「教えてあげてもいいよお。その代わり……。アルフも教えてよ」

「……。何をだよ」

座り直したアルフに顔を寄せるルー。彼の表情は、珍しく真剣だった。

「君は、ボク達以外の誰とも友達になろうとしないよね。どうしてなの？ どうして、何時も独りぼちで居ようとするの？」

「……どうして、そんなこと訊くんだよ」

ルーから軀を引き離し、少し訝しむ態で見つめるアルフ。何時もはボンヤリしているくせに、妙なところで聡い。ルーのそんなところが、アルフは少し苦手だった。

更に、ルーは諦めが悪い。アルフの腕にしがみ付き、下から覗き込むように顔を寄せる。

「教えてよお！」

「訊いたって、しょうが無いだろ！」

何とかその場から逃れようとするアルフ。だが……。

「アルフ！」

鋭いルーの声に、反射的に動きが止まる。ゆっくり振り返る。真剣な、今にも潤みそうな、大きなトパーズの瞳が、じっと見上げている。視線を逸らせなかった。

「……心配なんだもん」ルーは少し拗ねたように唇を尖らせた。「君が、もしも独りになったらって思うと……、凄く、心配なんだよ」

アルフは眉根を寄せた。

アルフの腕にしがみ付いたまま、表情を緩めたルー。視線を落とす、それでも言葉は途切れない。

「そりゃあ、ボクもリオも、ずっと、ずっと、君と一緒に居る。だから、そんな心配は必要ないって、ボクだって思うよ。でも、……それでも、時々、凄く心配になるんだよ」

それは、決して嘘では無く、大袈裟でも無い、正直なルーの、そして、きつとリオの想い。

だが、今、心を満たす、この温かな感覚を、どんな言葉で表現すればいいのだろうか。アルフは、適当な言葉を持っていなかった。そんな自分が少し不甲斐なくて、我知らず、口調が僅かにきつくなる。

「お前、……結構、お節介だな」

言い過ぎたか？

一瞬、そう思った。

だが、ルーには全てお見通しのようだ。気にする素振りもなく、ニコニコしている。

何も気負う必要の無い友の存在。そんな友を得られた幸福を噛み締め、自然と口許がほころぶ。

「リオから、何も聞いてないのか、俺のこと……？」

ルーは心外だと言わんばかりに、鼻が触れるほどに顔を近づけてきた。

「リオは、そんなこと勝手に喋るような子じゃないよ。知ってるでしょう？」

「悪い……」気まづげに俯き、素直に謝る。

ルーの表情に潜む言外の不満は尤もだ。自分の発言を後悔する。

胡座をかき、前屈みに膝の上で指先を組む。眼前に広がる静かな湖面。差し込む木漏れ陽がキラキラと反射する。そこに、今ここにはいない友の姿を重ねた。

心が、あの日に帰っていく。

第3章 白の訪問者 No.15

「俺が小人族に拾われて、育てられたってことは、知ってるよな」
静かに始まるアルフの言葉。独白に近い。

応えるルーも、ただ無言で頷く。

それを眼の端で確認し、アルフの告白は続いた。

「俺はさ、自分は小人族で、両親は本当の父さんと母さんなんだって、ずっと信じてたんだ。眼や耳や鼻の形が違っていても、そんなのは子供のうちだけのこと。きつと、何時かは、父さんみたいになれるはずだって、信じて、……疑ったことなんか無かった。大好きだったんだ、ホントに。でも……」過去の時を思い出し、スツと眼を細める。「俺は小人族じゃなかった。どんなに待ったって、俺の耳は絶対に尖らない。鼻も目も、丸くて大きくはならない。そのことを思い知らされたのは、……七歳の頃だったかな。俺の背丈が、父さんを追い越した時だ」

その瞬間、組んだ指先が小刻みに震えた。

「俺が小人族ではないらしいって噂は、あつという間に一族中に知れ渡った。そしたら……、急にだぜ。それまで優しかった一族の奴等が、全員、敵になった。俺は、子供達の遊びの輪から仲間外れにされ、石を投げられ、蔑まれ……、遂には一族を追われたんだ。まるで狩り立てるように。だから……、逃げた」

ルーの表情が曇る。

「小人族は、他の種族と交わることを嫌うっていうのは……」

「ああ。ホントさ」アルフの深い溜息が言葉となる。

突然、ルーがアルフの腕にしがみ付いた。

「ごめん、アルフ。もういいよ。もう、やめよう」しきりに首を横に振る。「……ごめんね、ボク……。訊かなきゃ良かった。こういうこと訊くのって……、凄く哀しくなるんだね。知らなかった。ゴメン……」

ルーは顔をアルフの腕に押し付けていたので、アルフには、その時の彼の表情は見えなかったが、その声の調子から、今にも泣き出しそうだということは容易に想像出来た。

アルフは、唇の片端だけを持ち上げ、ルーがしがみ付いたままの腕とは反対の腕で、柔らかな褐色の髪を撫でた。

「訊けよ。いや……、訊いてくれよ。訊いておいて欲しいんだ。お前は俺にとって本当に大切な友達だからさ」

顔を上げたルーの瞳は、アルフの予想どおり潤んでいた。それでも、大きな瞳を見開き、見上げてくるルーに優しく微笑みかけ、次いで、視線を空に向けて、アルフは言葉を継いだ。淡々とした口調。それが余計に、ルーを哀しくさせた。

「俺は何もしていない。ただ、別の一族だった。それだけだ。そんなこと、子供だった俺は知らなかったし、ホントに小人族なんだと信じてたんだ。なのに、あいつ等は、まるで俺が奴らを欺いていたかのように、俺を忌み嫌ったよ。疫病神だって、言われた。……哀しかった。俺は村のみんなが大好きだった。なのに、掌を返したような態度。俺は子供だったから、あの時の気持ちを上手く言葉で表現出来なかった。……絶望っていうんだよな、あの気持ちは……もう、誰も信じられない……、そう、思ってたんだ」

アルフは自嘲たつぷりに笑った。

「もう、忘れたと思ってた。でも……」乱暴に前髪を掻き上げる。「ダメだよな、俺も。未だに心のどっかに引っ掛かってんのかな。どうしても、誰かと接するのが……、怖いんだ」

アルフを見上げるルーの瞳が哀しみに潤む。

「アルフ……」溢れそうになる涙を右手の甲で拭いた。「……ボク等は？」

「え？」

「ボクとリオは……？」

一瞬、ルーの言葉の意図する処が解らず、アルフは眉を顰めた。しかし、次の瞬間、納得の態で小さく笑った。ルーの髪をクシヤク

シャと、少し乱暴に掻き回す。

「小人族に居た頃、俺は、毎日が辛くて、淋しくて……、この場から逃げたくて……、わけも解らず、当てもなく、家を飛び出した。森を彷徨って、彷徨って……、三日目だったかな、リオと……、そして、お前に出逢った」

胡座をかき直し、鼻の頭を親指で弾く。

「リオはさ……、笑ってくれたんだ」口許に照れくさそうな、無邪気な笑みが宿る。「なんだ、そんなことって、思つかもしれないよな。でも、その時の俺にとっては、多分、何ものにも変え難いほどに嬉しいことだったんだ」

暫し、無言でアルフを見上げていたルーは、小さくコクリと頷いた。

「うん……。解る、気がする」

それを確認し、アルフが言葉を継ぐ。

「あいつは、俺が誰かなんて関係無しに、笑って、手を差し伸べてくれた。その時の俺には、そんな何気ない言葉が、すっごく嬉しかったんだ。俺は生きていて良いんだって……、此処に居たいって、素直に、そう思ったよ」

話は、そこで終わった。

ルーは暫く無言のままだった。慰めの言葉を探しているのだろう。アルフは思った。そして、口許を僅かに歪める。何の言葉も要らない。今、腕に触れる、この温もりだけで充分なのだ。けれど、ルーには、そんなことを言っても解るまい。今は何も言わずにおこう。

アルフはルーの髪を、再び、優しく撫でた。

見上げるトパーズの瞳に、そっと笑い掛ける。

「……これで、いいか？」

小さく、それでもはつきりと、ルーが頷く。

「うん。……ありがと、アルフ」

手の甲で涙を拭う。まだ濡れている頬。

それを、アルフが指先でそっと撫でた。ルーは恥ずかしそうに袖

口で顔を拭き、無理に笑った。

「じゃあ、次は、ボクの番だね」

「もう……」いいよ。

アルフは、そう言おうとした。自分達の過去には、何時だって暗い影が付き纏う。解っていた。ルーが今から話そうとしているのは、リオの過去にまつわること。それによって、彼は、きっと、再び哀しい想いをするに違いない。それくらいなら、訊かない方が良い。訊く必要など無いのだ。

だが、アルフの考えを先回りするように、ルーが首を横に振った。「大丈夫。約束だから」両腕で膝を抱える。「こんなこと、ホントはボクが話すべきじゃ無いんだろうけどね……」

そう前置きして、ポツリポツリと、言葉を選びながら話し始めた。

第3章 白の訪問者 No.16

「この学校に入学するまで、リオがお世話になってたご夫婦のことは、アルフも知ってるよね」

「ああ。ラウ博士って人だろ」

頷きで応えるルー。

「ラウ博士と校長先生って、ずっと前からの友達なんだって」

「なんだ、そんなことかよ」

暗くも何とも無い。

自分の考え過ぎを呪うアルフの落胆は、声音にもはっきりと現れた。

だが、ルーの話は、それでは終わらなかったのだ。

話の腰を折られた彼は、少し不機嫌そうにアルフを睨んだ。

「まだ途中なんだよ。最後まで聞いてよ！」

アルフが大袈裟に肩を竦め、黙る。

もうすっかり、何時ものルーだ。立ち直りの早さも彼の長所。

アルフが視線で先を促すと、ルーは小さく笑って言葉を継いだ。

「ラウ博士も校長先生も何も言わないから、リオは知らない振りしてるんだけど、赤ん坊だったリオを森の中で見付けたのって、ホントは……、校長先生なんだって。校長先生は独身だし、お年だからラウ博士夫妻にリオを預けたらしいの。リオって名前も、校長先生が付けてくれたみたい。何処かの言葉で『神の河』っていう意味らしいんだ」一つ息を吐く。「それでね、先生、今でも、リオの本当の両親、探してくれてるみたい。だから、もしかしたら、今日出かけたのも、そのことなんじゃないかなあ。」

ルーの言葉を、アルフは黙って聞いていた。しかし、話が終わった時、ちよつと納得出来ないというように眉根を寄せた。

「……話は解った。でもさ、そのこと、お前が知ってるのに、どうして俺は知らないんだ？」

わざと意地悪気に言い、ルーににじり寄る。

何時もの二人のテンポに戻っていた。

ルーは両手を前に突き出し、それを振りながら慌てて言い訳した。「ボクだって、リオから聞いたんじゃないよ。僕、暫くの間、リオと一緒にラウ先生の所に居たでしょう？　その時、ラウ博士とお母さん……、ラウ夫人が話してるの、たまたま立ち聞きしちゃったんだよ。だから、ボクが今話したこと、リオが自分から言い出すまで聞かなかったことにしておいてね。お願いだよ。」

「そうか……。そういうことなら、まあ、仕方ないな」

アルフは、やっと納得した態で腕を組み、頷いた。

ルーがホッと一つ安堵の息を吐く。

「言っておくけど、ボク、本当は嫌なんだよ。こんなふうに、告げ口するみたいなのって。でも……」僅かに顔を顰める。「約束、したでしょう、これからは一緒に住むんだから、隠し事は禁止にしようねって。だから、ボク……」

「解ってるって」

アルフは、わざと悪戯っぽく笑うと、ルーの首に腕を回した。

「ありがとな、ルー」

照れくさそうに小さく微笑み、再び、両腕を枕にして、草原に寝転んだ。先程と変わらず、雲の流れる空を見つめる。

その隣で、ルーが幸せそうに笑いながら、自分の頭に手を置いた。その様は、真っ直ぐに空を見つめるアルフの眼には映らなかった。

ルーは両膝を抱え、暫く空を見ていたが、キラキラと輝く風が通り過ぎるさまを眼で追った後、何事かを思い切るように口を開いた。

「あのね、アルフ……」

「ん？　何か見えたのか？」

アルフが気の無い声音で答える。

ルーは苦笑いを浮かべた。

「ううん。そうじゃなくてね……。ボク……」

「どうした？」

「うん……」

言い出したくせに、その後、言葉を濁す。

訝しんだアルフが、寝転んだまま視線だけをルーに向けた。

「何だよ、どうかしたのか？」

ルーはモゾモゾと軀を解し、再度、膝を抱えた。

「全然、関係ない話なんだけどさ……」

「構わないさ。言ってみるよ」

アルフに促され、ルーがコクリと頷く。

「ボク、何となくね、ずっと思ってたことが、あるんだ」少し哀し気に俯く。「ボクには、想い出が無い。……なぜなんだろうって」

「ルー……」

何か言いかけたアルフを制し、ルーは自嘲気味に微笑むと、抱えた膝を引き寄せた。

「解ってるんだよ、ボクも。こんなこと、いくら考えても、どうしようもないって。今のボクには何の関係もないことなんだって」伏せた瞳が切ない。「でもね、君にもリオにも、子供時代の記憶があるのに、ボクには……、何も無いんだ。それが、時々、凄く淋しくなるんだ」

「……嫌、か？」

流れる雲に視線を移し、アルフが問う。そうしなければ、辛過ぎた。

「ううん。そういうことじゃないんだ」ルーがニッコリ笑い、アルフを見る。「だって、ボクには、君達が居るから」

「そうか……」

「ごめん。ただの愚痴だよ。忘れていいよ」

「バカ野郎。忘れられるかよ」

アルフは勢いよく軀を起こし、その勢いのまま、ルーの頭を腕に抱えた。

「アル……？」

驚いて逃れようとするルー。

だが、それを押さえ込み、柔らかな髪をクシャクシャに撫でながら、アルフは言った。

第3章 白の訪問者 No.17

「俺だって、大して変わらないぜ。思い出すことが、お前よりも少し多いっただけさ。それに、思い出さなくていいことって、結構多いもんだ。忘れちまった方がましなことだって、たくさんあるしな」
ルーの頭に置いた指先が止まる。「俺、ずっと居場所が欲しかった。俺のために用意された、俺だけの居場所。……そして、やっと見付けた。それが此処だ。そう、思ってる」

アルフは視線だけを動かしてルーを見た。

彼は、アルフの腕の隙間から、じっとアルフを覗き見ている。

そんなルーの様子に気付かぬ素振りで、アルフは言葉を継いだ。

「俺はさ、お前やリオと出逢って、毎日が凄く幸せなんだ。だから俺は、俺の居場所を失いたくない。俺の居場所を護りたいんだよ」

「うん……」

頷くルー。

その髪を、温かな指が梳く。

「大丈夫だ、ルー。お前の記憶はリオが……、あいつが、必ず取り戻してくれる。だから、お前は、リオを信じて待っていてればいい。俺達の側で、そうやって笑っててくれればいいよ」

空が微かに紅味を帯び、夕闇の到来が間近であることを告げている。

アルフの腕の拘束から逃れたルーは、両膝を抱えたまま風に吹かれていた。アルフの言葉を噛み締めているのだろうか、彼の表情は、珍しく神妙だ。

妙に無口なルーは、ルーらしくない。アルフは胡座をかき、眼の端でルーの様子を窺っていたが、フツと口許を緩めると、呟くように再び口を開いた。

「俺は……、そうだな……、お前ふうに言うなら、リオのこと好きだ。大好きだ。でも、その気持ちと同じ位、お前のことだって大好

きなんだぜ」

ルーの表情が、驚きに変わる。

それに気付かぬ振りで、言葉を継ぐ。

「俺はさ、ルー、お前と同じように、風のを聴きたいと思ってる」
ルーと正対するように軀の向きを変え、スツと眼を閉じる。

風が流れる。

「アル……？」

沈黙を恐れるように、ルーが呼び掛けた。

ゆっくりと眼を開くアルフ。

彼の漆黒の瞳は、ルーを捉えるなり、ニツコリと微笑んだ。

その笑みに、ルーは不思議なほどの安堵感を覚えた。

「やっぱり、俺には、まだ無理みたいだ。」アルフは言った。「けどな、お前の耳に聴こえるのと同じ風の声が、俺にも聴こえるようになるのならば、お前の心も解るようになるのかな……って、思う。だから、俺は、風のを聴きたいんだ」

ルーの瞳が微かに揺れた。

それに気付き、アルフは、わざと憎まれ口を叩く。

「……って言っても、風の声なんか聴こえなくなったら、お前って奴は、とっても解り易いんだけどな」

何時もなら、負けじと憎まれ口を返してくるルーが、今日は無言だ。

アルフは右腕を伸ばし、柔らかな褐色の髪に、そつと触れた。

「お前も、俺にとつてはリオと同じ、大切な友達、……家族なんだよ」

ルーは、何も応え無かった。ただ無言でアルフを見つめていた。
アルフは、ルーの髪を撫で、空を見上げると、独り言のように、呟くように言った。それは、ルーに語り掛けるようでもあり、また、自分自身の心に語り掛けるようでもあった。

「不安になるなら、何時でも、何度でも言ってやる。お前は俺の大切な家族だ。お前に何かあったら、俺が必ず助けに行っってやる。だ

からさ、安心しろよ。な？」

「アル……」

ルーは、言葉を探すように唇を僅かに動かした。しかし、アルフの指先の温もりが、再度、髪に触れた瞬間、もう、それ以上、想いを押し殺し続けることが出来なかった。言葉にならない想いをぶつけるように、アルフの首に両腕を絡め、しがみつく。しがみ付いたまま、そつと瞳を閉じた。

「大好きだよ、アルフ……」

ルーは、アルフの耳許で、それだけを囁いた。

アルフは、片腕で軀を支え、もう片方の手でルーの髪を撫でながら、小さく微笑んだ。

「バーカ。今更、何言ってるんだよ。知ってるよ、それ位。お前は解りやすいんだからさ」

第4章 人間界にて No.1

||||| 第四章 人間界にて |||||

北半球、三八・五度N、七七度W。某所……。

空には所々、黒く滲んだ灰色の雲が重く垂れ籠め、街には冷たい風がゆるく舞っていた。

冬、陽が落ちるのは早い。もう夕暮れと呼ぶに相応しかった。

細い小枝に、やっとしがみ付いている枯葉達が、薄暗がりの中、冷酷な風に弄ばれるように、竄れた身をパタパタと翻している。

何時、雪が降り出してもおかしくない雲行き。けれど、空は、まるで何かを待ち、息を潜めてでもいるかのように、奇妙なほど静かであった。

そんな自然界とは対照的に、人間達の住処である街は、綺麗に飾り付けられた樅の木と、それらを更に美しく演出しようとする何色もの点滅する光によって照らし出され、眩いほどの光に満ちていた。そして、高らかに鳴り響く音楽は、何度も何度も繰り返し流れ、輝く光に、色ではない彩りを添えていた。

誇張しすぎるほど派手に飾り付けられたショウウィンドウを眺めながら、何時もより、ゆつくりと歩いていく人々の多くは、何度も繰り返し返され、耳に付いた親しみのあるメロディを、我知らず口ずさんでいる。どの顔にも明るい微笑みが満ち溢れ、楽し気な笑い声が街中に満ちていた。そして、道行く人々は、陽が暮れるに従って数を増し、主立った様相は、親子連れからカップルへと、徐々に移り変わっていく。

今日は12月24日。クリスマス・イヴ。

闇が深くなり、光の点滅が鮮明に浮び上がるにつれ、街角には、楽し気な笑い声に混じり、静かな祈りの声や賛美歌が流れ始めた。

しかし……。

街中から少し離れた場所、森に囲まれた大きな公園に隣接して、数棟の真っ白な建物がひっそりと建っていた。建物の壁には、真っ赤な十字の印が誇らし気に掲げられている。通りを一本隔てているだけだというのに、街の明るい賑わいが嘘のように、淋しいほど静かであった。

その建物のエントランスに、場違いなほど、派手な赤のBMWが一台、ハザードランプを点滅させて停車していた。運転席に腰掛けた褐色の髪青年は、建物のドアを気にしつつ、前屈みにハンドルに凭れ掛かりながら、携帯電話で誰かと話をしていたが、建物の自動ドアが開き、濃紺のスーツ姿の女性が現れたことを確認するなり、一言詫びを言って携帯電話を切った。

女性は自分でBMWのドアを開け、無言のまま助手席に滑り込んだ。シートに背をあづけると、正面を見つめたままフツと一つ溜息を吐く。

青年は、ハンドルに凭れたまま、少し悪戯っぽく笑い、女性に話し掛けた。

「随分お早いお戻りですね、ボス。もう少し、時間が掛かるかと思っただけなんですけど」

「仕方がないわ。会議の時間に遅れるわけにはいかないもの」

女性は感情を押し殺したまま言った。肩に掛かるブロンドの巻き毛を片手で払い除ける。

女性の名はモニカ。モニカ・ウィットマン。車の持ち主であり、ハンドルを握っている青年はジェームズ・モス。

クリスマス・イブの夕方、車に同乗している姿は、一見、歳の離れた恋人同士にも見える。しかし、二人の間には、そんな甘い関係は一切なかった。同じ会社に勤める上司と部下。ビジネス上の良いパートナーといったところだ。

本来、プライベートを仕事に持ち込むことは、やり手のキャリアウーマンとして自他共に認めるモニカの主義に反する。しかし、モ

ニカは、自分の長所ばかりでなく、欠点も良く弁えていた。車の運転は得意ではない。特に、一度渋滞に捉まると、抜け出るまでが大変なのだ。そういうわけで、部下のジェフに運転手代わりを頼むことが度々あった。

言つなれば、姉と弟。そんな関係が一番近いといえるかもしれない。

今日は、この病院までの送り迎え。此处には、モニカの息子が入院している。今年で十歳になるはずだ。そうしても、直接プレゼントを届けたいという彼女の願いで、ジェフが車を出すことになったのだ。クリスマス・イブに車の渋滞は必至だが、この後に重要な会議の予定がある。それに遅れるわけにはいかないのだ。

ジェフは、これまでも何度か、この病院に彼女を送ったことがあったが、帰りの彼女は大抵機嫌が良い。なかなか会えない、しかも病弱な息子に会うのだ。当然の親心である。

しかし、今日の彼女の声音は、何時もと少し違っていた。

ジェフは違和感を感じ、訊いた。

「……息子さんには？ 会ってこなかったんですか？」

突然、モニカがダッシュボードを強く叩いた。

「会議に遅れるわ！ 早く車を出して！」

ジェフは肩を竦めると、徐ろにエンジンを掛け、車を発進させた。クリスマスの賑わいで、予想どおり、道路は渋滞しており、歩くよりは少し早いぐらいのスピードでしか移動出来ない。その間、モニカは、窓の外をじつと見つめながら、指先で小刻みにドアを打ち続けていた。

モニカの部下として、付き合いの長いジェフは、彼女のその行動が、心配事のあるサインだということを知っていた。彼女の気持ちを逆撫でしないよう、慎重に言葉を選び、声を掛ける。

「クリスマスだったのに、我々には休みもなし。神様も随分不公平なことをなさるもんですよね」

第4章 人間界にて No.2

モニカの表情が少し和らぐ。

「そういえば、ジェフ。貴方、今日はデートの約束があっただんではない？」

「ボスを待っている間に、電話しましたよ。あたしと仕事と、どっちが大事なの！ って、もの凄い見幕で怒鳴られました」

片手でハンドルを操作しながら、肩を竦るジェフ。

モニカがクスリと笑う。

「後で、私からも誤りの電話を入れておいてあげるわ」

「そうしてくれると助かります。あいつも、ボスみたいに仕事に理解があると良いんですね」

「……理解なんかないわよ。」モニカの肩が小さく震える。「この世に、私くらい酷い女はいないわ。妻としても、……母親としてもね」

只ならぬ様子。ジェフが声を落とす。

「……ボス？」

「ジェフ、頼みがあるの」

「ボスのご命令とあれば、何でも」

「今日の会議が終わったら、直ぐに彼女のところへ行きたいだろうけど……、その前に、私をもう一度病院に連れていってくれないかしら」

無意識に、青年の眉間に皺が寄る。

「……何があっただんです？」

モニカは表情を変えまいと努力しているようだった。しかし、膝の上に置かれた指先が、白くなるほどにハンカチを握り締めていることにジェフが気付かぬはずはなかった。

モニカは、固い口調で言った。

「……息子の容態が、あまり良くないらしいの。昨日も発作を起こ

して……。今は落ち着いてるらしいけど、今度、発作が起きたら、もしかしたら……。危ないって……。唇を噛み締め、窓側の腕で髪を掻き上げる。「ホント、神様って不公平よね。あの子が、いったい何をしたっていうのよ。生まれてからずっと病院暮らし。子供らしいことなんて何もさせてもらえなかった。病気を治して、他の子達みたいに走るんだって、それだけを楽しみにしてたのに。何のために生まれてきたの？ ……あんまりよね」

瞬間、車は路肩に寄り、急停車した。

「……戻りましょう」短いジェフの言葉。

だが、モニカは強く首を横に振った。

「ダメよ！ 今日の会議はとても重要で、私が抜けるわけにはいかないわ」

「しかし！」

「いいから、早く行って！」

仕方なく、再び車の波に滑り込む。

モニカは肩を落とし、呟くように言った。

「……ごめんなさいね。何時も愚痴ばかり聞かせて。……心配してくれて」

平素は自信に満ち溢れ、テキパキと部下に指示を出す、やり手の女傑と定評のあるモニカ。それが、今は……。こんな彼女を、ジェフは初めてみた。表情には出さぬように、しかし、内心、必死に慰めの言葉を探す。

「僕が心配して、息子さんの……。アロウくんの病気が少しでも良くなるのなら、いくらでも心配しますよ」

「……ありがとう。優しいのね。貴方の彼女は幸せ者だわ」

「どうでしょう。もう、振られるかもしれません」

フフッと、モニカが小さく笑う。

「大丈夫よ。私からも、ちゃんと電話しておくから」

「……ご主人は？」

女性の肩がピクリと震える。

それを眼の端に捉えたジェフは、慌てて取り消そうとした。出すぎた質問だ。素直に反省した。

「すみません。僕、余計なこと……」

「……いいのよ」

モニカが首を横に振る。頬に懸かる巻き毛が痛々しかった。

「あの人は、私以上に仕事人間ですもの。たとえ何があつたって、仕事を優先するに違いないわ」

「首相付きの主席報道官をされてるんですよね。……僕、憧れの仕事だったんですけどね」

モニカの口許に、皮肉な笑みが浮かんだ。

「やめておきなさい。彼女を大切に思うのなら、間違っても選ぶ仕事じゃないわよ」

「そうしときますよ。……まあ、僕なんかが望んで就ける仕事じゃありませんけどね」

モニカは僅かに笑みを浮かべたが、それは、そのまま、大きな溜息となった。

「あの人も、あの子の容態を聴いていたらしいの。……あの人が、今日もう一度、病院に来てくれたら、……私達、やり直すことも出来るかもしれないけど……」髪を掻き上げる。「多分、望み薄だね」

第4章 人間界にて No.3

街の混雑を抜けたBMWが、高速道路へと滑らかに滑り込んだ、丁度その頃、病院では、真っ白な長い廊下を、年輩の看護婦が一人、足早に歩いていた。

両腕には、緑色の包装紙に真っ赤なりボンが掛けられた大きな箱を抱えていた。包装紙のデザインから、大手百貨店で購入されたものであることが容易に解ったが、中身については推し量りかねた。ただ、両手で抱えるほどの大きさにも拘わらず、それほど重さを感じないことから、ぬいぐるみかしら、と想像していた。

彼女の脇を、何人もの子供達が、次々と笑いながら通り過ぎていく。

ニッコリと笑い掛ける子、手を振る子、背後からしがみ付いてくる子と、その表現は様々であるが、子供達の誰もが、彼女に深い信頼と好意を寄せていることは明らかだ。

そこは小児科病棟。

小さな躰で、病氣と闘いながら暮らす子供達にとって、彼女は第二の母親でもあり、姉でもあった。

子供達の一団が去った後、前方を見ると、両脇を両親に護られるように、両手を繋ぎ、満面に笑みを浮かべた少女が、こちらに向かって歩いてきた。少女は長い髪を二つに編み、先端を赤いリボンで結んでいた。そのリボンと、胸許に大きな雪だるまのマスコットが揺れるセータの明るいコントラストが、嬉しさに弾む少女の心情をそのままに現しているようで、看護婦は微笑みが漏れるのを抑えられなかった。

両親は、正面から近付いてくる顔馴染みの看護婦に気付き、ニッコリと微笑んだ。握手を求めようと差し出された手は、しかし、彼女の両手が荷物で塞がっていることに気付くと、然り気なく下ろされた。

「こんにちは、婦長さん。本当に、何時も娘がお世話なつて……」
「こんにちは、モーガンさん」

看護婦が笑みを返す。彼女は、少し膝を折り、両親の手をしつかりと握っている少女の目線まで屈み込むと、優しく言った。

「外泊許可が下りて、良かったわね、メアリー。クリスマス、お家に帰れるように、嫌な注射も我慢したんですものね。パパとママに思いっきり甘えてらっしゃいね」

「うん。ありがとう、婦長さん」

行儀良く答える娘に優しい視線を送り、父親は、掌の中にすっぽりと収まる小さな手を握る指先に力を込めた。

「娘が、こんなに元気になれたのも、貴女や、この病院の先生方の御陰です。本当に感謝しています」

看護婦は真つ直ぐに背筋を伸ばし、小首を傾げた。

「いいえ。私達は何もしていませんわ。メアリーが頑張ったからですよ。ねえ、メアリー、偉かったのよね？」

再び少女へと向けられた看護婦の視線。

少女は、少しはにかむように笑った。

少女の笑みにつられるように微笑み、看護婦は、再び、彼女の両親に視線を戻した。

「モーガンさん。病気をやつつける一番の特効薬は何か、ご存知ですか？ 薬じゃないですよ」

突然の問い掛け。

少女の両親は戸惑うように顔を見合わせた。

「さあ……」

「何でしょうか？」

看護婦は小さく笑い、真面目な顔で言った。

「それはね、笑うことです。心から笑うことで、難しい病気を克服した患者さんは、たくさん居られます。ですから、モーガンさん、メアリーにも、たくさんの特効薬をあげて下さいね。退院は間に合いませんでしたが、家族水入らずでの楽しいクリスマスを過ごされ

るよう、お祈りしていますわ」

少女と、その両親を見送った後、看護婦は真っ直ぐに、病棟一番奥の病室へと歩を進めた。

ドアをノックすると、微かな声で返事が返ってきた。看護婦は、ドアの前でにこやかな笑みを創り、勢いよくドアを開けた。

「メリー・クリスマス、アロウ！」

そして、窓辺に置かれているベッドにツカツカと近付き、サイドテーブルの上に、持ってきた大きな包みを置こうとした。しかし、そこは先客に占領されていた。それは、一時間ほど前、別の看護婦が、この部屋に届けたはずの包みだ。開けられた痕跡は見当たらない。それを見て、看護婦は少し哀しくなった。けれど、そんな感情は胸の奥に仕舞い込み、明るく声を掛けた。

「今度は、お母様からのプレゼントよ。すごいわね。お父様とお母様、お二人から別々にプレゼントを戴けるなんて、アロウが羨ましいわ」

部屋の主である少年は、じっと窓の外を見ていたが、看護婦の声にゆっくりと振り返ると、彼女が高々と掲げたプレゼントに一瞬だけ視線を注いだ。しかし、それは、直ぐに窓の外へと戻っていく。

透き通るほど白い肌の、ほっそりとした少年。サラサラとした明るい栗色の髪と、深いブルーグレイの瞳。だが、その瞳には、同年代の少年達に見られる快活さは微塵もなかった。

「……いない」

アロウの返事。

第4章 人間界にて No.4

看護婦は、サイドテーブルの上に場所を作って静かに包みを置き、努めて明るい口調で言った。

「ねえ、アロウ。今日は顔色も良いようだし、クリスマス・パーティーに来てみない？ 外出許可が下りなかったお友達は、みんな集まっているわ。飾り付けも、お料理も、私達みんなで頑張ったのよ。貴方にも見て欲しいわ。ね？ いらっしやいよ。きっと楽しいわよ」しかし、そんな誘いにも、アロウが視線を動かすことは無かった。看護婦は、少し困った態で眉根を寄せたが、それでも明るい声音は保ち続けた。

「どうしたの、アロウ。今日は随分、ご機嫌斜めなのね。ねえ、お父様とお母様からのプレゼント、開けてみたら？ きっと素敵よ。元氣が出るはずだわ」

アロウがゆっくりと振り返った。彼の瞳は、何かを訴えるように、哀し気に揺れていた。

「……パパも、ママも、どうして面会に来てくれないの？ 二人とも、病院まで来て、看護婦さんにプレゼント預けていくのに、どうして僕には会いに来てくれないの？」

力の無い言葉は、看護婦の胸に鋭く突き刺さった。しかし、それでも、看護婦の顔から笑みが消えることは無かった。彼女は何気ない素振りを装う。

「我が儘を言ってはダメよ。貴方のお父様もお母様も、とても責任のある、大切なお仕事をしているの。お忙しいのよ。お二人とも、貴方には、とても会いたがっていらしたけれど、今日はたまたま、ゆっくりしていく時間がなかっただけなのよ。だから……」
「たまたまなんかじゃないよ！ もう、ずっと会いに来てくれないじゃないか！」

アロウの言うとおりだった。彼の両親は、もう一月余り、面会に

来ていないのだ。それを知っている彼女は、アロウに返す言葉が見付からない。笑みを絶やすこと無く、ただ、同じ言葉を繰り返す。

「我が儘を言っではいけないわ。お二人とも、とても忙しいの」

アロウは、暫し、じっと看護婦を見つめていたが、やがて、手許に視線を落とし、小声で訊いた。

「……リコン、するから？」

「アロウ？」

突然の問い掛け。看護婦は一瞬、言葉を失った。

アロウは、ボンヤリと言葉を継いだ。

「僕の心臓、もう、治らないから、パパとママ、リコンするの？」

病気の僕なんて、……他の子と違う僕なんていないから、……だから、もう会いに来てくれないの？」

「アロウ！」

看護婦は、咄嗟にアロウを抱き締めた。彼女の手は、少し震えていた。

アロウは、ほんの少し罪悪感を覚えた。

「……ごめんなさい……」

「誰が、そんなつまらないことを言ったの？ 誰が貴方に、そんなことを言ったの？」

彼女の問いに、しかし、アロウは、ただ首を横に振るだけだった。看護婦は、自らを落着かせようと小さく息を吐き、ベッドの端に腰を下ろした。そして、少年の瞳を覗き込むと、彼の両手を握り締め、一言ひとことを噛んで含めるように話した。

「いいこと、アロウ？ 大人にはね、いろんな事情があるの。貴方には、まだ解らないような難しい事情が、たくさんあるのよ。でもね、貴方のお父様とお母様が、貴方を嫌いになるなんてことは、あり得ないわ。貴方は小さい頃から、ずっと独りで病氣と闘ってきた。こんなに頑張っている貴方を嫌いになるなんて、そんなこと、絶対に有るはずがないわよ」

「……でも、もうじき、リコンするんでしょう？」

「そんなこと、決してありませんよ」

「でも……」

「嘘だと思っの？」

アロウは躊躇った。

看護婦が言葉を継ぐ。

「私が、貴方に嘘を吐いたことがあつたかしら？」

ゆっくりと首を横に振るアロウ。

看護婦はニツコリと微笑えんだ。

「お父様もお母様も、貴方のことを本当に心配なさっていたわ。とても会いたがっていたの。でもね、どうしても、直ぐに戻らなければならぬお仕事が出来てしまったんですって。お父様もお母様も、貴方のため、そして、この国のために頑張っていたらっしやる。それは、とても立派なことなのよ。貴方は、そんなご両親のことを誇りになさい。決して、恨んだり、哀しんだりしてはいけないわ。……解るわね？」

アロウが小さく頷く。

それを確認し、看護婦は続けた。

「それに、もしも……、本当に『もしも』だけど、ご両親が貴方に会いたくないのなら、このプレゼントを、わざわざ病院まで持っていらっしやる必要なんて無いはずよね。お店から送った方がいいんですもの。でも、お父様とお母様は、そうされなかった。病院までいらして、看護婦に貴方の病状を尋ねていかれたわ。貴方を愛している証拠でしょう？ だからきつと、お仕事が済んだら、今度こそ、ゆっくり会いにきて下さるわ。それを楽しみにして待ちましよう。ね？」

アロウが、じつと看護婦を見つめる。

第4章 人間界にて No.5

その瞳に先程まで宿っていた哀しみは、僅かながら薄れたようにみえた。看護婦はホツと安堵の息を吐き、アロウの手を握り締めると、指を組ませて彼の胸に押し当てた。

「信じなさい、アロウ。神様は、貴方のことをちゃんと見ていて下さる。小さな頃から貴方が凄く頑張っていることは、貴方の愛する人達に、きつと伝わるはずよ。うん、伝わらないはずが無いわ。神様が、きつと伝えて下さるもの。だから、信じなさい」

アロウは、胸の前で組んだ掌を、じつと見下ろした。

看護婦が、彼の両肩に両手を添える。

「さあ、アロウ。笑ってちょうだい。今日はクリスマス・イブよ。私も、みんなも、貴方の笑顔が大好きよ。ね？」

アロウの顔に、微かに笑みが戻る。

「うん。やっぱり、貴方は笑顔の方がずっと素敵だわ」

看護婦はニツコリと微笑むと、立ち上がり、アロウの腕を優しく引いた。

「さあ、パーティに行きましょう。みんな、貴方が来るのを待っているわよ」

「うん……」

そう答えたものの、アロウはベッドから降りようとはしなかった。看護婦は、彼の心を思い遣るように小さく微笑むと、栗色の髪を優しく撫でた。

「じゃあ、気分が良くなったら、いらっしやい。ね？」

アロウは頷き、笑みを返した。

ベッドに凭れ、じつと窓の外を見つめていたアロウの眼の端を、空から舞い落ちる白いものが掠めた。

「雪……」

眩き、窓辺に身を乗り出す。

その瞬間、彼の胸の奥で、何かが鋭く弾けた。

絶え切れない激痛が彼を襲う。発作だ。何時もより激しい……。

胸を押さえ、その苦しさに身悶える。息が出来ない。無理に空気を吸い込もうとすると、更に激しい痛みが走る。脂汗の滲む手を伸ばし、枕許のナースコールボタンを押すのが精一杯だった。

力一杯ボタンを押す……。

瞬間、彼の意識は途切れた。

その後、医者と数人の看護婦が彼の部屋に駆け込んできたことを、アロウが知る術は無かった。

第4章 人間界にて No.6

カタカタ、カタ、カタ……。

漂う意識の中で、アロウは、その音を聞いた。

何の音だろう。

窓を叩く、風の音……？

重い瞼を、ゆっくりと上げる。

首を傾けると、窓が見えた。カーテンは開いたまま。既に夜になっていた。

灯の無い部屋の中は真っ暗だったけれど、なぜか、彼には、窓の外にいる少年の姿が、はっきりと見て取れた。年の頃はアロウと同じくらい。柔らかな金色の髪が肩に掛かる。深く澄んだ碧色の瞳の少年であった。優しく微笑んでいる。

アロウがベッドから軀を起こす。不思議と寒さは感じず、また、軀が嘘のように軽かった。

頭の中に、窓の外にいる少年の声がハッキリと聞こえた。

『内に入っても、いいかい？』

この病室が三階にあることを忘れていたわけでは無いけれど、アロウは、その少年に対して、恐ろしさなど微塵も感じなかった。それどころか、不思議なほどに優しい気持ちに心が満ちる。

そんな自分に途惑いながらも、アロウが小さく頷く。

金髪の少年はニッコリと笑いながら柔らかな光りに包まれてフツと消えたかと思うと、次の瞬間、その光りを纏ったまま病室の中に現れた。そして、優しい笑みを湛えたまま、黙ってアロウを見つめていた。

「……君は、誰？」

暫くの沈黙の後、囁くようにアロウが問う。

少年は、その言葉を待っていたかのように、もう一度ニッコリと微笑み、フワリと宙を飛んでアロウのベッドの側に立った。

「初めまして、アロウ」柔らかに、澄んだ声。「僕の名は、リオ。今日は、君に贈り物をあげるために、ここへ来たんだよ」

「贈り物？」

訝しむように小首を傾げ、アロウが呟く。

リオは、穏やかな瞳でアロウを見つめ、軽く頷いた。

「そう。君の願い事を言ってごらん。三つだけ叶えてあげる。それが、僕から君への贈り物だよ」

リオは密かに、ポケットの中にある三つの珠に、そっと触れた。

三つの珠は『願い珠』……。

あの日、魔法遣い養成学校の校長室で、校長先生から与えられたものだ。

願い珠に触れたリオの指先は、この珠を握らせた時の先生の掌の温もりを微かに思い出していた。

リオの脳裏に、あの日先生の言葉が甦る。

『少年の三つの願いは、全て叶えてあげなければなりません。そうでなければ、彼の魂は安らかに天上界に昇ることが出来ないのです。リオ、私は君が、この役目を果たすに十分な能力を持っていると確信しています。しかし、もしも、少年の願いが君の手に余るようなら、この珠をお使いなさい。これは天上界の力を収めた珠です。これを使えば、君は、上級天使と同等、……いや、それ以上の力をもつて少年の願いを叶えることが出来るでしょう。さあ、お行きなさい。そして、少年の魂を救ってあげて下さい。これが、私の願いです。』

リオは、胸の奥で、先生の言葉を何度が反芻した。あの時感じた疑問が再び蘇る。

校長先生は、こんな珠を託してまで、なぜ自分を人間界へ来させたのか。これが、始めに言っていたように、能力を試すものだと思えば、能力の限界まで発揮させようとするべきではないか？ そうでないのなら、ルリアの魔法遣い見習でしかない自分が、人間界へ来る理由とは、いったい……？ この裏には、どんな思惑が隠され

ているのだろうか？

微かに首を横に振るリオ。今、何を考えても、きつと答えには辿り着かない。この少年の魂を救い、ルリアに戻れば、校長先生は、きつと全てを話して下さる。そう、思った。

リオの心の奥にある、そんな蟠りなど知る由も無いアロウは、暫し、不思議そうにリオを凝視していたが、やがて、視線はそのまま、小声で尋ねた。

「君は誰？ 何処から来たの？」

リオが、ゆっくりと答える。

「僕は、僕だよ。君の眼の前にいる僕。そして、僕が来たのはね、……別の世界」

「別の、……世界？」

アロウは一瞬、驚きに瞳を見開いたが、次いで、小さく微笑む。少し哀しげな笑顔は、彼を実年齢よりも遥かに大人びてみせた。アロウが静かに言う。

「君が誰か、解ったよ。君は、天使だね。そして、僕を連れにきた。僕は、……死んでしまった。……そうだね？」

リオは、アロウの態度と口調に、僅かに戸惑いを覚えた。そして、直感した。彼に子供騙しは通用しないんだ、と……。

リオが首を横に振る。

「残念だけど、僕は天使じゃない。魔法遣いだよ。正確には、まだ見習だけだね。天使が君を迎えにくる前に、君の願いを叶えるために来たんだ」

アロウは小さく笑った。

「人は死ぬ前に願い事を叶えてもらえるって、御伽噺の中だけの創り事だと思ってた。でも、本当だったんだね。だったら、ちゃんと考えておくんだったな。急には思い付かないや」

言いつつ、まじまじとリオに見入る。

「ねえ、リオ。君は本当に天使じゃないの？ 本で見た天使と、こんなにそっくりなのに……」

リオが、につこりと微笑む。

「僕は魔法遣いだよ。君が本で見たという天使は、少なくとも、背中に大きな純白の翼を持っていなかったかい？」

アロウは、的を射たりとばかりにポンと一つ手を叩くと、小さく声を立てて笑った。

「そうだね。そうだった。天使には翼があるんだったよね」

アロウの笑みにつられ、リオも笑った。しかし、次の瞬間、辛くなる。死を前にして、人間はこんなにも無邪気に振舞えるものなのだろうか。けれど、そんな心の動揺を隠し、微笑を絶やすことなく言った。

「さあ、アロウ。君の願い事を言ってごらん。君が望むことなら、僕は何だって叶えてあげるよ」

「そんなこと、……急に言われても、思い付かないけど……」

少し考え込むように瞳を伏せる。次いで、ゆっくりと視線を上げたアロウは、ぽつりと言った。

「僕、……僕ね、外へ、出たいな……」

「外へ……？」

どんな願いを言ってくるのかと緊張していたリオは、内心、拍子抜けした。だが、次の瞬間、アロウの心中を推し量り、ほんの少し哀しくなった。

（そうか……。アロウはずっと、この病院から出たことがないんだ……。）

「ダメ、……かな？」

リオの暫しの沈黙に戸惑い、アロウが小声で訊く。

リオは慌てて首を横に振ると、ニツコリと微笑んだ。そして、優しくアロウの両手を取る。

「じゃあ、行こうか」

言い終わらぬうちに、二人の躰は淡い光りに包まれ、闇に溶けるようにスッと消えた。

第4章 人間界にて No.7

「凄い、……凄いや！ 外の世界って、こんなに大きくて、こんなに綺麗だったんだね！」

雪の舞い踊る公園の中、アロウは両腕を広げて走った。生まれて初めて、走った。なのに、何時も彼を苦しめていた胸の痛みも、息苦しささえも、なぜか今は、まったく感じない。ずっと、窓から眺めているだけだった『普通の少年』と同じように、思いっきり走ることが出来る。そのことが、…… たったそれだけのことが、アロウには堪らなく嬉しかった。

公園には、アロウとリオ以外に人影はない。街頭の灯に照らされた雪片が、僅かな風に飛び、星屑のようにキラキラと輝きながら、アロウを包み、舞い踊った。

「見てよ、リオ！ 僕、走れる。走ってるんだ。全然、苦しくないんだよ！」

アロウの呼び掛けに、リオは微笑み、片手を振って応えた。アロウは飽きもせず、今度は別の方向へと走っていく。

リオは、公園の隅で淋しく揺れるブランコの支柱に寄り掛かり、初めて歳相応の少年の表情をみせたアロウの笑顔を、複雑な思いで見つめていた。

自分なら、当たり前のこと。駆け回るといって、たったそれだけのことが、なぜ、彼には許されなかったのか。なぜ、彼は、これほどまでに喜ばねばならぬのか。それが、彼の『運命』。人間一人ひとりに科せられた『天命』だと言われても、そんな言葉だけで、眼の前の現実、全てを受け入れることなど、リオには出来なかった。それは、あまりに哀し過ぎた。

そんなリオの胸中を知る由もなく、楽し気に駆け回っていたアロウだったが、ふと立ち止まると、空に向かって両腕を翳した。

「リオ、見て。雪だよ。雪が空から降ってくる。……綺麗だな。まるで、空に輝く星のようだね。こうしていると、何だか、空に吸い込まれてしまいそうだよ」

そして、雪の一片を、大切な宝物を抱くように胸の前で握り締める。

「冷たいね。でも……、変だな。なんだか温かいや」

暫くの間、アロウは、その場に佇んでいた。けれど、何事か思い立ったように急に顔を上げ、ゆつくりとリオに近付くと、彼の服の裾を握り締めて笑った。

「ねえ、リオ。願い事は三つ、叶えてもらえるんだったよね。あとの二つ、……決めたよ」

ブランコに腰を下ろし、リオを見上げる。促され、リオは彼の隣に腰掛けた。

アロウは、ほんの少し躊躇うように首を左右に傾げていたが、空を見上げ、口を開いた。

「あのね、リオ。僕のパパとママね、……リコン、するんだって。リコンって、解るかな？　きっと、君の世界には無いんだろうな」小さく笑う。とても淋しそうな笑み。「……あのね、リコンっていうのはね、パパとママが、お互いに好きじゃなくなつて、一緒に暮らさなくなることなんだ。今までの好きだった気持ちとか、楽しかった思い出とか、そんなもの、全部いらなくなつて、もう会わなくなるんだって。それにね……、僕、看護婦さん達が話してるの、聞いちゃったんだけどね、……パパもママも、他に好きな人がいるみたい……、なんだ」

一つ溜息を吐く。続く言葉は、胸の奥の蟠りを吐き出すように強い口調になった。

「パパとママがリコンするのは、きっと……、きっと、僕のせいなんだ。僕、産まれた時から、ずっと心臓が悪くてね、何度手術しても、ちつとも良くならなくて……。あの病院から出たこと、無いんだ。だから、パパもママも、僕の病気の心配や、入院のためのたく

さんのお金のこと、疲れちゃったんだよ。それでね、……それで、僕が嫌いになった。僕のことなんか要らなくなったんだ。だから、リコンするんだよ」

雪が、アロウの髪を一瞬だけ飾り、直ぐに消えた。

「だって、……そうだよ。当たり前だよ。僕なんか、心配掛けるばかりで、なんにも出来ない。パパにとってもママにとっても、邪魔なお荷物でしかないんだ。……要らないっていわれたって、しようがないよね」

アロウが笑う。頬に付いた雪が解け、流れ落ちた。まるで涙のようだ、と、リオは思った。

しかし、リオは、無言でアロウの言葉を聞いていた。彼の強さに応える術が、他に見付からなかった。

アロウは微笑んだまま、真っ直ぐにリオを見つめた。

「だからね、今日、君が迎えに来てくれて、ホントに良かったと思ってるんだ。これで、パパもママも、やっと幸せになれる。二人とも、今まで僕のために一生懸命がんばってくれたんだ。これから、うんと幸せになって欲しい。だからね、リオ、僕の願い事、絶対に叶えてね。僕の願いは、……僕が死んだ後、パパとママが幸せになること。パパとママ、両方の分だから、さっきのと合わせて、これで三つだよ」

リオは、今にも溢れそうになる涙を必死で堪えた。

そんなリオを氣遣うように、アロウが笑みを浮かべる。そして、確かめるように訊いた。

「リオ。僕の最期の願い、きつと、……きつと叶えてね。約束だよ」
リオは哀しかった。哀しくて仕方なかった。自分と同じ歳くらいの少年が、なぜ、こんなにもあっさりと『死』を受け入れることが出来るのか。それが無償に辛かった。

その時、無意識にポケットの中を弄っていたリオの手が、願い珠に触れた。その珠の存在を思い出した瞬間、リオは思った。この珠に封じ込められた力が真に天上界のものであるならば、一人の人間

の運命を変えることも出来るのではないか？　それが許されぬことだと解っていても、リオは、今、どうしても、眼の前で穏やかに微笑む少年の哀しい運命を受け入れられなかった。

「ううん、違うよ。君の願い事は、まだ二つだよ」

リオは、静かなアロウの瞳を、やっとの思いで見つめ返しながら言った。

「アロウ。これは、僕が与えられた使命の範囲を超えることだけだ、……見せてあげるよ、未来を。君をここへ連れ出すためには使わなかった天上界の力で、見せてあげる。君がいなくなってしまう後、君のお父さんとお母さんが、どんな未来を歩むのかを……」

リオの言葉が終わらぬ内に、突然、アロウの眼前が真っ暗になり、次いで、闇の一点が薄っすらと輝き始めた。その光の中に、始めは微かに、やがてハッキリと、人影が浮かぶ。

アロウが瞳を凝らす。

第4章 人間界にて No.8

黒い服に身に包んだ大勢の人々。その中心にいるのは、見間違えるはずの無い、愛しい父と母の姿。

アロウは咄嗟に父と母を呼ぼうとした。けれど、声が出なかった。父と母、そして、周囲の人々の服装や表情から、そこが墓地であることは、すぐに解った。そして、アロウは悟る。それが自分の葬儀の風景であることを……。

時が、景色と共に流れていく。

たくさんの花に飾られた小さな墓地の前で泣き崩れる母の姿。それを優しく労る父。二人は寄り添いながら、その場を去っていった。次の風景は、何処かの部屋の中。微笑むアロウの写真を前に、話し合う父と母。母は時々涙を流し、その度に父は、写真の中のアロウに何かを語り掛けていた。

再び、情景が飛ぶ。

大きなポストンバックを持って、とある家の前に現れた母。扉を開け、現れたのは父だ。バックは母の手から滑り落ち、彼女の指が父のシャツを掴む。母を抱き締める父……。

光の中を流れる景色は、そこで消えた。

アロウの眼の前には、さっきまで彼が走り回っていたままの、雪降る公園が現れた。

リオが、そつとアロウを見る。その瞬間、リオの胸は哀しみに締め付けられた。

真つ直ぐに真正面を凝視したままのアロウの瞳から涙が溢れ、それが頬を伝って、後から後から零れ落ち、膝の上で固く握った掌を濡らしていたのだ。今はもう、何も映さない空間に、幸せな父と母の姿を追い求めるように、暫くの間、アロウは、ただじっと、真正面だけを見つめていた。

やがて、パジャマの袖で何度も何度も涙を拭うと、小さく笑う。

その笑顔は、リオが予想したものとは微かに違っていた。

アロウは、雪を舞い散らす天空をじっと見上げた。その顔に、もう笑みは無かった。

「……ありがとう、リオ。君が僕に見せてくれた未来……、素敵だったよ。本当に、こうなったら、……パパとママが、もう一度仲良くなってくれたら、ホントに素敵だね。でも、……いいんだ。創り話なんて、要らないよ」

「アロウ！」

予想外の言葉。リオは思わず身を乗り出し、アロウを凝視した。けれど、リオが次の言葉を口にする前に、アロウは静かに言った。彼の言葉は、リオの胸に淋しく響いた。

「人の気持ちが、こんなに簡単に動くはずが無い。一度壊れてしまったものは、こんなに簡単に元に戻ったりはしないんだ。そのくらのこと、僕だつて解つてる。僕を元気付けようとしてくれた君の気持ちは本当に嬉しいけど、でもね、……いいんだ。もう……、いいんだよ」

それは、まるで、自分自身に言い聞かせているように、リオには聞こえた。

アロウは静かに立ち上がり、リオを見下ろした。

「リオ。僕は三つの願い事を言ったよ。さあ、僕を連れていって。もう、充分だよ」

アロウの表情には、何の迷いも、恐れ of 欠片さえ無かった。

そのことが、リオには無償に悔しかった。そして、心の底から願った。眼の前に佇む、悲しい少年の魂を助けたい。たとえ全ての理に反するとしても、彼を救いたい……、と。

リオは俯き、次いで、小さく言った。

「どうして……？」

「え？」

「……なぜ、君は望まないの？」

「何のこと？」

アロウが訝しむようにリオを見る。

膝の上で握られたリオの拳が、小刻みに震えた。彼は、決して言つてはいけない言葉を、しかし、言わずにはいられなかった。震える声で、叫ぶように言う。

「生きることを、君は、なぜ望まないの？ 言っただろう？ 今、僕は何でも出来る。君が望みさえすれば、どんなことだつて出来るんだ。君が生きたいと、……健康な躰で、このまま生き続けたいと、そう望んでくれさえすれば、僕は、その願いを叶えてあげられるんだよ！ なのに、君は望まない。なぜ？ どうしてなの？！ 望んでよ、お願いだから！ 生きたいと、僕にそう言つてよ！」

アロウは、一瞬眼を見開いてリオを凝視したが、やがて、小さく笑った。

「君の方こそ、変なこと言うなあ。君は僕を天国に連れていくために、此処に来たんでしよう？ その君が、僕に『生きる』だなんて、そんなこと言うの、変だよ」

「変でも何でもいい！ 望んでよ！ そうすれば、僕は叶えてあげられるんだ！ 君を生かすことが出来るんだから！」

光さえも呑み込むほどの暗黒の夜空。

その一角に、リオとアロウの遣り取りを凝視する二組の蒼い瞳があった。

その瞳の持ち主達は、リオの突然の言葉を聞くや否や、驚きと共に、怒りも露わに言葉を交し合った。

「彼の者は危険過ぎます。死に逝く者に『生』を望むよう勧めるなど、天上界の理に逆らう行為です」

「あの大馬鹿者が！ 墮落者は、所詮、墮落者でしか無いということだ」

「すぐに我々が向かうべきです」

「そうしよう。これ以上、死に逝く者の心を乱してはならない」
彼等は、大きな白い翼を羽ばたかせた。

第4章 人間界にて No.9

眉を顰め、唇を噛み締るリオの必死の形相。

アロウは、ゆっくりとブランコに腰を下ろし、優しく言った。まるで、リオを宥めようとするかのように。

「ありがとう、リオ。そんなふうに言ってくれて、僕、凄く嬉しいよ」

彼の言葉は、とても穏やかだった。

「でもね、僕は本当に、もういいんだよ。確かに僕は、まだ十年しか生きていない。たった十年って、君は言うかもしれない。でもね、あの病院で過ごした十年は、多分、健康な人の一生分以上に長い時間だった。僕はね、疲れちゃったんだ。生きることにも、夢を見ることにも、疲れちゃったんだよ。そりゃあ、僕だって、何度も夢に見たよ。注射も、お薬も、……何より、手術なんて大嫌いだったけど、でも、我慢すれば、きっと病気は治る。病気が治って元気な駄になったら退院出来る。そしたら、パパとママと三人で、病室の窓から眺めるだけだった親子のように、手を繋いで歩くんだった。肩車や、キャッチボールや……、たくさん、たくさん、ずっと遣りたかったことを遣るんだ……って、ずっと、そんな夢ばかり見てきたよ。でもね、所詮、夢は夢でしかないんだ。どんなに望んでも、叶わないことがあるんだよ。そのことに気付いた時、僕は、夢みることをやめた。僕は、もう、夢をみて、絶望することに疲れちゃったんだよ」

「アロウ！」

リオは言葉を探した。アロウに『生』を望ませる、そんな言葉を必死に探した。けれど……、何も思い浮かばない。

リオが己の不甲斐なさに唇を噛み締めた、その時……。

重く垂れ込めた灰色の雲の隙間から、一条の光が射し込み、アロウを照らした。そして、その光の道を辿り、二人の天使が舞い降りる。淡い光に身を包み、真っ白な翼を羽ばたかせ、リオ達の眼前に

フワリと降り立った。

「アロウ、迎えに来ましたよ。旅立つ時間です。さあ、私達と共に逝きましょう」

天使達は美しい笑みを湛え、手を差し出した。

咄嗟にアロウを背に庇い、リオが天使の正面に立つ。

「待って下さい！ まだ、彼の願いを叶えていない……」

一人の天使が、ゆっくりと掌を横に払う。その瞬間、リオの躰は横に跳ね飛ばされ、冷たい地面に叩き付けられた。

「リオ！」

アロウが立ち上がる。リオに駆け寄ろうと一歩足を踏み出す。けれど、天使の指がアロウの腕に触れた途端、彼の動きが止まった。

二人の天使に両手を取られたアロウの躰は、天使達と同じように淡い光に包まれ、その脚は、ゆっくりと地面を離れた。

「アロウ！」

必死に追い縋ろうとするリオを、天使が一瞥する。

リオは再び、その場に倒れ込み、身動き出来なくなった。

両脇を天使に抱えられ、アロウの躰が、ゆっくりと空へ昇っていく。

リオには、もう、どうすることも出来なかった。今の彼に出来ることは、悔しさに唇を噛み締め、アロウの姿を見つめること、……ただ、それだけだった。

リオは、己の不甲斐なさに、拳を地面に叩き付けた。

アロウが振り返る。彼の瞳が微かに潤んでいることを、リオは見逃さなかった。

「リオ……、頼んだよ。僕の願い、きつと、……きつと、叶えてね」
そして、小さく微笑えむ。

「君って、変わってるよね。でも、最期に君に会えて、本当に良かった。大好きだよ。ありがとう、リオ……」

その言葉を最期に、アロウの姿は、二人の天使と共に眩い光に包まれた。そして、その光が消えた時、そこに彼の姿は無かった。た

だ、雪がゆつくりと舞い落ちる闇が広がっているだけだった。

リオは、その場に跪き、両掌に顔を埋めて、泣いた。

涙は止め処なく溢れた。しかし、そんなことは、どうでもよかった。ただ、悔しかった。哀しかった。そして、何も出来なかった己の非力さを恨んだ。

リオは涙を拭おうともせず、アロウが消えた空を見上げた。そして、噛み締めた奥歯の隙間から、搾り出すように、消えてしまった少年に語り掛けた。その声が、もう決して届かぬことを知りながら……。

「アロウ。僕が君に観せた未来……、あれは、創り話なんかじゃない。本当の未来なんだよ。なのに、君は、それさえ信じられずに、哀しみを抱えたままで逝ってしまったの？」

遣り切れない想い。

リオは拳を握り締め、地面に強く叩き付けた。何度も何度も叩き付けた。拳の痛みがアロウの心の痛みには遥かに及ばないことを知りながら、そのことさえも悔しくて、何度も凍る大地に叩き付けた。「死に逝く者の想いなど、……哀しみなど、どうでもいいことなのか？ 天使って、……天上界って、いったい何なんだ！」

雪が次第に激しさを増す。

真っ白な雪に埋もれながら、傷付いた拳で涙を拭い、リオは天空を睨んだ。

第5章 真実 No.1

>
>
||
||
||
||
||
||
第五章
真実
||
||
||
||
||
||
<
<

act. 1

アルフは、足許にキョロキョロと視線を走らせながら、森の中を、独り、ブラブラと歩いていった。ルーと手分けをして、薪や焚き木を探しているのだ。

今日中にはリオが戻ってくる。彼が、どんな『用事』のために出掛けていったのか、それは解らなかつた。けれど、帰つてきた時、温かい食事で迎えてやりたかつた。

森には、あちらこちらに枯れた小枝が落ちており、両腕は、すぐにいっぱいになった。

「ちと……。このくらいでいいか……」

気が付けば、鏡の泉の辺まで来ていた。アルフは、集めた薪と小枝をアケビの蔭で手際よく束ね、軽々と肩に担ぎ上げた。

リオは食事までには帰ってくるだろうか。そんなことを考えながら、家に向かって歩き出したアルフの耳に、草を踏む音が微かに聞こえた。振り返る。

足音の主は……。

「リオ……」アルフは、何時もどおり、明るく声を掛けた。「お帰り。思ったより早かったな」

その声が聞こえたのか、リオは視線を上げ、そこに友の姿を認めると、笑おうとしたのだろう、口許を微かに歪めた。しかし、それは笑みの形にはならず、彼は、膝から崩れ落ちるように、その場に座り込んだ。

「リオ！」

薪を投げ出し、リオの側に走り寄ったアルフ。伸ばした手がリオ

に触れた瞬間、動きを止めた。

彼の躰は、ぐっしりと湿っており、しかも、凍るように冷たかった。真夏のルリアでは考えられぬことだ。更に、彼の右の拳は、何かに激しく打ち付けたように傷だらけで、血を流してさえた。

アルフは一瞬、戸惑った。けれど、敢えて口には出さず、リオを支えて、泉の辺の大岩まで歩き、その上に腰を下ろさせた。

アルフは、まず、腰に下げた薬袋から薬草を取り出し、手際良くリオの右拳を手当てした。次いで、リオの頬に両手を添えて、彼の額に自分の額を押し当てた。熱は無いようだ。ほんの少し安堵する。しかし、声を掛けようとリオの顔を覗き込んだ時、アルフは再び言葉を失った。リオの瞳は真っ赤だったのだ。咄嗟に、リオの瞼に触れようと、そつと指を伸ばす。その瞬間、リオは、自分の顔を、……哀しい感情まで全て隠そうとするかのように、アルフの肩口に埋めた。

「どうしたんだ、いったい……？　何か、あったのか？」

堪らず、アルフが問う。

リオは、小さく首を横に振った。

「何でも、無い。チョツと疲れただけ。お願い、少しだけ、このまままでいさせて……」

顔も上げず答える。

何時ものリオらしからぬ様子を訝しみ、アルフは理由を聞き出そうと何度か同じ質問を繰り返した。けれど、リオは、ただ首を横に振るばかりで、何も答えてはくれなかった。

今は何を訊いても無駄なようだ。

仕方なく、アルフはリオの隣に腰掛け、友の躰を支えながら、落ち着くのを待った。その間中、ずっと、リオの背中を優しく撫で続けた。

森の中とはいえ、夏真っ盛りのルリアである。

暫くすると、リオの躰は温かくなり、服も、すっかり乾いてしまった。

気付けば、リオはアルフの肩に頭を持たせ掛けたまま、泉の水面をじっと見つめていた。

「大丈夫か？」問い掛けるアルフ。

リオがコクリと頷く。

そして、アルフが再度、疑問を口にする前に、リオは自ら語り始めた。けれど、その言葉は、どう考えても、先程の問いに対する答えにはなっていないかった。

「ねえ、アルフ……」

「ん？」

「教えて」

「どうした？」

囁くような声が、不安にさせる。アルフは、リオの肩を抱く腕に力を込めた。

第5章 真実 No.2

その強さに安堵したかのように、ホウツと息を吐くリオ。

「正しいことって、何……？ 正しいって、どういうこと？」耳許で囁く。「……僕ね、解らなくなっちゃった。何が正しいことなのか。間違いつて、いったい何なのか……」

「リオ……？」アルフは訳が解らず、リオの顔を覗き込んだ。「どうした？ 何があったんだ？」

リオは微かに微笑み返したが、問いには答えず、再び視線を泉の静かな水面へ注いだ。そして、まるで泉に話し掛けているかのように、小さく呟く。

「僕ね、ずっと思っていた。他人がどう思おうと、自分が正しいと思っただけをしよう。たとえば、それは間違いだって、周りのみんなが僕を責めたとしても、それが僕にとって『正しい』と信じられることなら、僕は胸を張って、それをしていこうって。だから、そのためにも、間違っただけを判断をしないように、たくさんの人に会って、たくさん話を聞いて、そして、たくさん知識を得よう。それが僕にとっても、僕に係わる全ての人にとっても、きっと一番良いことのはずだって。だから、養成学校に入学した。そうすることが、きっと、僕の考える答えに達する一番の近道だと思ったから……」

風が吹いて、リオの柔らかな髪と、アルフの前髪を揺らしていく。アルフは、リオの髪が彼の頬に絡まないように指先で抑えた。

リオは、そんなアルフの温もりを噛み締めるように瞳を閉じ、小さく微笑んだ。アルフの肩に全体重を預ける。

リオが、そんなふうに、甘える仕草をするのは初めてで、アルフは、少し戸惑いすら覚えた。

リオが言葉を継ぐ。

「でもね……、僕、解らなくなっちゃったんだ。『正しい』って、どういうことなのか」

リオが何を言おうとしているのか、アルフには解らなかった。ただ、リオの肩に掛けた指先に、僅かに力を込めた。自分は此处にいると、お前は決して独りじゃないと、リオが気付くように。

アルフの腕の力を感じながら、リオは再度、小さく安堵の溜息を吐いた。

「僕が『正しい』と思ったことでも、それで笑ってくれる人がいたとしても、その倍、傷付く人がいるかもしれない。僕が一生懸命考えて、絶対に間違っただんないんだって信じたことでも、誰かにとっては、もしかしたら、すごく嫌なことだったりするんだ。それならって、僕が何もしないでいても、それで辛い思いをする人もいる」唇を噛み締める。「正しいことをするためなら、責められたっていいって思っていた。でも……、誰かを哀しませるのは、すごく……、嫌、なんだ」

アルフは小首を傾げ、口許に僅かに笑みを浮かべた。

「お前……、欲張りだな」

リオが不思議そうにアルフを見上げる。

アルフは、リオの頭に自分の頭をコツンとぶつけた。

リオの瞳に映ったアルフは、酷く神妙な面持ちで、リオが見つめていたのと同じ水面に視線を注いでいた。

アルフが呟く。

「お前、欲張りだよ。みんながみんな、正しいと認めてくれることを探そうとしてる。だから、そんなふうに悩んで、苦しむんだ。この世の中に、万人が正しいと思うことなんて、存在するわけ無いんだ。誰かにとって正しいことは、別の誰かにとっては正しくない。そういうもんだろ」

アルフがリオを見る。深い碧の瞳は、何かを訴えるように揺れていたが、眼が合った瞬間、逃れるように瞼を伏せた。リオが、微かに首を横に振る。

「そんなこと、無い。普遍的なことは、必ず存在するはずだよ」

それは、まるで、自分自身に言い聞かせているようだった。

さっき見た瞳の色は、リオのこんな想いを映していたのか？　これは、リオの本心か？　……いや、違う。絶対に違う。アルフは思った。リオは気付いていないだけだ、自分が本当に欲しい答えに、望んでいるのだ、その答えを。そして、今、彼にそれをやれるのは、……俺だけだ。

アルフは、無理に笑みを創った。

「それは、『真理』ってヤツだろ？　正しいことは違う」
「え？」

震える長い睫の下に、宝石のような瞳が揺れている。アルフは、それを覗き込んだ。

「正しいか、正しくないか、それは、常に人が判断することだ。人にはそれぞれ感情や意志がある。だから、人によって判断基準は異なる。人の見方によって、相手によって、正しいことと、そうでないことが異なってしまうんだ。でも、それは間違いじゃない。仕方のないことなんだ」

アルフの腕を、リオがスルリと抜け出す。

「……でも、神様の為さることは、何時だって正しいはずだよ」
しかし、じつとアルフを見つめるリオの瞳は、まるで縋るようで、言葉とは裏腹に、己の心の奥から頭をもたげようとする気持ちを必死に押し隠そうとしているのだということを伝えていた。だからアルフは、言わずにはいられなかった。わざと意地悪な言葉で、リオ自身の真実の気持ちを……。

「それは、どうかな」

「アルフ！」　リオがアルフの腕に縋る。「だって、神様が全てを創られたんだよ。それなら……」

「じゃあ、訊くが、神は本当に過ちを犯さないか？」
淡々とした問い。

リオは眼を大きく見開いた。しかし、答えることは出来なかった。

アルフが続けて訊く。

「なら、神は、なぜ、この世界での魔族の誕生を見逃した？ 苦しんでいる森の木々や動物達を、なぜ救ってはくれない？ 奴等に、いったい、どんな罪があるというんだ？」

「……やめて」アルフの袖を掴むリオの指先が、小刻みに震える。

第5章 真実 No.3

しかし、アルフは続けた。

「人の心の中に、感情なんて扱い難いモノ創つといて、今更、自分の言うことだけが正しい、俺の意見に従えなんて、そんな虫のいい話があつてたまるもんか。それこそ、過ちだ。違うか？」

「アルフ、お願い。もう、やめて……」

俯くりオの頼り無げな姿と、悲鳴に似たか細い声が哀しくて、罪悪感に苛まれる。唇を噛み締め、けれど、アルフはやめなかった。そうすることが、今、なぜか自信を失っている友を救うことの出来る最良の方法だと信じたから……。

「神の存在なんて、俺は信じじゃない。だが、本当にいるんだとしても、神の意志だつて、多くの意志の中の一つでしかない。正しいこともあれば、正しくないことだつてある。それは、神が創つた俺達を見れば明らかじゃないか？ 俺達は過ちを犯さないか？ 人間界の奴等は、奢り高ぶり、自らの力量を見誤つたがために、神の怒りに触れたんじゃないか？」

「それは……」

「違うか？」

言いかけたリオの言葉を、アルフの声音が遮る。

それは、穏やかな問い。だが、リオは即答出来ない。散々悩んだ拳句、言葉になつた思ひは短かった。

「……解らない」力なく首を横に振る。

「いいや、解っているはずだぞ、リオ。解っているくせに、お前は頼ろうとしてる。神という名の見えない絶対者に」アルフの声は優しく、そして強かった。「でも、そんなの、お前らしくないよ。頼るなよ。何かに頼ろうとなんかするなよ。会つたこともない奴等、何を考へてるかも解らない奴等を、どうやって信じるんだ？ どうやって頼れつていうんだよ？ そんな、なんだか解んないものを信

じなくなつて、俺は……、俺達は生きていける。二本の脚で立つて、二本の腕を使つて、生きていける」

再び、柔らかな金色の髪を腕の中に抱き寄せる。

「何でもいいから信じたい、頼りたい、頼らなければ生きていけない、なんて思うのは、弱虫のすることだ。俺達は、弱虫じゃない」

抵抗の欠片すらみせず、友の肩に頭を載せたりオは、キラキラ輝く水面を見つめ、呟いた。それは、アルフに答えるというよりは、むしろ独り言に近かつた。

「でも……、神様は、いるよ……。そして、この世界をお創りになられたのは、間違い無く神だ。たとえ眼に見えなくても、自分を越えた力を崇める心、創造主を敬う心を持つことは、とても尊いことだよ」

アルフが独り言で返す。

「敬うことと、頼ることとは違う」

「頼らなければ……、何かに縋らなければ生きていけない人だっているんだ。人間は弱いから、神に縋る。でも、それも一つの生き方良いとか悪いとか、評価すべきことじゃない」

自分自身に言い聞かせるかのようなリオの言葉。

何故、急に人間の話になるのか、アルフには、その理由が解らなかつた。だが、今、自分に答えられることを答えよう。そう思った。「弱い奴等のことなんか、俺達が考える必要は無い。そんなの、お節介な天上界の奴等が考えればいいことさ」ホウツと一つ、深い溜息を吐く。「お前が、なぜ、急にそんなことを言い出したのか、俺には、その理由が解らないし、お前が自分から話さないなら、無理に訊こうとも思わない。でも、自分が正しいと信じることをしようとする、お前の考えは、絶対に間違つてはいないと思う」

リオの肩が小さく震えた。

その細い肩ごと、リオの戸惑い全てを包み込んでやりたくて、アルフはリオの肩を強く抱き締めた。そのまま、暫くの間、ボンヤリと空を見上げた。

耳に風が森を吹き抜ける音が聞こえた。サラサラと葉を揺らす木々のざわめきが聞こえた。此処には、何時もと同じ時間が流れている。アルフは、そのことを全身で感じた。リオが何処へ行き、何を見、何を聞き、そして、何故こんな疑問を抱いてしまったのか、その理由は全く解らない。けれど、リオが今、自分の腕の中に戻ってきたこと、それだけは、この温もりが確かに教えてくれている。それだけでいい。今は、それだけで。素直に、そう思えた。

アルフは、少し大袈裟なほど首を左右に振り、さも困ったという態を装った。何時もの自分に戻ろう。片意地張らずに。そうすることが、今は一番良いはずだ。その思いを、そのまま言葉にする。

「やめ、やめ。俺、難しいことって、やっぱり、あんまり良く解んないや。」リオを支えているのとは反対側の手で、前髪を掻き上げた。「だから、お前の疑問に答えてやれてるかどうかも、ホントは自信なんか全然無いんだけどな、『正しいこと』なんて、難しく考えずに、『幸せ』って考えれば、答えは、案外簡単に見付かるんじゃないかな。正しいことなんてのは、判断する人によって違うし、時間が経たなきゃ解らないもんだ。」少しふざけた口調で言葉を継ぐ。「たとえば、……ほら、お前、よく言ってるだろ？ 風が気持ち良かったり、空が澄んで蒼かったりするだけで『嬉しい』って。そんなちつばけなことだって、お前が『嬉しい』って思えることは、お前にとつての『幸せ』なんだろう？ 『幸せ』って、案外、そんなものなんじゃないか？ お前は何時も物事を難しく考えすぎなんだよ。もつと単純に考えてみるよ。」

アルフは小さく息を吐き、腕の中に抱き寄せたリオの顔を覗き込んだ。碧の瞳の奥深くに潜む彼の心に届けと、それだけを祈って。「お前が誰かを幸せにしたいと思うなら、その相手が笑ってくれることをすればいい。」

「……笑って……？」

「ああ」大きく頷く。「幸せって感じる基準は、人それぞれ違うし、幸せだと感じてる時の反応も色々だけど、でも、一つだけ、解る方

法がある……と、俺は思ってるんだ」

リオが視線で問い掛ける。

紅味の戻ったその頬に、突然、アルフが手を添えた。

「笑顔だよ」言葉と共に、両の親指でリオの唇の両端を持ち上げる。

「幸せな時って、誰だって、本当に幸せそうに笑うだろ。……な？」

不恰好なリオの笑み。アルフがプツと噴き出す。

「お前は欲張りだから、お前の周りにいる全員に、そんなふうに笑っていて欲しいと思うんだろうな。でも、それはちよつと欲張り過ぎだよ。上手くいかなくて当たり前さ。でも、お前が本当に大切だと思う相手が笑ってくれることなら、きっと、すぐに見付かるはずさ」

リオは、何が何だか解らないという態で眼を見開いた。

第5章 真実 No.4

アルフは楽し気に笑い、リオの頬を両手でプニプニと揉み解した。「だって、本当に大切だと思ってる相手なら、何時だって、そのこと見てる。何時だって、そいつが喜んでくれることは何かなって考えてる。だから、そいつが喜ぶことだって、すぐに解るだろ。お前が相手を本当に、心から大切だと思うなら、きつとさ」

「どうして……？」

問われて、アルフの指が止まる。

「だって、俺は……」視線が柔らかい。

星を鏤めた夜空のような澄んだ瞳に、リオは、ふと不安を覚え、友の名を呼ぶ。

「アル……？」

「いや……。何でもない」

リオに顔を近付けて、少し照れくさそうに笑った。

「誰かを大切だと思う気持ち、俺は知ってる。そんな気持ちを持てたこと、俺、凄く幸せだと思ってる」

次いで、リオの手を掴み、自分の掌と重ねた。二回りも小さな手。ほんの少し哀しくなった。それを誤魔化すように、わざと明るい口調で言う。

「正しいことをしたいってお前が思うのは、結局、大切だと思う相手が一杯いるから。でも、お前の手は、こんなに小さいんだ。一度に全部は持ちきれないよ。少しずつ、少しずつ、笑顔を、幸せを、この手の中に増やしていけばいい。それじゃダメか？ それじゃ、お前は不満なのかな？」

突然の問いに、戸惑うように、それでも必死に、リオは首を横に振った。

アルフはニヤリと笑い、柔らかな金色の髪に見え隠れするおでこを、指先で軽く小突いた。

「自信を持てよ、リオ。少なくとも、俺は、お前が間違った判断をするとは思ってない。お前を、信じてる」

アルフの温かな指先が触れた部分に、そっと手を添え、リオが小さく微笑む。やっと……、笑えた。

「買い被り過ぎだよ、アル。でも……」か細いが、落ち着いた声。

「……ありがとう」

何かを思い出すように空を見上げ、ホウツと小さく溜息を吐く。

「そうだね。彼は最期に笑ってくれた。ほんの少し哀しそうだったけれど、それでも、確かに笑ってくれた。だから、僕のしたことは彼にとつては、決して間違いじゃなかったんだ。笑顔を一つ、貰えたんだから。それは、とても、……幸せなことだよ」確かめるように、心の奥の自分自身に問い掛けるように、そっと呟く。「誰かを大切だと思う気持ちは、過ちなんかじゃない」

視線は、空から森へと彷徨い、そして、黒髪の友を捉えた時、それは穏やかな笑みに変わった。

「そうだよね？」

アルフは、余計なことは、一切、何も訊かなかった。

「そうさ。誰かを大切だと思う気持ちは、過ちであるはずがない」

リオの頭を軽く二度叩き、それだけを答えた。

リオは、眼前の泉のキラキラと輝く水面を見つめながら、小さく頷いた。

「うん……」

しかし、その声音は、先程よりも幾分力強かった。

少なくとも、アルフには、そう聞こえた。寄り添うリオの髪を優しく撫でる。

「とにかく、家に帰ろう。ルーが待ってる。家に帰って、ゆっくり休めよ。な？」

アルフは、リオの肩を支え、ゆっくりと立ち上がらせた。

リオは、アルフに身を預け、促されるままに一步一步、歩き始めた。

初めの内、リオは、じっと考え込むように俯いていたが、その表情は、溢れ出そうになる何かを堪えているように徐々に歪み、遂には、顔をアルフの肩口に埋めた。小さな嗚咽が、吐息と共にアルフの首筋に掛かった。

アルフは、何も言わなかった。ただ黙って、リオの肩を抱く腕に力を込めた。

何がリオの心を、こんなにも深く傷付けたのか、アルフには解らなかった。知りたかったが、今は訊けなかった。

リオの歩調に合わせて歩を進めながら、アルフは思った。脆い硝子のような友の心を護りたい。護るためなら何でもしよう。

その決意は、これまでに以上に強くなった。

第5章 真実 No.5

2

「少年の願いを三つ、叶えてあげるとは出来ましたか？」

魔法遣い養成学校校長室。

最奥の机上に両肘をつき、校長先生は優しく問い掛けた。

室内の真中に置かれた椅子の上にチョココンと腰掛けたりオの姿は、数日前、この部屋から人間界へと送り出した時の、微笑みに溢れた姿とは、あまりにも対照的だった。先生は、彼の口から出る言葉を聞くのが、ほんの少し怖いとさえ思った。ふと芽生えた、人としての感情。と同時に、そんな自分に戸惑う。

校長先生の問い掛けに対し、リオは力無く首を横に振った。

「僕には、何も出来ませんでした」

答えるリオの顔を、先生は、じっと見つめた。

僅か数日間で、遥かに大人びた表情。しかし、それは、強い敗北感と自責の念により、酷く打ちのめされていた。

リオは俯いたまま呟いた。

「僕は、三つの願い珠を与えて戴きました」

「そうでしたね」

先生の顔を、リオがじつと見上げる。

「……すみません。僕は、先生のご期待には、添えませんでした」
震える声。

それには気付かぬ素振りや、先生は小首を傾げた。

「私の期待？ はて……。私は君に、何を期待したのでしょうか？」

リオは僅かに眉を顰めた。その視線の先に、先生の温かな笑みがあつた。深い蒼の瞳は、晴天の空を思わせる。

先生は、静かに言った。

「願い珠は、君に与えたものです。全ては君の思うとおり……。敢

えて言うならば、それが私の望み、私の期待ですよ」

顎の下の指を組替える。

「一つ目は……、見ていました」

「え？」

碧の瞳に浮かぶ明らかな動揺。それが困惑に、次いで、深い後悔へと変わる。

「勝手をして、すみませんでした」

か細い声で、やっと、それだけを呟く。

校長先生の真つ白な口髭の隙間から、溜息が漏れた

「私は、先程、君に何と言いましたか？」

問い掛けるような碧の瞳。

包み込むような笑みで応え、先生は言葉を継いだ。

「リオ。君は本当に良い子です。優秀でもあります。しかし、今回のことで、ただ一つ、気になることが見付かりました。相手の思惑を勝手に推測し、自分を悪者にする。……君の悪い癖ですね」

驚きに眼を見開くリオ。その耳に、言い聞かせるように穏やかな声音が響く。

「私の期待は、君が望むとおりに行動すること。その意味で、君は私の期待どおりのことをしてくれました」

「先生……」

「君のその癖は直した方がいい。……いいですね？」
的確な指摘に、リオが気まずげに前髪を掻き上げる。

「……はい」素直な返事。

満足気に校長先生が微笑む。

「さて……、では、話を元に戻しましょうか」
無言のまま頷くリオ。

第5章 真実 No.6

先生が言葉を継ぐ。

「残り二つの願い珠への願いは、未だ、叶えられていませんね」蒼の瞳が僅かに細められる。「君が何を願ったか……、それを、訊かせてくれませんか？」

「二つ目は……」

誘われるように言いかけ、瞬間、リオは躊躇った。

感情のままに語ってはいけない。自分がなぜそうしたのか、何をしたかったのか、それらをキチンと伝えなくてはいけないのだ。

話すべきことを頭の中で組み立て、呼吸を整えてから、ゆっくりと言葉を吐く。

「あの時、僕は、彼に願いを訊きました。彼の願いは『ご両親が個々の人生で幸せになること』。お父様とお母様、それぞれに一つずつ、だから二つ分だと、彼は僕に言いました」

「そうですね」

「ですが、彼のご両親は、もう一度、共に生きることを選ばれました。ですから、彼の願いは一つ。その一つを願い珠に……」

先生が頷く。

それを確認し、リオは息を吸い込んだ。

「一つ、僕の手許に、願い珠が残りました。僕は……」

言い掛け、リオは一瞬、次の言葉を口にすることを躊躇った。眉間に微かに皺を寄せる。自分が下した判断が、正しかったのか否か、迷いが無かったかと問われれば、答えは否。今、この瞬間ですら迷っている。

だが、小さく頭を横に振り、思いを断ち切るように顔を上げる。

瞳は真っ直ぐに校長先生を見つめた。

「僕は、もう一つ、彼に贈り物をしたかった。どうしても、叶えなかった。その願いを、僕は、手許に残った願い珠に込めてしまいま

した」

無言の頷きが、話の続きを促す。

リオは言葉を継いだ。

「僕が願い珠に懸けた願い、それは……」一つ大きく息を吐く。「それは、彼の魂の転生。彼が愛した、ご両親の子としての新しい命。今生の彼が、どんなに願っても得ることの出来なかった丈夫な躰と共に……」

リオの視線が不意に硬くなる。唇を噛み締めた後、縋るような瞳で口を開く。

「先生は先程、僕は先生の期待どおりのことをしたと言って下さいました」

「はい」

「けれど、それは違います。……違うんです」

胸の奥から搾り出すような、苦し気な告白が続く。

「僕は、彼の願いを叶えるために、そのためだけに、願い珠を与えて戴きました。なのに僕は、彼の願いではなく、僕の願いを、その珠に懸けました。僕は、先生の言い付けを守りませんでした」

「はい」

「これは、きっと、天上界の意志にも反する行為。それを承知の上で、したことです。罰は、覚悟しています」

窓の外で一陣の突風が唸り、木々の枝が大きく揺れる。それはまるで、今この瞬間のリオの心の中を映し出しているようで、先生は僅かに眉を顰めた。

だが、リオが、それに気付くことは無かった。

「でも、それでも僕は、彼に知って欲しかった。生を受け、命を得たことの幸せ。それこそが、言葉に出来ない、彼の心の奥底からの願いだと、そう思えてならなかったから」肩を落とし、深々と頭を垂れる。「勝手なことをして、すみませんでした、先生。もしかしたら、先生にもご迷惑が……」

不安気なリオに、先生は微笑で応えた。それは、リオの懸念を払

拭するに充分足る、穏やかな笑みだった。

「良い判断でしたね、リオ」

「先生？」

驚き、見つめるリオの視線。

第5章 真実 No.7

先生が再び優しく微笑む。

「先程、私は言いましたね。君は、私の期待どおりのことをしてくれたと。確かに、君は自分の願いを願い珠に懸けました。これは……、正直に言えば、確かに私の予想外のことでした。ですが……」
組んだ掌の上の顔を少し傾げる。「君の判断は正しかったと、私は思いますよ。君は真に、あの少年のために祈った。彼の幸福のためだけに祈った。自分の身さえ省みず。これは紛れもない事実です。そして、そのことが、私は嬉しいんです。もしも、私が君の立場だったなら、あの場で、君ほどの確な判断を下せたかどうか、自信が無いほんです」

リオには見えない角度で、口許が僅かにほころぶ。

「……そうですか。彼は生まれ変わり、新しい命を生きてくること出来るのですね……」

校長先生は、ふと何かを思い出したように、窓の外に視線を移した。そして、満足気に頷く。

「『転生』。それは、人間の魂が生まれ変わることに。神は人間に転生を約束しておられます。ですから、君の判断は、決して神の意思に反するものではありませんよ。安心なさい」

リオの表情が安堵に変わる。

けれど、その時、校長先生の心は、深い後悔の念に苛まれていた。自分は何と愚かな課題を、この心優しい少年に科してしまったことか。それが悔やまれてならなかった。リオが、その心の奥に深い哀しみを抱え、独り、じっと耐えている姿が、痛々しかった。

初めて出会った少年の淋しさに同調し、自らの命すら投げ出すことを厭わぬリオ。この子は優しすぎる。先生は思った。天使となるには、この子の心は、あまりにも優しく、透明で、繊細過ぎる、と……。

先生は、ふと、リオに古い大切な友の姿を重ねた。

心に無償の愛を抱き、人一倍正義感が強く、誰よりも神に心酔していた美しい友。

自分は今、その友と同じ苦しみの茨の道に、この少年を放り出そうとしているのではないのか？ 決して癒されることのない苦しみを、この少年に科しても良いのか？ 天上界で彼を待っているのは、幸福でも、夢の花園でもないことを、こんなにもハッキリと確信している自分が……？

校長先生は、深い溜息を一つ吐くと、心を決めた。天上界の禁を犯す決意をした。リオに全てを話そう。彼の未来は彼が選ぶべきもの。彼ならば、きっと正しい判断を下すことが出来るに違いない。そう、信じた。

校長先生は、再度、机に肘をつくとき、真っ直ぐにリオを見つめ、静かに口を開いた。蒼い瞳はとても優しく、その声は、とても穏やかだった。

「リオ、君に話しておきたいことがあります」

「何でしょうか？」

気丈にも、笑顔を創り答えるリオ。

校長先生は、年甲斐もなく無償に哀しくなった。しかし、そんな心の動きを表情には出さず、何時もと同じ口調で語った。

「君の出生に関することです」

それまで曇っていたリオの表情が一変し、瞳が輝く。彼は立ち上がり、身を乗り出して机に手を掛けた。何時も冷静な彼には珍しい直情的な行動。

「何か解ったのですか？ もしかして、僕の両親のことが、何か……？」

期待に満ちた表情。

だが、リオとは対照的に、先生の表情が曇る。組んだ両の指に視線を落とし、躊躇いがちに、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「君が生まれたのは、ルリアではありません。そして、君に、肉親

は……」一瞬口籠もる。「……いません」

「え？」リオの表情が曇る。「……どういことですか？」

先生の言葉の意味を理解しかね、眉を顰めた。

先生は、構わずに言葉を継いだ。

「君は、雲と光から生まれました。ですから、君に肉親はいないのです」窺うような視線をリオに向ける。「私の言葉の意味が、解りますね？」

リオは、視線を宙に漂わせ、次いで、力なく首を横に振った。

「……解りません」

嘘だ。リオは解っているはずだ。先生は思った。しかし、己を偽ってさえ、心を否定せねばならない彼の気持ち、先生には痛いほどに解った。だからこそ、彼を納得させ得る言葉を、否定できない明確な形で伝えなくてはならない。こんな辛い思いは、一度で充分だ。

「そう、ですか……。では、はつきり言いましょう」敢えて言葉を選ぶことをしなかった。それが、リオのためであると信じたから……。「君は、ルリア人ではありません。君が生まれたのは……、天上界。君は、天使です。天上界で生まれた、正真正銘の天使なのです」

率直な言葉。

リオは、今、耳に届いた『音』を理解しようと、繰り返し、繰り返し、言葉一つ一つを咀嚼するように呟いた。そして、何とか自分の中に収め終わると、力無く俯き、椅子に腰掛けた。酷く落胆していることは、明らかだった。

けれど、そんな状況でも、リオは必死に平静を装おうとしていた。その姿は、あまりにも健気で、先生は目頭が熱くなった。

リオは、正面から校長先生を見つめ、少し躊躇いながら、ゆつくりと口を開いた。

「……もしも、そのお話が事実なら、……いえ、先生がおっしゃるのですから、事実なのですよね。……つまり、僕には両親がいない。

それは解りました。けれど……」縋るような視線が先生を射る。「僕が天使であるのなら、なぜ、今、僕は此処に……、ルリアに居るのですか？ 天使は天上界に居るものでしょう？ 何故なんですか？」

言い置いて、ある単語が脳裏に浮かぶ。……忌まわしく、蔑まれし存在。

しかし、彼は敢えて、それをそのまま言葉にした。

「堕天使……」

瞬間、先生が弾かれたように腰を浮かす。

第5章 真実 No.8

リオは、焦点の定まらぬ視線を宙に漂わせた。

「僕は、堕天使なんだ。そうなんですね？」 声音が徐々にか細くなる。「……誰にも望まれず、誰にも祝福されず、生れ落ちた瞬間に、その生を否定された。生まれてはいけない存在だった。……そういう、こと、……ですね？」

「リオ！ それは違いますよ！」 言葉と共に、机の奥から身を乗り出す先生。「生まれしことに意味のない存在など、この世に何一つありはしない。それは、天使とて同じです」

切羽詰った先生の言葉。

だが、それは、リオの耳を素通りした。人間界で僅かな時を共に過ごし、心通わせた少年アロウの哀し気な涙が脳裏を過ぎる。

あの時、確かに自分も彼に同じ言葉を掛けた。だが、今、時を戻すことが出来るのなら、果たして自分は、同じことを彼に言えるのだろうか？

持つ者が、持たざる者に掛ける哀れみ……。

あの時、自分が彼に掛けた言葉は、所詮、奢りから生まれた薄っぺらな、軽い言葉でしかなかったのではないか？

苦悩に、リオの表情が歪む。

校長先生は、取り乱してしまつた己を恥じるように、何度か首を横に振ると、ゆっくりと椅子に腰を下ろした。白い髭の奥の唇が、言葉を紡ぐ。それは、ともすれば聞き逃してしまふほどに静かな、けれど、強い思いの込もつた言葉だった。

「君が何故、今、ルリアに居るのか、居なければならぬのか、君が疑問に思うのは当然です。しかし、リオ、その理由について、私は君に答えることが出来ません。なぜなら、私も真実を知らされてはいないからです。私の許を訪れた二人の天使は、その理由を『天
上界の手違い』と言っていました。ですが、そんな言葉を鵜呑みに

するほど、私は無知では有りませんからね。そして、彼等の様子から、私は一つの解を導き出しました。けれど、それは、……所詮、憶測でしかありません。今は言わない方が良いと思います。君がもつと大人になったら、対等な友人として話をしましょう。その時まで、君と私の二人が、揃って、このルリアに居ることが出来れば……、ですが」

「おっしゃっていることが、よく解りません」

リオは、何時もの冷静な自分を取り戻していた。少なくとも、先生には、そう見えた。瞳の蒼が、深さを増す。

「君に、秘密にしていたことがあります。そのために、君には、かえって辛い思いをさせてしまいました。どうか、愚かな私を許して下さい」

小さく肩を竦める。

「正直に話しましょう。今回、君を人間界へ行かせた真の目的は、天使としての君の実力を測ることでした。天上界からの依頼で、私が決めました。そして、与えられた状況下で君が下した判断は……、確かに、君も予想していたように、天上界の一部の者達にとっては受け入れ難いものでしたね。彼等は、決められた手順どおりに、整然と物事が流れていくこと、そのみを『善』としていますから。それは、哀しいことですが、否定しようのない事実です。ですが、私は、先程も言ったとおり、今回の君の判断は正しかったと確信しています。なぜなら、君の判断は、天上界の唯一絶対者である神の御心に近づくものだからです。そして、私と同じように考える者は、天上界にも必ず居ます。ですから、リオ、君は、君が下した判断に自信をお持ちなさい」

校長先生は、瞳を閉じ、一つ、深く息を吐いた。今の言葉がリオの心に収まるのを待つように、そして、己自信の心を静めようとするかのように……。

窓の外で囀る小鳥の声が、耳に心地良く響く。それほどに、室内は静かであった。

校長先生の臉がゆつくりと開く。蒼の瞳は、凜とした強さをはらんでいた。

「さあ、リオ。君は今、二つの路の分岐点に立っています。どちらの道へ足を踏み出すか、決めるのは君です。君は天上界に戻り、永久の時を生きますか？ それとも、この地で魔法遣いとして、限りある命を生きますか？ もし、君が、本来在るべき姿に戻ることを望むのであれば、私は君を、今すぐにでも天上界へ戻しましょう。そこで君は、様々な困難にぶつかることでしょう。けれど、それがどんなに険しい壁であっても、君は必ず乗り越えられる。その強さと勇気を充分に身に付けている。私は、そう信じています。しかし、もしも君がルリアに留まることを願うのなら、その時は私が、なんとしても君を護りましょう。決して天上界へなど連れて行かせはしません。さあ、リオ、どちらを選びますか？ 難しい決断ですが、これから先は、君が決断しなければなりません。よく考えて、返事をして下さい」

明らかに困惑の表情を浮かべるリオ。縋るような瞳で先生を見つめる。

先生は、ニツコリと笑い、優しく言った。

「私としたことが、言葉が足りず、また、君を困らせてしまいましたね。今すぐ答えを出す必要はありません。ゆつくりと考えなさい。君の一生を左右する重要な問題なのですから。君が答えを見い出すまで、私は何時までも待ちますよ。さあ、疲れたでしょう。今日は、もう、お帰りなさい」

言うべきこと、話さなければならぬことは、全て伝えた。後は、リオ次第。任せるしかない。

先生は机に手をつき、椅子から立ち上がりかけた。けれど、その動きが止まる。

リオが動かない。立ち尽くしたまま考え込んでいた。

先生は、何か言葉を掛けようとしたが、小さく息を吐くと、再び椅子に深く腰掛けた。

リオは、暫くの間、微動だにしなかったが、やがて何かを振り切ったように顔を上げた。彼の口調は、ゆつくりと、しかし、はつきりとしていた。

「先生。僕は、この旅の中で、何度も考えました。何度も何度も考えました。神は、……全てを創造する御力を持つておられるはずの神は、なぜ、お手ずからお創りになられた人間達に、こんなにも多くの哀しみや苦しみをお与えになるのだろうか。神の御力を持つてすれば、人間界の全ての哀しみを消し去ることなど容易いはずなのに、なぜ、そうされないのだろうか、と……」

リオが小さく笑う。ぎこちなさの残る笑みだったが、そこには、もう、微塵の迷いも無かった。そして、その声からは、何時もの明るさすら感じられた。

「天上界の唯一絶対者である神に対して、こんな疑問を抱いてしまった僕が、天使になどなれるはずがありませんよね。だから、……決めました。僕は、この世界に、ルリアに居ます。この地で、友と一緒に暮らし、一人前の魔法遣いになり、限りある生命を精一杯に生きること、それが僕の願いです」

「……解りました」校長先生は、大きく頷き、につこりと微笑んだ。「良い判断です。それでは、私も君に約束しましょう。どんなことがあっても、君を天上界に渡しはしないと。君と、そして、君の友人達に約束しますよ」

ゆつくりと椅子から立ち上がる。

「さあ、もうお帰りなさい。お友達が心配していますよ」

「はい」

ペコリとお辞儀をし、部屋を出ていきかけたりオ。だが、その足が動きを止める。

校長先生が訝し気に眉を顰める。

リオは、ゆつくりと振り返り、小さな声で言った。彼の深い碧の瞳は、心の躊躇いそのままに揺れていた。

「……先生」

「どうしました、リオ？」

「最後に、もう一つだけ、お訊きしても良いですか？」

「はて、どんなことでしょう？」

「……神は……、今、天上界に……、神は、いらっしゃるのですか？」

先生の顔が、一瞬強張る。リオの発した問いに、明らかに深く動揺したのだ。それを隠すことさえ出来ないほどに……。

思い掛けない反応。リオは慌てて首を横に振った。

「ごめんなさい！ 僕、帰ります！」

慌てて扉に手を掛けたリオ。その背中を、優しい声が引き止める。

「……いや、リオ、お待ちなさい」

躊躇いながら、リオが振り返る。

第5章 真実 No.9

大きく澄んだ深い碧の瞳を、先生はじつと見つめた。

月の光を集めたような淡い金色の髪。雲の白さを写し取った透き通る肌。

その風貌から、彼が大天使、あるいは、現在も空席のままであるとルリアにまで漏れ聞こえてくる聖天使の座を埋めるために生を受けのであることは容易に想像できる。これで、瞳の色さえ、澄んだ空を写し取った深い蒼であつたなら……。そして、彼が、この優しさを持ったまま、天上界で成人し、天使達を導く地位に就いてくれたならば、世界は変わったかもしれない。

そう思うと、先生は無念さに齒噛みする思いを抑えられなかった。

リオは、そんな先生を、小首を傾げ、不思議そうに見つめ返した。

先生は、少し気まずげに笑いながら立ち上がり、窓辺に佇んで、外の風景に視線を置いた。そして、思った。年端もいかぬ、この少年が、数千年の時を生きてきた自分と同じ疑問を抱き苦しんでいる。今、老いた自分が、この少年にしてやれることは、何なのか。唯一、出来ることがあるとすれば、それは、自分の知る真実を、在りのままに語ることではないか？ そうすれば、きっと、この少年は、自分で考え、判断する。彼になら、きっとそれが出来る。そう思った。

校長先生は、ゆつたりと振り返り、手招きでリオを呼んだ。

リオは小走りで近付き、先生を見上げた。大きな手が、彼の頭を優しく撫でる。掌を通し、温もりが伝わる。

先生はリオを見下ろし、静かに口を開いた。

「神は、いらつしやる。……もしも、先程の君の質問を天使達に投げ掛けたなら、彼等は、きっと、そう答えるでしょう。ですが……、正直なところ、私には解りません。本当に、今でも天上界に神がいらつしやるのか否か、私には解りません。ですから、君の質問に答えることが、今の私には出来ないのです。けれど、一つだけ、私に

解ることがあります。それをお話しましょう。随分と古い、昔話ですけれどね」

校長先生は、リオの頭に手を置いたまま、遠くを見つめた。

その深い蒼の瞳が、何を捉えているのか、リオには解らなかった。先生の白い髭を割って、朗々と言葉が流れ出す。それは、まるで長い歴史を語る、老いた語り部の言葉のようであり、且つ又、古い音楽のようでさえあった。

「……数千年の昔、天上界で大きな反乱がおきました。『天上界の大反乱』と呼ばれるその事件は、今でも、天使達の心に深い傷を残しています。そして、数多の天使の運命を狂わせながらも、その反乱が終焉を迎えた時、神は、お独りで天上界の城『天宮』に籠もっておしまいになられました。そして、それきり、側近である聖天使達の前にさえ、お姿を現されることは無くなってしまったのです。

……私に解るのは、そこまでです。その後のことは、何一つ解りません。神が今でも天宮に居られるのか、はたまた、別の世界をお創りになられるため、何処かへ去ってしまったのか……」

夕陽が窓から射し込み、先生の豊かな白い髭を紅く染めた。その反射のせい、リオには、先生が泣いているように見えた。

先生は、そこで一つ息を吐くと、再びリオを見、少し淋し気に微笑んだ。

「今日のところは、これで許してもらえますか？」

リオが先生の服の裾をギュッと握り締める。先生の心を占める言ひ知れぬ哀しみが、リオの心の中に流れ込んできた、そんな気がしたから……。

「先生、ごめんなさい。僕……」

「さあ、本当に、もう帰らないといけませんね。もうじき陽が暮れてしまいます」

優しい笑みと共に、もう一度、リオの頭を撫でる。けれど、続く言葉を口にした時、先生の表情に笑みは無かった。

「最後に一つだけ、君に忠告しておきましょう。天には天の真理が

あり、地には地の真理があります。それと同じように、天上界の真理とルリアの真理も同じものではありません。どちらが正しく、どちらが過ちであるか、それは誰にも決められぬこと。それが現実です。真理に従い行動しても、お互いの思惑が食い違い、衝突することもある。しかし、それを誰が責めることが出来るでしょう。信念とは……、そういうものです。」リオがコクリと頷くのを確認し、言葉が続く。「天使達にとっては、天上界の真理こそが絶対。それこそが、常に正義なのです。そして、正義を遂行することに、一切の迷いも、躊躇ありません。彼等にとって、それは、天上界と同等の立場にある、このルリアにあっても同じことなのです。そして、彼等は君を欲しています。君が、この地に留まることを望んでも、彼等はきつと、あらゆる手段を講じ、君を手に入れようとするでしょう。そのためにはならば、彼等は直接、君や、君の友人達に接触することも厭いません。その時は、リオ、迷わずに私に相談すると約束して下さい。君を護ると、決して君を連れていかせはしないと、私は君に約束しました。その約束を、君は私に守らせてくれないければいけません。いいですね。絶対に、君や友人達だけで動かないように。天使達の考える正義と、我々が考える正義は、必ずしも同じではないのです。そのことを、決して忘れないで下さい」

リオは、ただ黙って頷いた。笑みの消えた先生の表情に、何らかの問いを發する余地も見出せなかったから。彼の小さな胸に、一抹の不安が過ぎった。

第5章 真実 No.10

魔法遣い養成学校の真つ暗な校長室。

椅子に腰を下ろす校長先生の真正面には、二人の天使が佇んでいた。月明かりだけが、彼等のシルエットを形作る。それは、数日前に、この部屋を訪れたのと同じ天使であつた。

「あの子供を我々に渡せないとは、いったい、どういうことですか！」

静かな部屋に、年若い天使の怒声が響く。

だが、それに臆することなく、先生は静かに言った。

「理由は、先程お話したとおりです。聞こえませんでしたかな？
では、もう一度申し上げましょう。本人がルリアに残ることを希望しています。ですから、リオを貴方達にお渡しすることは出来ません。お引き取りください」

若い天使は、冷静さを取り戻そうと、数度、大きく息を吐いた。

そして、彼等を隔てる大きな木の机に両手をつくつと、前屈みに、先生に顔を近付けた。

「貴方は何も解つていらつしやらないようですね。我々は、本人の希望を訊いて戴きたいなどとお願ひした覚えは無い。彼の能力さえ解れば結構。そのつもりで、貴方の提案どおり、今回の魂迎えを彼に任せた。ですが、その結果たるや、貴方もご存知のとおり、惨澹たるものです。ああ……、思い出すことすらおぞましい。魂を迎えに行つたはずの天使が、……いえ、彼は天使ではありませんが……、とにかく、死に逝く者に、生きることを願えと勧めるなど、言語道断。彼の思想は、あまりにも危険です。天上界へ連れ帰り、しかるべき処置を執ります。これは、大天使様の御決議にる決定事項なの

です。それを、今更、変えることなど出来はしませんよ」

「その、御決議とやらを下された大天使様とは、いったい何方なのですか？」

「貴方が知る必要など無い！」

天使は再び声を荒げた。

「知る必要は無い……、ですか」先生は、机上に肘をつき、組んだ指に顔を埋めると、深い溜息を吐いた。「天上界というところは、三千年間、全く変わってはいないのですね。自分達の正義こそ絶対。自分達の決断こそ全て。人間達も、そして、このルリアの民さえも、自分達より遙かに下等な生き物、……虫けら同然と考えておられる」顔を上げ、天使達に視線を向ける。その表情にも、次いで発せられた声音にも、これまでとは打って変わった、厳しい怒りが満ちていた。

「帰られよ！ 私は、彼の判断は正しかったと思っている。彼の優しさは、天使以上。あのような判断を下せた彼を、同じルリアの民として、誇りにこそ思いはすれ、危険だなどとは欠片も思っていない。リオは、お主等のような型に嵌っただけの天使とは違うのだ。心を持つておる。天上界の過ちを隠すため、今更、心を持った者を、駒のように右から左へ、思い通りに動かせると思ったら、とんだ思いがりじゃ。さあ、帰られよ。帰って、その偏屈な大天使様とやらに伝えるのですな。私の眼の黒いうちは、決してリオは渡さぬ。そのように、ルリアの偏屈爺が申ししていたとな！」

恐らく、生を得て初めて浴びせられた屈辱的な言葉。若い天使は、怒りに身を震わせ、両手で思い切り机を叩いた。

しかし、その天使が感情のままに言葉を発しかけた瞬間、年嵩の天使が、それを制した。彼は、二人の間に割って入ると、静かに口を開いた。

「解りました。今日のところは、貴方に免じて退散するといたしましょう」

若い天使が、明らかに不満気な表情で何か言いかける。けれど、

年嵩の天使の視線の前では、結局、何も言えず、促されるままに出口へと向かった。

若い天使の後に続き、校長先生に背を向けた年嵩の天使。しかし、一度立ち止まり、肩越しに言った。

「今日のところは、帰ります。ですが、ご忠告申し上げておきましょう。我々が彼の者を連れ戻そうとするのは、それ相応の理由があることです。我々は、常に真理を求め、真理のためだけに行動しているのです。貴方は、やがて、そう遠くない未来に、ご自分が情とやらに流され、下された今回の判断の愚かさを知り、きっと後悔なさることでしょう。そして……、お忘れ下しますな。天上界が、その気になりさえすれば、少年の一人くらい、この世界から連れ出すことなど雑作もないのだということを……」

瞬間、校長先生は机を叩き、椅子を蹴って立ち上がった。

「そうはせん！」

ゆつくりと振り返った二人の天使は、激しい怒りを露わに握り拳を震わせる白髭の老人に、冷やかな視線を投げた。

「天上界の力は、貴方もよくご存じのはずではありませんか？ 我々に不可能はありません。それとも、三千年もの時を、こんな下等な世界で過ごされるうちに、何もかも、全て忘れてしまわれたのですかな？ 聖天使ケルビム様。元は聖天使様とはいえ、貴方は今、一個のルリアの民にすぎないのですよ。我々が何時までも、今までのように、貴方の言葉を受け入れるなどとは、努々思われませぬように……」

言い置き、天使達は、重い扉を軽々と開けて出て行った。

扉が閉まった後も、先生は、先程まで天使が立っていたその場所を、じつと凝視し続けた。そして、机の腕に置かれた両の拳は、白くなるほど強く握り締められていた。

第5章 真実 No. 11

それから、どれほどの時間が過ぎたであろうか……。

暗い校長室。先生は独り、窓辺に佇み、月を眺めていた。

天使の言っていた『それ相応の理由』とは、いったい、何を意味しているのだろうか。それが酷く気に掛かった。けれど、今の自分に、その答えが解るうはずも無い。自嘲気味に微笑む。

そして、ただ一つだけ解った事実。それは、自分の予想以上に、天上界がリオを欲しているということ……。

この先、天上界は、あらゆる手段を講じて、リオを奪い去ろうとするであろう。老いた身で、どこまで防ぎきれんだろうか。一瞬、不安に身を震わせる。だが、そんな思いを振り切るように、首を強く横に振り、後ろ手に組んだ手を強く握り締めた。護らなければいけない。何があるかと、必ず護ると、リオ本人に約束したではないか。そう、『あの時』助けられなかった友の代りに、その友に面差しのよく似たリオを護ることこそが、今の自分に出来る、せめてもの償い。そう思っていた。リオに、友と同じ苦しみを味あわせてはいけない。そのためになら何でもしよう、しなくてはならないのだ。校長先生は、優しい光で世界を平等に照らす月に向かい、語り掛けるように呟いた。

「貴方と同じ瞳を持つ、あの少年は、心根までも貴方と同じ、深い愛情に溢れた、心優しい子ですよ」

辛い出来事を思い出し、先生の顔が、一瞬強張る。右手の拳で、強く壁を叩いた。

「誰かを深く想うこと、愛する心が罪だなどと……、なんと愚かしい！」

しかし、ふと気付けば、月の光は穏やかに、生きとし生ける物全てを包み込むように照らし、先生さえも例外なく、淡く輝かせてくれている。その優しさが、懐かしい友の笑顔を思い出させ、先生の

表情は無意識のうちに和んだ。

暫く、じつと月を見つめた後、先生は、月に重なる友の面影に、そつと囁き掛けた。

「貴方によく似た、あの少年は、貴方を護り切れなかった罪の意識に苛まれている私に遣わされた、貴方からの免罪符。そう思つて、私の命の続く限り、彼を護りましょう。それで宜しいですね？ 我が最愛の友セラフィムよ」

一つ息を吐くと、窓から離れ、扉に向かつてゆっくりと歩き出した。そして、扉を開けると、もう一度、見慣れた部屋を振り返つた。暫し、室内を眺め渡した後、静かに扉を閉める。

遠ざかる足音は徐々に小さくなり、やがて、養成学校は静寂に包まれた。

第6章 不安 No.1

六 不安

ある日の夜更け、突然、アルフがルーの部屋を訪れた。いや、押し入ったといった方が正しいかもしれない。

部屋に入るなり、不機嫌そうにベッドに腰を降ろす。ベッド全体がギシギシと揺れた。

「クソ！ 何でだよ！」

苦々し気に呟き、アルフは、勢いよく仰向けに寝転がった。

楽しい夏休みが始まったばかりだというのに、アルフは、このところ、頗る機嫌が悪い。そして、その被害者は、何時もルーと決まっていた。

原因は……、リオ。

夏休みの前日に家を空け、戻ってきて以来、塞ぎこんでいる様子なのだ。

いや、はつきりと塞ぎこんでくれた方が、まだましだ。普段は何時もどおりにニコニコしているくせに、行動の端々に、何時もの彼ららかなぬ空ろさが見え隠れしているのだ。

気になって問い掛けてみても、

『僕は平気だよ。心配しないで。』

決まって、そう答える。しかも、満面の笑み付きだ。だから、それ以上、何も訊けなくなってしまう。

しかし、アルフもルーも気付いていた、その笑顔が微かに歪んでいることに。

なぜ、リオは、何も相談してくれないのか……。何も出来ない己の非力さを思い知らされるようで、二人とも、歯痒さに居た堪れない気持ちだった。

「リオの奴、最近、絶対おかしいよ。何時も部屋に籠もりっきりで

さ。なのに、俺達が何を聞いても、『僕は大丈夫』、……なんてさ。絶対、嘘だ。全然、大丈夫なんかじゃない。ホントは何かあったんだ。それなのに、俺達に気を遣ってニコニコしやがって……。水臭いにも程があるよ!」

仰向けに寝転がったまま、アルフは握り拳で思い切りベッドを叩いた。

傍らの椅子に腰を下ろしていたルーが、冷ややかな視線を向ける。

「リオの部屋に行けないから、ボクんとこに来たのぉ?」

「悪いかよ!」

明らかな八つ当たり。ルーは大きな溜息を吐いた。

「元はと言えば、アルフが悪いんだからねえ。リオが落ち込んでるみたいって解ってたのに、暫くは、そつとしておこう……。なんて、カツコ良いこと考えてるから、結局、ボク達、訊くタイミングなくしちゃったんだよ」

「解ってるよ! そんなこと!」

アルフは勢いよく軀を起こし、苛付きを静めようとするかの如く、ボリボリと頭を掻いた。次いで、片膝を抱えると、自分自身を非難するように言う。

「そうさ。俺が馬鹿だったんだよ。あいつが、あんなに落ち込むなんて、変だと思ったんだ。なのに、一晩明けたら、あいつ、何時もと同じようにニコニコ創り笑いなんかしやがってさ。それでも、すぐに音を上げるだろうと思ってた。それなのに……。ここまで頑固者だとは思わなかったぜ」

親指を噛み、喉の奥から言葉を絞り出す。

第6章 不安 No.2

ルーの表情が暗く沈んだ。椅子をベッド側に向け、アルフと正対する。

「何とかしてあげようよ、アルフ。リオは絶対、自分から弱音を吐いたりしないんだもの。今のリオを見ると、ボク、哀しくなっちゃうよ」

「そんなこと、言われなくなつて解ってる。俺だって、あいつが喜ぶことなら何だってしてやりたいよ。ただ、どうしたら良いか解らないから困ってるんだろう」

アルフは、そう言つたきり黙り込み、ベッドの枠を指で小刻みに叩いた。

ルーは椅子の上で両膝を抱え、組んだ腕の間に顔を埋めた。

二人とも、思ひは一つだ。大切な友を救いたい。なのに、どうすればいいか解らなかった。

長い沈黙の時が流れた。時計の音だけが、規則正しく響く。

「まったく……。それでなくても、クワイのことだけで頭痛いつてのに……」

アルフが忌々し気に呟く。その声は決して大きくはなかったけれど、静寂の中でルーの耳に届くには充分だった。

ルーは顔を横に向け、アルフの独り言に答えて言つた。考えていたはずのリオの件については、良い案が何も浮かばなかったようだ。「そうだよねえ。好き嫌いがあるのは、しょうが無いことだけど、でも、どうして、あの子は、最初からリオのことを嫌ってるんだらうね。リオには誰かに嫌われる理由なんて何も無いんだよ。クワイにだって何も悪いことなんかしてないんだもん」

当たり前前の疑問。

アルフは宙に視線を泳がせ、少し考え込んでいたが、ふと、小声で呟いた。

「『力への憧れが強ければ強いほど、妬みや嫉妬も大きくなる』……か」

「何？ アルフ、なんて言ったの？」

よく聞き取れず、ルーが問い返す。

その瞬間、アルフはハツと眼を見開き、ベッドの枠を強く叩いた。

「ちきしょう……！　そういうことか！」

うめくような言葉。

「アル……？　どうしたの？」ルーが問い掛ける。

アルフは苦々し気に言葉を継いだ。

「最近、リオの様子がおかしかったのは、きっと、そのせいなんだ。俺としたことが、こんな簡単なことに気付かなかったなんて……。

クソ！」

「何？　何のこと？　アルフ、ボク、全然解らないよ！」じれったそうにルーがアルフの袖を掴む。

その声が聞こえているのか、いないのか、アルフは、まるで独り言のように呟き続けては、独り、納得の態で頷いた。

「リオは、校長先生に依頼されて、ヤナイ族に会いに行ったんだ。

そこで、何かがあった。あいつの信念を混乱させるような何かが……。

……。それで、悩んでるんだ。きつとそうだ！」

独りだけで話を進めるアルフ。

ルーは、アルフの腕を掴み、上下に何度も大きく揺らした。

「もう！　アルフ、ボクにも、ちゃんと解るように話してよ！」

第6章 不安 No.3

アルフは、逆に訝しむような視線をルーへと向けた。

「ルー、お前は何も感じないのか？」

「何を？」

「クワイだよ」

「だから、何を？」じれったそうなルー。

対するアルフの答えは短く、そして、冷やかだった。

「……奴は、ヤナイだぜ」

「……え？」

「間違いない」

一瞬言葉を失うルー。それを誤魔化すように気まずげに笑う。

「小人族の中で育ったアルフが言うんだから、間違いないよね」僅かに小首を傾げる。「じゃあ、あの子は将来、神官になるんだ。大変だねえ」

少し曖昧に、それだけ言った。

普段、何事に対しても頓着することなく、おっとりしているルーが、曖昧に笑うことなど滅多に無い。だが、今、その笑みには充分すぎる理由があった。

ヤナイ族……。

多くの場合、その名が笑顔で語られることはない。

ヤナイ族とは、大陸の南端に暮らす民族で、ルリアでは珍しく、狩猟を生業とする一族である。

ルリアの民には、肉食を嫌う傾向がある。特に、ヤナイ族は、肉食というだけで無く、ルリアで一番『人間』に近いという理由から、数多の民の中で、『魔族』の次に忌み嫌われる種族の一つなのである。

偏見といってしまうえば、それまでのこと。だからといって、ヤナイ族をどうしようなどという考えは、ルリアの民には思い付き

すらしらない。ただ、極力、ヤナイには近付きたくない。そう思っている種族が多いということだ。

ヤナイ族の特徴は、体が丈夫で、体力があり、寿命は数百歳ほどであること。ルリアの民の平均寿命と比べると遥かに短命な彼等は、ルリアで最も重要とされる精神力『夢幻』が、あまり発達しない。それ故、魔法遣いになるには最も適さない民族である言われている。

そんなヤナイ族の中で、生きるために重要な様々な行為、例えば族長の継承、狩猟の時期や方角、果ては民の婚姻の日に至るまで、様々な決定を下す『神官』は、族長以上の尊敬と畏怖の対象であった。神官となるには、一族の中で最も精神力の強い子供が、選ばれて魔法遣い養成学校で学び、卒業と共に神官代理となつて、それから何年もの間、正規の神官の許で修行を積まなければならない。ただでさえ卒業することが難しい魔法遣い養成学校をヤナイ族が卒業するには、並大抵以上の努力が必要であることは言うまでもない。

そして、クワイである。

彼がヤナイ族であるということは、言い換えれば、将来、彼はヤナイの神官になることを運命付けられているということだ。本人が、それを望んでいるか否かに関わらず、それは逃れることの出来ない運命。しかも、現在の神官は、かなりの高齢だという噂である。クワイの肩に懸かる重圧が相当なものであることは、容易に想像出来た。

ルーの言葉に頷きで応え、アルフは言った。

「ヤナイは人間と同じで短命だ。その上、今の神官は相当な老齢で話だ。クワイの卒業まで待つのがやっとだろう。クワイは一日でも早く、この学校を卒業して神官にならなきゃならないんだ。校長先生だって、そのくらいのこと、解ってる。でも、今のクワイは、決して出来の良い奴とはいえない」

「うん。きつと、大変だろうね」答えたルーの視線が、問い掛けるようにアルフを捉える。「でも、そのことと、リオの元気が無くな

ったことと、いったい、どういう関係があるの？」

「ヤナイの神官の依頼ともなれば、校長先生だって、個人の能力を自由に伸ばすのが養成学校の方針だとばかりも言ってられないだろ。だから、きつとリオに頼んだんだよ。クワイの能力を目覚めさせる切っ掛けを見付けてやってくれ、とか何とか……」一言、言葉にする毎に、アルフの中で、その思いが確信へと変わっていく。「クワイが何を考えているかなんて、ヤナイじゃない俺達には到底解りっこない。でも、リオは、ほら、あの通り生真面目だから、適当にお茶を濁すなんて出来っこない。だから、きつと、あいつは探しに行ったんだ。ヤナイ族まで、クワイの切っ掛けを探しに……。そして、そこで何かがあった……」

「……どうして、そう思うの？」ルーの問い。

親指を噛み、アルフは言った。

「お前には話してなかったけど、あいつ、校長先生の用事とやらから帰ってきた時、凄くぐったりしながら俺に訊いたんだ。正しいことって何なのか、それが解らなくなってしまったって……。俺、その時は、リオが何を言いたいのか解らなかった。でも……、こういうことだったんだ」

「それは違うよ、アルフ」

聞き慣れた、しかし、今は、そこにあるはずのない声。

驚いた二人が揃って振り返る。

扉は開いていた。そして、そこに立っていたのは、眩ゆい金色の髪
の少年。

アルフは咄嗟に寝転んでいたベッドから飛び起きた。

第6章 不安 No.4

「リオ！ お前、寝てなくて大丈夫なのか？」

それは、話を聴かれたことへの言い訳でも何でも無い、彼の正直な思い。

リオがニツコリと笑い、コクリと頷く。

「平気。心配掛けて、ごめんね」次いで、彼の視線は、部屋の主へと向けられた。「入ってもいい？」

確認され、ルーはトコトコと扉に駆け寄り、リオの腕を引っ張った。

「ありがとう」

言いながら、部屋に入るリオ。促されるまま、ベッドの端に腰を下ろし、二人の友を交互に見比べた。

「ごめんね、アルフ、ルー。君達が、こんなにも僕のことを心配してくれてるなんて思わなかった。でも、僕は平気だし、クワイは全然関係ないんだよ」優しい瞳が、不意に淋し気に曇る。「だから、アルフ、もうやめて。この学校で学んでいる間は、種族や年齢、性別は一切関係ない。入学式の日、校長先生が、そう仰っていたもの。それに、僕はクワイの言葉なんて気にしてない」

「なら、なぜなんだよ。なぜ、お前は、こんなに動揺してるんだよ。いったい何があったんだ？」

率直なアルフの問い。

しかし、リオは答えられない。困惑の態で眉根を寄せ、俯いてしまふ。

アルフは大きく溜息を吐くと前髪を掻き上げた。

「……答えないなら、それでもいい……。つまり、俺の勘は当たってるってことだ」

断定的な言葉。

リオが苦し気に眉を顰める。

「アルフ！ それは違う。本当に違うんだよ」

「なら、お前は、どうしてそんなに落ち込んでるんだよ！」

じれった気に壁を叩く。

だが、リオは、今度も俯いたきり、何も答えなかった。

「……やっぱり、そういうことなんだろう？ 他に理由なんかないじゃないか」

アルフは小さく笑った。

「安心しろよ、リオ。俺は、種族とかで人を判断したりしない。実際、俺がそうされてきたし、一番嫌いなことだからな。でも……」次の瞬間、表情を硬くする。「あいつが、これ以上リオに何かするようなら……、そして、その時、必要だと思ったら、俺は……、言うぜ、このこと。それで、俺が悪者になったって……、恨まれたって、そんなこと構うもんか」

「ダメだよ、アルフ！ 本当に違うんだ！ お願いだから……」

リオが身を乗り出す。アルフが今にも飛び出していくのではないかと危惧し、それを制止しようと、彼の腕を掴んだ。碧の瞳は、その心を映し出し、哀しみに揺れていた。

リオがみせた、予想外に必死の表情。

アルフは一瞬、酷い罪悪感に苛まれた。言葉すら失い、眼前の友を凝視する。

その時……。

アルフとリオの会話を聞いていたのか、いないのか、ルーが突然、口を開いた。

「ねえねえ。あのねえ」

二人の視線が、揃ってルーへと向けられる。

「ひよつとしてさ、クワイがリオを虐めるのって、サリバン先生が原因なんじゃないのかなあ？」

二人は無言のまま、ルーの次の言葉を待った。

ルーは、ちょっと考え込むように首を傾げたが、独り納得した態度で頷き、話を続けた。

「クワイが大変なのは、解るよ。きつと、すごく大変なんだよね。でもさ、それでも変じゃない？ クワイがリオの能力にヤキモチ焼いてるんだとしたら、どうしてリオだけなんだろう。アルフだって、ボクだって、取りあえず、課題をこなすことくらい出来てるよ。リオは、みんなの前で、それ以上のことなんか何もしていないよね。それなのに、クワイはボク達なんか相手にもしないで、リオばかり目の敵にしている。ってことは……」

「能力に対する嫉妬じゃ無いってことか？」

アルフが言った。

第6章 不安 No.5

ニコニコと頷くルー。

「じゃあ、どうして……？」リオが訝しむように呟く。

ルーは、リオの顔を覗き込むように顔を寄せ、微笑んだ。

「リオとボク達の違いっていったら、リオだけが、何時もサリバン先生のいうこときいて、助手代わりをしてるってことくらいじゃない？ アルフなんて、逆に、先生、虐めてるもの」

「虐めてるわけじゃ……」不満気なアルフ。

しかし、睨み付けるアルフの視線も何のその、ルーは責めるように言う。

「でも、先生、哀しそうだよお」

気まずげに髪を掻き回し、アルフがそっぽを向く。こんな時、何時もアルフは、ルーに敵わない。

「きつとね、クワイはサリバン先生のことが好きなんだよ。」無邪気なルーの言葉。「だから、何時も先生に可愛がられてるように見えるリオに、ヤキモチ焼いてるんだ」

素晴らしい、完璧な推理……、と、本人は思っているらしい。二人の友の賞賛の言葉を期待し、胸を張っている。

アルフとリオは、顔を見合わせた。

リオは、複雑な思いそのままに顔を少し歪め、アルフはニヤリと笑うと、勢いよくルーの首に片腕を回した。

「ルー。お前ってさ、時々、ビックリするようなこと言い出すよな」アルフは言った。

ルーは不満気だ。

「酷いよ、アルフ！ それ、どういう意味さ！」

「どういつって……、言葉どおり、ルーは凄いつてことだよ」

「嘘！ 絶対、他の意味がある！ ねえ、リオ、なんとか言ってよ！」

アルフとルーの遣り取りを聞きながら、リオが小さく笑った。小さいが、創り物ではない、心からの笑顔。

それを待っていたかのように、二人の会話は途切れた。

アルフは、ゆっくりと腕を伸ばし、灯にキラキラと輝く金色の髪を指先で優しく梳いた。

「なあ、リオ。俺とルーにとって、お前の笑顔は特別なんだ。だから、何時も、そんなふうに笑っていてくれよ」

「え？」問い掛けるリオの瞳。

その腕に、ルーが腕を絡ませる。

「アルフはね、哀しそうな笑顔なんて、リオらしくない、見たくないつて言ってるんだよ」

「ルー、お前……！」

「だって、何時も、そう言ってるじゃない。いくら口下手だからって、ちゃんと言わなきゃ伝わらないことだってあるんだよお」

ルーの頭上をアルフの拳骨が襲う。

ルーは大袈裟に頭を撫でながら、リオの背後に隠れた。

その褐色の頭を、更にアルフが追う。

二人の間に立ち足はだかる形になってしまったリオは、困惑しながらも、ルーを背に庇った。

「ルー！ お前、リオを盾にするなんて卑怯だぞ」

「叩かれるより、いいもん！」

二人の会話につられ、リオの顔にも自然と笑みが零れる。

「アルフ。ルーも、ほら、もう、やめにして……」

言い掛けたリオの肩に、アルフの、次いで、ルーの手が添えられる。

ふと上げたリオの視線。その先には、二対の優しい笑み……。

「俺達は、もう、独りぼっちじゃない」

「三人なら、何があつたって平気だよ。ねえ、リオ？」

二人の励ましの言葉と掌の温もりが、心の奥底にまで染み込む。

リオの瞳の端に、微かに光るものが浮かんた。本人でさえ、気付

いてはいない、本当の心の欠片。

アルフが、然り気なく親指の先でそれを拭う

「俺達は、夢に向かう初めの一步を、やっと踏み出したばかりなんだ。これから先、まだまだ道程は長いけど、きっと立派な魔法遣いになろう。三人一緒に。な？」

リオはベッドの上で膝を抱え、腕の間に顔を埋めた。今の自分は、きっと、もの凄く情けない顔をしている。そんな顔を、二人に見られなくなかった。見られるのが、……恥ずかしかった。

第7章 秘められし力 No.1

七 秘められし力

1

明るい陽の光を故意に遮るように、幾つもの白い影が一人の赤ん坊を取り囲んでいる。その場に漂う、何ともいえない重苦しい空気。息苦しささえ感じるほどだ。

しかし、そんなピリピリとした雰囲気も、陽の光を遮られ生じた薄暗い影さえも、白い影達の輪の中央、あどけなく微笑む赤ん坊が放つ柔らかな光によって、穏やかに掻き消されていた。

赤ん坊の肌は、己が放つ光そのままに、透き通るように白く、それを彩るシェルピンクの頬と薄紅色の唇が、肌の白さを際立たせていた。髪は、月の光のような淡い金色に輝きながらフワフワと微風に揺れ、大きな翡翠玉のような瞳は、そこに初めて映し出される世界への好奇心に溢れていた。赤ん坊は、時折、宙を掴むような仕草をしながら微笑みを浮かべたが、その笑みは、この世のものとは思えぬほどに愛らしかった。

しかし、周囲の白い影達の眼には、赤ん坊の花のような笑顔さえも、なぜか禍々しく映るのだった。

「これは、不吉な……」

「邪悪なり。この赤子は凶兆。直ぐさま消滅させねば、この世界にどのような災いをもたらすか知れぬ」

「二度と再び、あの悲劇を繰り返してはならぬ」

「殺せ！」

「今すぐ殺すのだ！」

津波の如く沸き上がる声に呼応し、一つの白い影が、赤ん坊の頭上めがけ、輝く剣を振り下ろす。だが、光の軌跡は、一つの声によ

り歪められ、剣の切っ先は虚しく空を裂いた。

「愚か者。殺してはならぬ。この地を、その者の血で汚すことこそ大罪」

声は、周囲の空気を振動させ、低く響いた。

白い影達が、一斉に声の主を振り返る。

陽の光を背に受け佇む影は逆光により黒味を帯びていたが、それでも、そのシルエットは、周囲の影達より明らかに一回り大きかった。

声の主は、白い影達が問う。

「それでは、どうすればよろしいと……？」

「この赤子は明らかに凶兆を示しております。生かしておくことは出来ませぬぞ」

声の主が、ゆっくりと赤ん坊に歩み寄る。

白い影達の輪が崩れ、赤ん坊まで続く道が出来た。

声の主は、赤ん坊の傍らに立つと、己が、束の間繋ぎ止めた命を、暫くの間、無言で見下ろした。

赤ん坊は、自分を襲おうとしている運命など知る由も無い。声の主に向かって両手を伸ばし、その顔には無邪気な微笑みすら浮かべた。

声の主は、その笑顔に魅入られることを恐れるように背を向けると、吐き捨てるかの如く、一言、低く言い放った。

「墮とすのだ。その地で死すれば、この赤子の運命の糸は、元々、そこまでしかなかったというだけのこと」

「生き残れば……？」

一つの影が問う。

声の主は答えた。

「……それも、この赤子の天命」

声の主は踵を返し、長い髪を靡かせながら、その場を立ち去った。その背中を見送った後、白い影から幾つもの腕が伸び、赤ん坊を抱え上げた。白い影達は、躊躇いの欠片も無いままに、赤ん坊を足

許の裂け目から、
……墮とした。

第7章 秘められし力 No.2

声にならない悲鳴と共に、深い碧の瞳が大きく見開かれた。

胸がドキドキして、躰中、嫌な汗がじつとりと滲んでいる。

キョロキョロと周囲を見回し、そこが見慣れた自分の部屋であることを確認して、やっと深く息を吐く。

「……また、あの夢……」ポツリと呟く。

人間界に行つて以来、リオは度々、同じ夢に魘された。

白い手に堕とされる、産まれたばかりの赤ん坊。

自分に似ているようにも思うが、自信はない。

ただ、目覚めた時、酷く恐ろしく、淋しく、哀しい思いが心を満たす。

既に陽は昇っている。

森の木々の間を擦り抜けた光が、小さなベッドの中で真つ白な布団に包まるリオの頬を柔らかく照らしている。

眩しさに、ほんの少し眉を顰める。

起床の時間だが、暫くの間、ベッドに横たわったまま、ぼんやりと宙を見つめた。

やがて、気だるげに躰を起こし、部屋に造り付けのクローゼットに向かつて、重たい腕を伸ばす。すると、クローゼットの扉が自ら開き、中に吊るされていた墨色の長衣が一枚、ハンガーを上手に外して、フワリと宙に舞った。

だが、次の瞬間、腕を降ろす。同時に、それまで宙を舞っていた服が、フワリと床に落ちる。

ゆつくりとベッドから降り立ち、服に近付くリオの頬に、微かに苦笑いが浮かんだ。

「いけない。校長先生の言い付け、守らなきゃ……」

それは、もちろん、魔法遣い養成学校校則『授業以外での魔法使

用の制限』のことだ。

床から服を掴み上げるために屈み込んだリオの透き通る白い肌とシエルピンクの頬を、黄金色に輝く朝陽が照らす。彼の美しい横顔には、しかし、疲れが色濃く浮かんでいた。

養成学校の制服である墨色の長衣に着替え、大きな教科書を重そうに抱えると、そのまま部屋を出る。

台所では、今日の朝食当番であるルーが、くると働いていた扉の開く音でリオに気付き、満面に笑みを浮かべる。

「おはよう、リオ。ご飯、もうチョット待っててね」

「うん……。僕、今日はいいよ。食欲、……無いんだ」消え入りそうな声。

手を止め、ルーが心配そうにリオの顔を覗き込む。

「……どうしたの、リオ？ 大丈夫？」

「平気。ごめんね、ルー。今日は僕、先に行くから」

言い置いて、家を出ようとするリオ。

だが、その脚はフラフラと崩れ、上体はテーブルに凭れ掛かったルーが慌てて支える。

「アルフ！ アルフ、早く来て！ リオが……！」

声に反応し、部屋から飛び出してきたアルフ。リオの様子を見るや、側に駆け寄り、両肩をしっかりと支えた。

優しい温もりに顔を上げたリオの霞む眼に、見慣れた漆黒の瞳が映った。そして、その横から心配そうに覗き込むトパーズの瞳。我知らず、安堵の溜息が漏れる。よろめきながらも、リオは自力で立ち上がるうとした。が、足が縋れ、再びアルフの腕に縋った。

華奢な肩を支えながら、アルフが言う。その声は、心配からか、微かに掠れていた。

「何やってんだよ、リオ。お前、もの凄く顔色悪いぞ。今日は部屋で休んでろよ。先生には、俺達から話しておくから」

だが、リオはきかなかった。部屋に引き返そうとするアルフの腕を優しく遮り、無理に笑みを創る。

「ありがとう。でも、大丈夫。僕は大丈夫だから」

額には、じつとりと脂汗が滲んでいた。決して『大丈夫』な状態などでは無いことは、一目瞭然だ。縛り付けてでも部屋に置いておきたかった。けれど……。

一度言い出したら、きかないのがリオだ。その性格は、アルフもルーもよく知っている。リオが学校に行きたいと言い張る以上、ここで無理に寝かし付けていったとしても、後から必ず追いついて来るに違いない。

二人は仕方なく、手早く身支度を済ませ、両脇からリオを支えて、学校へと向かった。

第7章 秘められし力 No.3

夏休みが終わり、授業が再開されて、もうじき一月が過ぎようとしていた。

森は着実に時を刻み、既に夏から秋への模様替えの準備は万端だ。何時ものように、教室の後方端に席を取り、アルフとルーは、リオを護るように、彼を挟んで並んで座った。

席に着いてからも、リオは軀を前に屈し、苦し気に肩で息をしている。

その様子を、二人は心配そうに、しかし、ただ見つめていることしか出来なかった。それが、歯痒かった。

魔法実技基礎課程は第五課題へと進んでいた。課題の内容は『瞬間移動』。

サリバン先生は、課題を進める上での注意点やコツについて説明し終わると、何時ものようにリオを呼んだ。

「リオ、今日も宜しくね」

さすがに、今回ばかりは見かねたアルフが、抗議しようと思いを浮かしかけた。だが、その腕はリオに取られ、出鼻を挫かれてしまった。

リオは、青白い顔に、やっと笑みの形を創り、不満気なアルフを宥めるように言った。

「ありがとう、アルフ。でも、僕は、僕の出来ることを精一杯やるうって、そう決めてるんだ。だから、お願い。……止めないで」

アルフの腕に触れたリオの指先は冷たく、小刻みに震えていた。

リオが何を言おうと、アルフは正直、リオを止めたかった。止めるべきだと思った。なのに、……出来なかった。そんな己が情けなく、口の中で自分自身に悪態を吐きつつも、リオが通れるように場

所を譲る。

リオは、途中の机に手を付いて躰を支えながら、階段状の床を一歩一歩、ゆっくりと降りていった。

彼の顔色は真っ青で、さすがのサリバン先生も、リオの躰の不調に気付かぬはずは無かった。

「まあ、リオ。貴方、顔色が悪いようだけど、大丈夫かしら？」

「……はい。大丈夫です」

言葉とは裏腹に、リオの躰は左右にフラフラと揺れ、教卓に添えた腕に支えられて、やっと立っていられる状態だった。

その時、突然、教室の中央から声が飛んだ。

「先生！ そいつは何をやったって出来るんだから、授業になんか出る必要、無いんじゃないの？」

途端に先生は、不愉快そうに眉を顰めた。腰に手を当て、声の主を探す。

「こら。今の声はクワイね。先生はね、特別扱いはいしないの。出来る、出来ないに拘わらず、授業には出てもらうわよ。特に、クワイ、貴方にはね」

教室のあちらこちらから、笑い声が沸き起こる。

そんな中、アルフとルーの視線は、教壇の傍らの一点、……躰を微かに前に屈め、教卓に縋るように佇むリオだけに注がれていた。

「リオを特別扱いしてるのは、あんただろう！ 教師のクセに、やってることと言ってることがむちゃくちゃなんだよ！」 噛み締めた奥歯の隙間から、苦々し気に、搾り出すように小声で呟く。「リオは、ただ、みんなに喜んでもらいたただけなのに……」

その隣では、ルーが、今にも倒れそうなリオの様子を、不安気にじっと見つめていた。

そんな二人の心配をよそに、リオは何とか、何時ものように模範実技を終了させ、これもまた何時ものように、先生の助手として教室内を回り始めた。

フラフラと覚束無い足取りで、それでも笑みを絶やすことなく周

困に声を掛け続ける。だが、体調不良は一目瞭然。足取りは次第に重くなり、その表情は、辛そうに、そして、微かに苦し気に歪んだ。もう、これ以上は見えていられない。後でリオに何と文句を言われようと、引きずってでも家に連れ帰る。そう心に決め、アルフが立ち上がった……。

その瞬間、彼の耳に、声高にリオを詰る言葉が飛び込んできた。

「お前なんか教えてもらうために、この学校に来てんじゃねえんだよ！ あっちへ行けよ！」

「お前みたいな奴が、何で学校に来る必要があんだよ。家でママに教えてもらってれば、立派な魔法遣い様になれるんだろう？」

「俺達と同じことやってたって、お前には、どうせ退屈なだけじゃないか。辞めちまえよ！ 辞めて、さっさとお家に帰れよ！」

声の主は間違い無く、クワイと、彼の仲間達。

根も葉もない中傷を吐く連中の顔に浮かぶニヤついた笑みと、リオの青白い哀し気な表情が、アルフの眼前で交差する……。

第7章 秘められし力 No.4

次の瞬間、彼の中で、今まで沸々と沸き上がっていた怒りが爆発した。これ以上、抑えることなど出来なかった。乱暴に級友を掻き分け、ツカツカとクワイへ近付く。人影の向こうに、鮮やかな葡萄色の巻き毛が見えた。クワイだ。両掌を硬く握り締め、壁となる最後の一人の軀を後方に押し退ける。

しかし、伸びたアルフの手が、クワイの襟首を捻り上げる直前、教室の前方で、突如、女生徒の甲高い悲鳴が上がった。

皆が一斉に顔を上げ、振り返り、そして、息を呑んだ。

教卓の上に置かれていたサリバン先生の教科書の中から、一頭の巨大な獅子が、頭から腰のあたりまで飛び出していたのだ。獅子は教室中を睨め付けるように見回し、低く咆哮した。

「みんな、落ち着いて！ 授業用の霊獣よ！ 大丈夫、大丈夫だから！」

サリバン先生は、周囲を宥めようと何度も叫んだ。だが、突然の出来事に自らも混乱し、パニックに陥った生徒達を静めるどころではなかった。

生徒達、特に女生徒達は、我先にと先生に縋り付く。泣き出す者すらいた。先生は、その子達の相手に忙殺され、獅子を消し去る呪文を唱えることも出来なかった。

アルフは、じっと獅子を凝視するリオの姿を眼の端に捉え、彼を庇おうと腕を伸ばした。けれど、教室の後方へと逃げる生徒達の波に押され、引きずられ、後退を余儀なくされた。

いっぽう、獅子は、徐々に本の中から軀を引きずり出し、遂には、全身を完全に実体化させた。教卓に四肢の爪を食い込ませ、混乱し泣き叫ぶ生徒達を蔑むように教室中をゆっくりと見渡す。

その時、突然、教室の中央付近から、奇妙な声が上がった。

口笛に似た鋭い声音。

何人かは、逃げる足を止め、きよろきよろと周囲を見回した。

けれど、それが、狩猟の際に発するヤナイ族の雄叫びであると気付く者は誰もいなかった。

その声が、獅子を興奮させた。獅子は生徒達の頭上を軽々と飛び越え、クワイの眼前に降り立った。

再び悲鳴が上がる。周辺の生徒達は、我先に、その場から少しでも遠ざかろうと、這いつくばるようにして四方へと散った。

そんな生徒達の波の中、クワイの側にいたリオは、何を思ったのか、一歩前に進み出ると、クワイを背に庇うように獅子の前に立ちはだかった。

「バカ野郎！ リオ、逃げる！ 早く逃げろ！」

遠くから、アルフの叫ぶ声が聞こえた。

獅子は低く咆吼しながら、クワイとリオににじり寄る。

リオは、獅子の行く手を阻もうと両手を広げた。だが、急な目眩に襲われ、その場に膝を付いた。

獅子は、蹲るリオには目もくれず、彼を押し退けるように前に出ると、眼前の赤毛の獲物へと躍り掛かった。

クワイは、咄嗟に懷から短剣を取り出し、振りかざそうとした。けれど、短剣の切っ先が煌くより早く、獅子に両肩を踏み付けられ、動きを封じられた。今にも襲い掛かろうと高く咆哮する獅子の躰の下、クワイが必死にもがく。

その時、額に脂汗を滲ませ、壊れた机に縋るように、リオが立ちあがった。彼はフラフラと歩を進め、無言のまま獅子の傍らに立つと、その首筋に触れた。

汗がリオの頬を伝い、顎から滴り落ちた。

それまでクワイに集中していた獅子が、邪魔者を確認するように首を擡げた。

「何やってんだよ！ 邪魔だよ！」

クワイが叫ぶ。

しかし、何を考えているのやら、リオはクワイに微かに微笑み掛

けると、獅子をじつと凝視した。獅子の首筋に添えた手は、決して離れなかった。

遂に、獅子は、獲物の狙いを変えた。躰ごとリオに向き直り、咆吼と共に、鋭い牙に縁取られた真つ赤な口を開けた。そのまま、リオに襲い掛かる……、かと思われた、次の瞬間、獅子の姿がスウツと薄くなり、次いで、掻き消すように、その場からいなくなった。

眼前で繰り広げられた光景に、教室中が一瞬、言葉を失った。

訳が解らず、キョロキョロと周囲を見回す者がいた。夢を見ていたのかと、頬つぺたを抓る者がいた。自分が無事であることを確認するように、両手で躰中を撫で回す者がいた。

全員が、狐に摘ままれたような表情で、今、この場で起きたことが夢では無く、しかし、その恐怖は既に完全に消え去ったのだということを確認し合う。そして、皆の心が安堵感で満たされた途端、誰からともなく歓声が上がリ、それは瞬く間に教室中を包み込んだ。沸き上がる歓声の中、暫し呆然としていたクワイが、自力で躰を起こし、今まで眼前にいた獅子の姿を探すように周囲を見回した。何もいなくなったことを確認し、ホツと胸を撫で下ろした途端、握り締めている短剣に気付き、慌てて懷に仕舞い込む。

「大丈夫？」

声を掛けられ、顔を上げたクワイの眼に映る、差し出された小さな手。クワイは、その手を掴もうと無意識に腕を伸ばしたが、その手の主がリオであることを認めた瞬間、それをピシリと払い退けた。「何だよ。俺は助けて欲しいなんて一言も言つてない。余計なこと、すんなよ」片腕を軸にして立ち上がり、服に付いた埃を払いながら、リオを睨み付ける。「それとも、何か？俺に礼を言えつてのか？生憎だったな。俺は、お前に助けてもらう必要なんか無かった。だから、礼なんか、絶対に言わない。言つて欲しけりゃ、他の奴等に頼むんだな」

投げ付けられた言葉。

リオは腕をぶらりと垂らし、淋し気にクワイを見つめた。

第7章 秘められし力 No.5

クワイが畳み掛けるように言葉を継ぐ。

「お偉い魔法遣い様の力を、俺達、下々の者に見せびらかすには、丁度いい事件だったよなあ。英雄にでもなったつもりか？ ええ？ さぞかし良い気分だろうよ」

明らかにクワイの言い掛かりだ。皆、解っていた。けれど、それを口に出し、リオを庇おうとする者は、誰もいなかった。

そして、謂われの無い罵声を浴びせ掛けられながらも、リオは、ただ黙って俯いているだけだった。その口許は、哀し気に歪んでいた。

アルフの怒りが頂点に達した。拳を硬く握りしめると、人込みを掻き分け、クワイに向かって突進した。

「てめえ……！」

だが、彼の怒りは、背後から響いたルーの叫び声によって消し飛んだ。

「アルフ！ リオが……。リオが！」

咄嗟に、アルフがリオを探す。

彼の瞳がリオの姿を捉えた時、既にリオの躰は傾き、足許から、ゆっくりと崩れていった。

「リオ！」

アルフが精一杯腕を伸ばす。

しかし、その指先を掠めて、リオの躰は床に崩れ落ちた。

アルフに続き、ルーがリオの許へと駆け寄る。

一瞬、何が起こったのか解らず、しんと静まり返った教室は、リオの側にいた一人の女生徒の悲鳴によって、再び騒然とした。

サリバン先生は、またもや、パニックを鎮めることに必死で、倒れた生徒を助けるどころではなかった。

リオを助け起こしたのはアルフ。続いて、ルーが駆け付けた。

「リオ！ しつかりしろ！ リオ！」

アルフはリオの頭を膝の上に抱え上げると、声を掛けながら、華奢な肩を上下に揺り動かした。頬を軽く叩く。けれど、何の反応も返ってはいない。

リオの額には珠のような脂汗が浮かび、それが流れて金色の髪を濡らしていった。顔色は真っ白で赤味が無く、何時もは薄紅色の唇が、青白く変色していた。

ルーは、リオとアルフの間に割って入り、咄嗟にリオの胸に耳を寄せた。規則正しい鼓動を確認し、ホッと安堵の溜息を吐く。

「大丈夫。気を失ってるだけだよ」

けれど、そんなルーの言葉さえ、混乱したアルフの耳には入らなかった。リオの肩を揺り動かし、何度も何度も声を掛ける。

「リオ！ リオ！ 眼を開けてくれよ！ リオ！」

アルフは必死で叫んだ。

（俺が護ってやるなんて偉そうなこと言いながら、リオがこんなになるまで、俺は何もしてやることが出来なかった。あの時、俺が、もっと強い口調でリオを止めていたら、こんなことにはならなかったのかもしれない。俺のせいだ！ 俺の……！）

自分の非力さを呪いながら、自分自身を責めながら、アルフは叫び続けた。

「リオ！ リオ！」

見かねたルーが必死にアルフの腕に縋る。

「アルフ！ リオは大丈夫！ 大丈夫だから、もうやめて！」

リオは、急に眼の前が真っ暗になり、アルフの呼ぶ声も、ルーの叫び声も、教室中のざわめきすら、徐々に遠ざかっていく感覚に身を委ねていた。

やがて、全てが闇に閉ざされ、意識は深淵へと落ちていった。

このまま、どこまでも落ちていってしまえばいい……。

意識の片隅に、そんなことを考えている誰かが居た。

第7章 秘められし力 No.6

「じゃあ、リオ君は、確かにお願いするわ。貴方達は心配しないで、きちんと授業を受けること。解った？」

ルーと二人、リオを運び込んだ保健室。

保健教諭のエリザベート先生は、丸顔に温かな微笑を浮かべ、たつぷりとした臍を屈めると、アルフとルーの肩を優しく叩いた。

だが、当の二人は、先生の言葉も上の空、心配そうに、先生の背後を覗き見ようと首を伸ばした。先生の臍の向こうには、リオが眠るベッドが垣間見えるのだ。

エリザベート先生は、大きな溜息を吐くと、二人の頭に手を乗せ、無理やり自分の方に顔を向けさせた。そして、彼等の目線の高さまで屈み込み、宥めるように、ゆっくりと言った。

「リオは大丈夫よ。彼が倒れた原因は、さっき、ちゃんと説明したでしょう？ 睡眠不足に、過度の疲労とストレスが加わったので、貧血を起こしたのよ。霊獣を消し去る魔法を使うには、かなりの体力を必要とするわ。リオは、確かに大変な能力の持ち主のようだけど、それでも、子供の臍では、その魔法が過度の負担になったでしょうね。でも、大丈夫。暫く眠れば、直ぐに良くなるはずだわ。今、彼に必要なのは、ゆっくりと眠ること。貴方達が側にいても、何もしてあげることが出来ないの。貴方達に出来ることは、今日の授業をしっかりと受け、下校時に迎えに来てあげること。それだよ。さあ、今度は解ってくれたかしら？」

エリザベート先生の言葉には反論の余地は無い。二人は渋々頷くと、名残惜し気に保健室を後にした。

教室へと向かう途中、突然、アルフが立ち止まった。握り拳で、

傍らの壁を思い切り叩く。

「クソ！」

驚き、そのさまを凝視するルー。

アルフは俯いたまま、吐き出すように言った。

「ちきしょう！俺がもつと気を付けてやっていれば……！」

悔し気に、ぎゅつと眼を瞑り、喉の奥から言葉を搾り出す。

ルーは、訳が解らず小首を傾げた。

「なんで？ どうして、そんなこと言うの？ 君は何も悪くないよ。リオが倒れたのは、霊獣を消したせいだって、先生、仰ってたじゃない。全然、君のせいなんかじゃないでしょう？」

アルフは強く首を横に振った。

「違うよ。普段のリオなら、あんなことくらいで倒れるはず無いんだ。睡眠不足だって、先生、言ってたじゃないか。やっぱり、あいつ、眠れないほど悩んでたんだよ。そんなことにさえ気付いてやれないで、俺は……」

再び、辛そうに顔を顰めて俯く。

ルーはアルフの手を取った。

「リオの次は、君が、そんなふうに自分を責めて、悔やんで、悩むの？ そんなの、もうやめようよ。君のせいなんかじゃないよ。誰のせいでもないんだよ」

ルーは小さく笑うと、鼻からずり落ちそうになった大きな丸眼鏡を指先で押し上げた。そして、廊下をゆっくりと、アルフを促すように歩き出す。

「この学校に入学する前から、リオってね、時々、とても哀しいこと言うんだ。自分なんか何の役にも立たない、とか、自分の罪は消えない、とか……」

「……どういう、意味だ？」

ルーと並んで歩きながら、アルフが眉根を寄せる。

ルーは首を横に振った。

「解らない。訊いても、何も教えてくれないから。でもね……」後

手に指を組み、足を蹴り出す。「リオってね、何時でも、誰かのために役に立ちたいって思ってるんだ。今日のことでって、きつとそう。先生や、みんなの役に立ちたかったんだよ。だから、頑張ってる張って、……ちよっと、頑張り過ぎちゃったんだよ。ボクは、そう思ってる」

アルフは唇を突き出し、不貞腐れた態で視線を天井へと向けた。取りあえずは、納得してくれたのだろう。ルーは思った。

二人並んで、教室へと続く廊下を歩き始める。

だが、十歩も進まないうちに、再びアルフが足を止めた。

「アルフ……？」

ルーが不安気に友の顔を覗き込む。

唇を噛み締めたアルフの漆黒の瞳には、静かな決心が漲っていた。「それでも、……あいつは許せない！」

咄嗟にルーはアルフの腕を掴もうとした。しかし……、遅かった。ルーの指先をすり抜け、アルフが駆け出す。

「どうしたの、アルフ？ 待って！」

けれど、その声に、駆け去るアルフを止める力は無かった。

廊下を曲がり、アルフの背中が消える。

ルーは迷わず教室へと向かった。

『あいつは許せない』

アルフは確かにそう言った。

今、あんなに苦々し気にアルフの口にする『あいつ』は、たった一人しかないはず。

……クワイ。

ペタペタと、それでも一生懸命に走りながら、ルーが大きな溜息を吐く。今にも教室で勃発するであろう騒ぎを思い浮かべたのだ。

「もう……。どうして、こんなに世話が焼けるかなあ」

彼のそんな呟きを聞くものは、廊下の柱に掘り込まれた鳩達だけだった。

第7章 秘められし力 No.7

基礎初等Aクラスの教室。重い扉の前。

アルフは、そこで一旦立ち止まり、大きく深呼吸してから、扉の取っ手に手を掛けた。その時、彼の耳に、声高に会話するクワイ達の声が飛び込んできた。

「リオってさ、何でも特別なんだよな」

「どうして、あんな奴が、この学校にいるんだよ。どうせ、上級魔法遣いの家のお坊ちゃんなんだろう？ 学校になんか来る必要ないじゃないか」

「上級魔法遣いのお坊ちゃんでも、アスナンみたいに出来が悪い奴なら、まだ可愛い気があるってのにさ」

「出来損ないポポラか。そりゃそうだ」

「ひょっとしたら、さっきの靈獣だって、あいつの策略かもな。自分が良いカツコするためのさ」

「あいつがいると、俺達みんな、出来損ないみたいに見えちゃうんだよな」

「見せ付きたいんじゃないの？ 自分は何でも出来るんだって。それで、家に帰って、パパやママに自慢してんだよ。『他の奴等は何にも出来ないんだよ。僕、困っちゃう』、なんてさ」

沸き起こる笑い声。

しかし、次の瞬間には、机と人がぶつかり合い、床に叩き付けられ、崩れ落ちる鈍い雑音に変わった。

クワイは、今、自分の身に何が起こったのか解らなかった。突然、頬を襲った激痛に顔を顰め、切れた唇の端から流れる血を手の甲で拭い、顔を上げる。

眼前には、拳を握り締め、冷ややかに自分を見下ろすアルフの姿があった。険しい形相に、その場にいた誰も、止めに入ることなど出来はしなかった。

「何すん……」

「リオが、お前に何をした」

クワイの抗議の言葉は、怒気をはらんだアルフの低い声に掻き消された。

「さっきのことで、リオに感謝しろなんて、俺は言わない。けど、お前らが寄って集ってリオ独りを虐める理由だけは、是非とも聞かせてもらいたいもんだな」

アルフは、養成学校の新入生の中でも、年齢的にはリオやルーと共に最も幼い。しかし、既に変声期を終えた彼の声音には、その場にいた全員を完全に威圧するに充分の迫力があつた。

その声が、沸き上がる怒りによって徐々に強まる。

「お前等は、いつたい、リオの何が気に入らないんだ。言いたいことがあるなら、はっきり言えよ。リオが、お前達に何をした？ リオが、倒れるまで悩まなければならぬほどのことを、あいつは、お前達に何かしたのかよ！ 何かあるなら、俺が訊いてやる！ 今、この場で、俺の前で、はっきり言ってみろよ！」

アルフの見幕に気圧され、教室内に気まずい沈黙が流れた。

やがて、沈黙に耐え切れなくなったのか、クワイの仲間のサムエルが、おずおずと話し出した。

「……だつてさ、あいつばかり、何時も何時も、先生に鼻厘されてるじゃないか。あいつがいるから、俺達が落ちこぼれみたいに見えるんだよ」

その言葉に勇気付けられ、クワイが痛む頬を押さえながら立ち上がり、ここぞとばかりに、今まで心の中に蟠っていた不満を爆発させた。

「そうだよ！ あんな奴、邪魔なんだよ！ あいつだけじゃないぜ！ お前等だつて同じだ！ どうせ、魔法遣いの家の子なんだろう。何で学校になんか来るんだよ！ わざわざ勉強なんかしなくたって、魔法、使えるんだろう？ 魔法遣いになれるんだろう？ 俺達は、ここに来なければ魔法遣いになれないから来てるんだ。お前等なん

か、親に教わってりやいいんだ！ 学校になんか来んなよ！ 邪魔なんだよ！」

クワイは、自分の行為を正当化するように、声高に不平不満を並べ立てた。

アルフは、自分よりも頭半分背の高いクワイを、じつと凝視していたが、彼の話が終わると大きく溜息を吐いた。敢えて冷静に話をしようと、ゆっくりと口を開く。

「なあ、クワイ。俺はずっと、周りの大人がどう言おうと、お前の一族は誇り高き民族だと思ってた。少しだけど、尊敬もしてた。ホントだぜ」だが、次第に湧き上がる感情を抑えることは出来なかった。「けどな、もし、その『誇り』ってヤツが、自分勝手な、他人を思い遣ることも出来ないようなものなら、俺は軽蔑するぞ！ そんな訳の解らない理由で、人の心を傷付けても、……踏みにしても、神官なら許されるってんなら、俺は、……俺はヤナイを軽蔑するぞ！」

「アルフ、ダメ……！」

その時、やっとその場に駆け付けたルー。怒りに任せ、アルフが思わず口にしてしまった言葉を慌てて制した。けれど、既に遅かった。『ヤナイ』という言葉に呼応するように、教室中がざわめき始めたのだ。

「ヤナイって……？」

「クワイって、ヤナイ族なの？」

「何だよ。俺、知らないで、あいつと喋ってたよ」

「嫌だ、どうしよう……」

第7章 秘められし力 No.8

教室中がひそひそと言葉を交し合う。それまでクワイの側にいた取り巻き連中でさえ、一步後後退った。クワイの周りに、ぽっかりと穴が開いた。

カツと顔を赤くし、周囲を見回すクワイ。その顔は、今にも泣き出しそうに歪んでいた。震える唇から、微かに言葉が漏れる。

「お前等……」

「何なんだよ、いったい！ どういうことだよ！」

弱々しいクワイの言葉は、またしても、アルフによって遮られた。アルフは驚きと怒りに眼を見開き、教室中を見回した。その声は、クワイ以上の憤りを含んでいた。

「お前等、その態度は何だよ！ サムエル！ カザン！ ライモ！ お前等、クワイの友達じゃないのか？ 何だよ。こいつがヤナイだからって、掌を返したような、その態度は何だよ！ 何だってんだよ！」

アルフの怒りは、止まらなかった。

「人種や年齢、性別なんて、この学校では関係ない。みんな同じ一個の命だって、入学式の日校長先生が言ってただろう？ それなのに、今のお前等は何だよ！ お前等みんな、そんなに偉いのか？ ヤナイより偉いのかよ！ 今まで、クワイと一緒にあって、寄って集ってリオを虐めておいて、今後はクワイの番だってのか？ 理由は何だよ！ 皆がそうするからか？ お前等には、自分の意志つてもんが無いのか？ 馬鹿馬鹿しい！ 馬鹿馬鹿しすぎるよ！ そんなふうにはしか人を見られないのなら、人の優劣が種族で決まるなんて思ってるんなら、そんな奢った連中なら、お前等みんな、魔法遣いになる資格なんか無い！ 辞めちまえよ！」

「アルフ、もうやめて！」

ルーが背後からアルフにしがみ付く。

強く腕を掴まれ、やっと、アルフは我に返った。気付けば、教室中が重苦しい雰囲気になり込んでいる。

その場にいる殆どの者が、それを態度に表したか、表さなかったかは別にして、リオに嫉妬心を抱いていた。そして今、クワイがヤナイ族であると知った瞬間、まるで汚らしい物を嫌うように排除しようとした。全ては、心の奥底にあるドロドロとした傲慢、エゴから生まれた感情。それを、アルフの言葉によって白日の下に晒されたのだ。恥ずかしさに、誰も顔を上げることすら出来なかった。気まずい空気が流れた。

アルフは肩で息をしながら、一渡り室内を見渡した後、クワイに眼を留めた。彼は床に座り込み、唇を噛み締め俯いている。アルフは、気まずげに頭を掻き、言った。

「クワイ、すまん。お前のこと、こんなふうに言うつもりなんか無かった。そのことは謝る。いくらでも謝る」

ペコリと頭を下げる。しかし、何か言いかけたクワイを遮り、言葉を継ぐ。

「でも、俺がしたことと、お前がしたことは別だ。お前がリオにしてきたこと、俺は、それだけは絶対に許せない。リオは、きつと魔法遣いの家の子だ、だからリオが憎かった。……そう言ったよな。そんな下らない理由で、お前はリオを嫉んでたのか？ そんな自分勝手な嫉妬で、お前はリオを、あそこまで追い込んだのか？」

「下らなくなんて、無い……」

クワイが、噛み締めた奥歯の隙間から搾り出すように呟く。

しかし、弱々しい抗議の声では、アルフの怒りを静めることなど出来はしなかった。アルフは右手の握り拳で傍らの机を思い切り叩いた。

「いいや、下らない。下らないんだよ。理由を教えてやるよ。リオは、魔法遣いの子なんかじゃない。もちろん俺も、ここにいるルーも同じだ。そうさ、俺達は特別なんだ。俺達はな……」そこで一瞬、続く言葉を口にするのを躊躇ったが、沸き起こる怒りは抑えられ

なかった。「俺達三人には、親がないんだ。捨て子なんだよ。家なんか無いんだ。お前等がリオを、いや、リオだけじゃない、俺達を特別だって言う理由には、これで充分か？　どうなんだよ、充分だろう！」

誰も予想だになかったアルフの告白。

クワイは弾かれたように顔を上げ、驚きも露わにアルフを凝視した。

クワイだけではない。その場の全員が、啞然とし、息を呑んだ。

「親がないって、……嘘、だろう……？　そんなこと、あるわけ……」

誰のものとも知れない、囁きに近い声が聞こえた。

「こんなこと、嘘吐いて、どうすんだよ！」

アルフが吐き捨てる。

それ以上、誰も何も言えなかった。

無言で俯くクワイ達に、アルフが畳み掛けるように言う。

「親がないことが、そんなに特別か！　お前らに嫉まれるほど特別なことなのかよ！　冗談じゃない！　お前等の勝手な思い込みで、リオがどれほど傷付いたか、お前等に解るのか？　なあ、解るのかよ！」

声を荒げ、怒りをぶつけるアルフの腕に、ルーの手がそつと触れた。

振り返るアルフ。

ルーが小さく首を横に振る。

怒りは収まらなかったが、アルフは軽く舌打ちすると、素直に、その場をルーに譲った。これ以上、何を言っても、後は自分の愚痴にしかならないことを、アルフは弁えていた。

第7章 秘められし力 No.9

ルーは、アルフとは対照的に、教室中の全員に静かに語り掛けた。しかし、その顔に、何時もの人懐っこい微笑みは微塵も無かった。

「ボクはね、誰もが、全ての人と仲良くなれるなんて、思っただよ。誰にだって、好きな人、嫌いな人がいるのは仕方の無いことだと思う。君達がリオのこと嫌いなら、それでもいいんだ。ちゃんとした理由があるのなら、嫌いでも構わないよ。でもね、君達はリオの何を知ってるの？ リオの何を見たの？ リオの何を訊いたの？ リオは、君達と何も変わらない。特別なことなんか、何にもないんだよ。勝手にリオを特別にしたのは、君達でしよう？」

淡々としたルーの言葉は、アルフの叫び以上に、皆の心に響いた。「リオはね、特別になんか、なりたくなかったんだよ。ただ、自分に出来ることを精一杯やれば、何時かきつと、君達が解ってくれる、喜んでくれるって思っで、みんなの役に立ってるんだって、そう信じて、頑張ってきたんだ。そのことだけは、解ってよ。リオはね、本当は、勉強なんかより、かくれんぼの方が好きだよ。教室の中にいるより、森の中で駆けっこしている方が、ずっと好きだよ。……独りぼっちより、友達と一緒にいることが大好きなんだよ。ボク達と何も変わらない、唯の淋しがりやなんだ。だからもう、リオを特別になんかしないでよ」

教室中がシンとする。

ルーは、気恥ずかしげに頭を掻くと、アルフの腕を掴んで引っ張った。

「アルフ、もう行こう。今日の君、変だよ。こんなに苛々してたら、授業なんか受けたってダメだ。……何処かでリオを待ってしようよ。ね？」

アルフが無言で頷く。しかし、教室を出る直前、肩越しに振り返り、念を押すように一言低く言った。

「今度、リオを傷付けたら、そんなもんじゃ済まさない。覚えとけよ」

クワイは、赤く腫れた頬に軽く触れ、痛みに顔を歪めた。

アルフとルーが、揃って教室を出ていく。

取りあえず、騒ぎは収まった。

生徒達は、次々に席へと戻り、サリバン先生を待つ。もう、そこには、何時もと同じ日常の時間が流れ始めていた。ただ独り、クワイを除いては……。

彼は、アルフとルーが出て行った扉を無言で見つめ続けた。

程なくして、サリバン先生が教室に戻ってきた。彼女は、今日の騒ぎの状況を説明するために、職員室へ行っていたのだ。

授業が再開される。

実技に打ち込む生徒達の中、クワイは静かに席を立ち、そっと外へと出て行った。

校庭の隅に大枝を茂らせる檜の木。その根許で繰り返される大きな溜息。溜息の主は、他ならぬアルフだ。先程の勢いは何処へやら、膝を抱え、幹に寄り掛かって、深い溜息を吐く。もう、これが何度目か、本人でさえ解らないほどだ。

「……リオに、怒られる……」

救いを求める悲痛な呟き。

しかし、その隣で、やはり同じように膝を抱えるルーは、空を見上げ、まるで他人事のように答える。

「うん、怒るだろうねえ」

「……どうなると思う？」

横眼でルーの顔を覗き込む。

ルーは相変わらず素知らぬ振りだ。

「知らない。ボク、リオに怒られたことないもん」

「そうだよな。俺もないし……」

「でも、普段ニコニコしてる優しそうな人ほど、怒ると怖いっていうよねえ」

無邪気な口調だが、この場合、余計に真実味が増す。

アルフは再び大きな溜息を吐いた。

「一週間、口利いてくれないとか……」

「そうかもねえ」

「食事、俺の分だけ、ないとか？」

「あり得る」うんうんと頷く。

「……嫌われる、かな……？」

完全に音を上げた態のアルフ。

ルーは思わず吹き出してしまった。

「……なんだよ」濡羽色の前髪の内から覗く、恨めし気な視線。

「初めて見た。こんなに落ち込んだアルフ」

「……からかうなら、後にしてくれよ。今は、応えれやれる気分じゃない」

またもや溜息。

さすがに心配になる。これ以上、無視を決め込むことは、ルーには出来なかった。

「……ホントのほんとに落ち込んでるんだねえ」

アルフは項垂れたまま答えすらない。

そろそろ許してやつても良い頃かな。そんな思いが笑みとなる。

「大丈夫だよ。リオは絶対に怒ったりしないよ」

しかし、今回は、そんな言葉くらいではアルフは立ち直れなかった。

「だって、あいつが一番嫌いな遣り方だぞ。生まれとか、血筋とか、自分の努力じゃどうしようもないことで攻めるのって……」

「解ってるなら、やめればよかったのに」

「……もう、遅いよ」

「……だねえ」

第7章 秘められし力 No.10

アルフにつられ、ルーも一緒に溜息を吐く。そんな自分に気付き、首を横に振る。自分が落ち込む必要など無いではないか。己を励ます。

「でも、本当に、リオは怒らないと思うよ」

「なんでだよ？」なぜか、恨めしげな視線。

大抵の者なら恐れ慄くであろう。けれど、それすらルーには何の威力も無い。ニコニコと笑って言う。

「君が本当に心配してくれてるって解るもの。それに……」突如、口をへの字に曲げる。「今回のことは、リオが悪いよ！」

ルーにしては珍しく、何時もより口調が厳しい。

逆にアルフの方が心配そうに、視線で問い掛ける。

ルーは、じつと正面を見つめたまま、背筋を伸ばして言葉を継いだ。それは、彼が眼の前に描き出したリオの影に対して言っているようだった。

「リオが何も言ってくれないからいけないんだよ。何も言ってくれないから、ボク等だって、あれこれ自分で想像して、余計に心配しちゃったんだ。ボク等、一緒に住む時、ちゃんと約束したでしょう、隠し事はしないって。なのに、先に約束破ったのは、リオの方だよ。リオが悪いよ」

だが、怒ったようなルーの表情は、直ぐに何時もの笑みに変わる。抱えた膝の上から、ニコニコとした笑みをアルフに投げ掛ける。

「リオが君を怒ったら、ボクがそう言って助けてあげる。ね？ だから元気出してよ」

頼りになるような、ならないような、微妙な助っ人。何と答えてよいものか、ほんの少し困惑する。それでも、そう言ってくれる彼の気持ちが嬉しくて、小さく笑う。

それに応えて、ルーもニコニコと笑った。

二人並んで、暫し、ボンヤリと空を見上げる。

ゆつくりと流れていく雲。それを横切り、飛び交う小鳥達。頬を撫でる風が、心無しか、ひんやりと感じられる。

だが、抜けるような空の蒼さは、アルフにリオの姿を思い出させた。一つ大きく息を吐き、肩を落とす。

「……リオが俺達に何も言ってくれないって、……どうしてだと思っ？」

今は保健室で眠っているであろうリオを心配する気持ちは、ルーとて同じだ。問い掛けられ、小さく首を傾げる。

「それは……、解ないけど、多分、よっぽど辛いことが、あったとか……」

「そうだよな。うん……」

そう答え、アルフは納得した態で深く頷いた。その後、暫く考え込んでいたかと思うと、顔を上げ、ぼんやりと呟く。

「やつぱり、……知ってる人に訊くのが一番手っ取り早いよな」

「え？」ルーが訝し気にアルフを見る。

アルフは、まるで弾かれたように、今の今まで木の幹に凭れかかっていた躰を起こし、片膝を立てた。

「校長先生に訊いてくる！」

「アルフ？」

「だって、リオは、校長先生の用事で何処かへ出掛けてから、急に元気が無くなったんだ。その場所で、……俺は絶対、ヤナイ族だと思ってるけど、そこで何かあったんだよ。リオは戻ってきてから校長先生に会いに行ってる。きっと、校長先生には、そこであつたことを話してるはずなんだ。だったら、リオが俺達に話してくれない以上、校長先生に訊くしかないよ。それが、リオを護ってやる一番の近道だ！」

ルーの制止も訊かず、アルフは校長室に向かって駆け出した。

本気のアルフに追い付くのは、到底無理だ。

それでも、ルーは素早く飛び起き、アルフが向かったのとは別の

方向に向かって走り出した。

「もう……。アルのバカぁ……」

溜息と共に呟く。

一生懸命走るルーの背中を、先程まで彼等が居た檜の木の子に停まる小鳥達が、楽し気に見送った。

第7章 秘められし力 No.11

真っ白なベッドの中で、リオは目覚めた。

一瞬、自分が今いる場所が何処なのか解らず、頭だけ動かして周囲を見回す。

真っ白な天井。真っ白なカーテン。真っ白な壁……。そして、やっと気付く。そこは保健室のベッドの中だった。

（そうだ。僕、教室で倒れたんだ……）

リオは、急に強い脱力感に襲われ、枕に頭を沈めた。ぼんやりと眼を開けていると、爽やかな微風がリオの頬を掠めて流れ込んでくる。窓が開け放たれているのだ。

暫くの間、窓と壁とのコントラストを見つめていた。真っ白な部屋に唯一色を添える窓。それは、小さな空間に独り取り残されたりオと、広い外界とを繋ぐ唯一の接点のように思えた。

窓越しに伸びる木の枝は、外から差し込む眩しい光からリオを護ろうとするかの如く葉を茂らせている。ふと見ると、そこに一羽の真っ白な小鳥が停まっていた。小鳥は小首を傾げながら、じつとこちらを見ている。リオは気怠さを振り払うように上半身を起こし、手を差し出しながら小鳥に声を掛けた。

「おいで……」

リオの言葉を理解したのか、小鳥は導かれるままに羽ばたき、窓を通り抜けた。そして、真っ白なシーツに包まれた膝の上に舞い降りると、小首を傾げてリオの瞳を覗き込んだ。愛くるしい仕草に惹き込まれるようにリオが小さく微笑む。

「ダメだね、僕は。全然気にしてないつもりなのに、どうしても忘れことが出来ないや。僕が、なぜ墮とされたのか、……そんなこと、今の僕には関係無いはずなのにね……」突然、瞳が涙で潤む。「僕は、生まれてきちゃ、いけなかったのかな？僕は、誰かの役に立ちただけなのに……。この学校に入って、一生懸命勉強すれば、

今度こそ、……今度こそ、僕だって、誰かの役に立てるかもしれないって、思ってたのに。僕は、生まれてきちゃいけない命だったから……、だから、誰かを傷付けることしか出来ないのかな？ 何時も、何時も……」

硬く閉じた瞼から、涙が一滴、頬を伝い零れ落ちた。膝を抱え、顔を埋める。

小鳥は、驚いたように羽ばたくと、窓を通り抜けて飛び去っていった。

喉の奥から言葉を搾り出すリオ。まるで、そうすることによって、心の奥底に湧き上がる哀しみ全てを吐き出してしまえると信じているかのように……。

「僕、どうしたらいいのか、もう解らないよ。ねえ、教えてよ。どうしたらいいの？ もう、嫌だよ……」

その時、静寂に包まれた室内に、扉をノックする音が響いた。エリザベート先生は不在のようで、応える声は無い。扉が開く音に続き、こちらに近付いてくる足音。

リオは慌てて顔を上げ、両手で眼の周りを拭うと、何事もなかったかのような表情を創った。

「リオ、……寝てるのか？」

不意に名を呼ばれる。

声の方向を見上げたリオ。ベッドの周囲を囲うカーテン越しに、見慣れた葡萄色の巻き毛。クワイだ。彼はカーテンを開け、俯きがちにリオを見下ろしている。

リオの顔に、一瞬、困惑の表情が浮かぶ。だが、それは直ぐに、少し強張った微笑みに変わった。

「……僕に、何か？」

クワイは、おずおずと、照れくさそうに小声で言った。

「ごめん、起こして。どうしても、話したいことが、あって……」

それきり、足許に視線を落とし、口の中で何やらブツブツと呟く。その声は、あまりに小さくて、リオには聞き取れなかった。何時

ものクワイらしからぬ様子。訳が解らず、リオは小首を傾げたが、思い出したように眼を見開き、こちらもまた、少し緊張気味に呟いた。

「さつきは、……ありがとう」

予想外の言葉。クワイは驚きも露に顔を上げた。

リオは小さく微笑み、俯いたまま続けて言った。

「さつき、僕のこと、庇おうとしてくれたでしょう？ 君は僕を嫌ってるはずなのに、それでも心配してくれるなんて、正直、少し驚いた。でも、……嬉しかったんだ。ありがとう」

狐に摘まれたような表情で立ち尽くすクワイ。それが解って、リオは直ぐに助け舟を出した。

「危ない、早く逃げろ……って、君の声が聞こえたよ」

「そりゃ、アルフの声だろう。俺は、そんなこと言ってない。俺は、邪魔だって言ったんだ」

クワイは横を向き、乱暴に言い放った。

第7章 秘められし力 No.12

リオが小首を傾げる。

「アルフの声に混じって、君の声、確かに聞こえたんだけど……。じゃあ、あれは、君の心の声だったのかな」

少し哀し気に微笑み、そのまま黙り込むリオ。

クワイは己の不甲斐なさに唇を噛んだ。

再びリオを傷付けるために、独り、この場所に來たわけではない。自分よりも遙かに弱い相手を追い詰め、苦しめた自分自身が許せなかった。その理由の女々しさに、我が事ながら腹が立ったのだ。彼に許しを請い、友達的一端に加えてもらおうなどとは思っていないが、過去の卑怯な自分とは決別したかった。ヤナイの男としての誇りを取り戻したかった。そのためには、このまま知らん振りを決め込んではいけない。自分の非を素直に認め、一言、詫びを言うことこそ、男らしさだ。そう思って、嫌がる足を無理矢理、この部屋まで運んだのだ。

暫くの間、言葉を探すように唇を動かしていたクワイは、やがて両手を握り締め、眼をぎゅっと瞑って口を開いた。

「俺……、俺は、この学校、卒業しなきゃいけないんだ、絶対に、卒業しなきゃならないんだ。なのに、全然上手くいかなくて、だから、悔しくて……。正直、お前のこと妬んだ。……ごめん！」

言うなり、勢いよく頭を下げる。暫くして顔を上げた後も、ぎゅっと眼を瞑ったまま、その場に仁王立ちを続けた。

思いも寄らないクワイの行動。リオも、さすがに面食らい、眼を見開いたが、少し戸惑いながら周りをキョロキョロと見回すと、ベツドの上に膝を着いて立った。

「チョット、ごめんね」

断りを言い、クワイの額に手を翳す。

クワイは、その間も硬く眼を瞑っていたが、リオの指先が額に触

れた瞬間、自然と瞼が開いた。眼の前に、微笑む深い碧の瞳があった。

「やっぱり、君の中には大いなる能力が眠っている。今はまだ、君が気付いていないだけ。何か……、小さくていい、何か切っ掛けさえあれば、必ず目覚める能力だよ。君はきつと、立派な魔法遣いに……ううん、立派なヤナイの神官になる。僕なんかを妬む必要なんか、全然無いよ」

リオは言った。

それは、クワイの耳に、不思議なほど心地良く響いた。

魅入られたように碧の瞳を見つめるクワイ。すると、今まで彼の心に蓋のように覆い被さっていたゴツゴツとした大きな塊が、突然、溶けるように消え去っていった。そして、リオの指が額から離れた瞬間、眼前の少年に、自分の心の内、全てを話してしまいたい、話して、今までの行い全てに許しを請いたいと願う気持ちたちが沸々と湧き出してきたのだ。抑えることの出来ない衝動。クワイは両手を硬く握り締めると、思いを吐き出した。

「俺……、ホントは俺、こんな学校、来たく無かったんだ！」

突然の告白。

リオの澄んだ瞳は、とても静かだった。

クワイは続けた。

「そりゃあ、大僧正様には懂れたさ。でも、それは所詮、他人事でしかなくて……。俺は村の中で、何時までも、父さんや母さん、仲間達と一緒に暮らしていられれば、それでよかったんだ。それ以上のことなんか、何も望んでなかった。なのに、去年の矢祭りの時に、突然、大僧正様が俺の前に来て、俺を肩に担ぎ上げて仰ったんだ。俺が次の神の子だって……」

「神の子……って？」リオが問う。

肩の力が少し抜けたのか、クワイの唇を、言葉がスラスラと通り抜けていく。その表情に、これまでリオに向けられていた憎しみや妬みは微塵もなかった。

「神の子ってのは、次の神官になる子供のことさ。村では、そう呼んでるんだ。神の子は、大僧正様の後を継ぐため、この学校に入つて、勉強して、卒業しなけりやならないんだ。それが村の決まりなんだ」

「……そう」

納得の態で微笑むリオ。

その笑みに気を良くし、クワイは、傍らに置かれていた椅子を引き寄せ、腰を下ろして話しを続けた。

「正直、ビックリしたよ。だって、俺、魔法なんて何一つ出来なかったもんな。毎日毎日、弓の練習ばかりしてたからさ。なのに、大僧正様がそう仰った途端、急に周りが騒ぎ出して……。そりゃ、神の子に選ばれた時、悪い気はしなかった。俺は他の奴等とは違う。選ばれたんだって、そんな気がして。でも……」表情が曇る。「でも、いざ学校に入ってみると、周りみんな、凄い奴等ばかりでさ……。俺なんか、課題さえ満足にこなせないってのに……」

クワイが不意に黙り込む。

リオは先を促すように話し掛けた。

「……学校にいるの、嫌なの？ それなら、どうしてそう言わないの？」

「言えるわけ無いだろう、そんなこと！」

心の奥に隠してきた思いを言い当てられ、クワイはカッとした。

八つ当たりだと解ってはいても、気持ちの高ぶりを抑えることが出来なかった。

第7章 秘められし力 No.13

「大僧正様は、ご高齢なんだぜ。次の神の子が現れるのを、村のみんなが、どんなに心待ちにしていたか。だから、俺は……！」

「だから君は、嫌々ながら此処に来た。そして、やっぱり今でも、嫌。……そういうことなんだね？」

淡々としたリオの言葉。

否定したいのに、なぜか出来ない。そんな自分が情けなくて、クワイは俯いたまま、膝の上に置いた掌をギュツと握り締めた。

リオは、暫し、そんなクワイをじっと見ていたが、やがて、視線を落とし、瞳を閉じた。

「……なら、辞めたらいい」

突然の冷たい一言。

俄かに、クワイの表情が強張る。

「何だと……」

リオは顔色一つ変えず言葉を継いだ。

「やる気の無い君が次の神官になって、それで、君の一族は幸せになれるの？ やる気の無い君が占う未来が、本当に信じられるの？」

「お前……！」

クワイは椅子を蹴って立ち上がった。

「お前に何が解る！ 一族のことなんか……、俺の気持ちなんか、何も解らないくせに！」

怒りに任せて叫ぶ。

その瞬間、リオの視線が真っ直ぐにクワイを捉えた。深い碧の瞳。見つめられた途端、怒りが、フツと遠退く。不思議な感覚だった。

リオの声音が、優しくクワイを包む。

「そうだね。確かに、僕は部外者だ。君達一族の掟や仕来りは何も解らない。でもね、君の両肩に、君の一族の運命が懸かっているんだということは、解るつもりだよ。だからこそ、やる気が無いなら、

やるべきじゃない。そして、この学校にいる以上、やる気が無いなんて、口にするべきじゃない。そんなの、君を送り出し、君の帰りを心待ちにしてくれている人達に対して失礼だ」

その言葉は、リオ自身の耳にも響き、心深くに染み込

瞬間、リオは、ハツとした。

今の言葉は、自分自身にこそ向けられるべきもの。自分自身にこそ言い聞かせるべき叱咤ではないか？

己の過去を知らされて、なお、この地に留まることを望んだのは、リオ自身。誰に強制されたわけでもない、自ら選んだ、自らの道。そのはずだった。

それなのに、何時の間にか、自分自身すら信じられなくなっていた。何も知らない、知るはずもない、遠い過去の幻影に囚われ、くよくよと悩み、最愛の友にまで心配を掛けた。

強く首を横に振る。自分の愚かさに、苦笑いが漏れる。

過去を知ったから何だというのだ。過ぎてしまった過去の出来事が何だというのだ。自分が知らぬこと、過ぎ去った時間に囚われ、今、この時を無為に過ごすことほど、愚かなことはない。

自分が生きていく場所は此処。此処しかない。そう決めたのは自分自身。そして、この地で生きていく『リオ』としての自分がしなければならぬことは、立派な魔法遣いになること。それ以外、何があるというのだ？ 自分は、その夢のために全てを捧げたはず。だから、今、此処にいるはず。

この思いは、自分の知らない過去の自分に左右されてしまうほど、簡単な想いだっただのか？

いや、そうじゃない。そんなこと、あるはずがない。

今日までの卑屈な自分の姿が、眼前に佇む葡萄色の髪の少年に重なる。

リオは、視線を窓の外に移し、静かに言葉を紡いだ。心地良い風が窓を擦り抜け、リオとクワイの間を通り抜けていく。

「ホントは、僕、こんな偉そうなこと、君に言っではいけないんだ。

だって、正直、僕自身、今の今まで、自信を失い掛けていたんだもの」

リオが柔らかく微笑む。それは、先程までの少し固い笑みとは、明らかに違っていた。

「でもね、僕には夢がある。掛け替えのない友達がいる。アルフとルーは、何時だって言ってくれるんだ。たとえ百人の人が僕を嫌いでも、必要としてくれなくても、二人は、……彼等だけは、僕を好きでいてくれるって。だから、自分を信じろって。なのに、欲張りな僕は、それでも悩んで、大切な友達すら不幸にしまいかけた。ホントは、それだけで充分のはずなのに。……ううん。他には何もいらないはずなのにね。……ありがとう。君のお陰で眼が覚めたよ。今なら、僕、自信を持って言える。アルフとルーが僕を好きでいてくれるなら、僕は、それだけで充分幸せだって。だから、他の誰も僕を必要としてくれなくても、僕は、僕を信じて、僕が正しいと思っただとおりにしてみようって。だって、僕が僕を信じてあげなかったら、僕自身が、あんまり可哀想だろう？ 信じてくれる二人にも失礼だよ。そう思ったら、急に気持ちが悪くなった。だから、君も信じてみようよ、君の力。大僧正様の仰る、君の内に秘められた大いなる能力」

リオの言葉は、クワイの心の奥底まで響いた。信じて、いいんじゃないのか？ いや、信じたい。信じれば、今、心を埋め尽くしている辛い蟠りは、きつと消えて無くなるに違いない。そんな思いが心の奥底から沸き上がる。そして、その思いに抗うことは出来なかった。

クワイは、気まづげに横を向くと、何時もの憎まれ口調で言ったけれど、その声音は、何処かしら優しくなった。

「……お前、なんで俺に能力が有るなんて解るんだよ。どうせ……、出任せなんだろう？」

リオがニツコリと笑う。まるで、クワイの心を全て見透かしているかのよう。

「嘘なんかじゃないよ。これが、今の僕に出来る一番の『魔法』なんだから」笑みが、不意に苦笑いに変わる。「……でも、『どうしても、そんなことが出来るんだ』なんて、訊かないでよね。だって、僕は……」

言いかけて、突如、口籠もる。

第7章 秘められし力 No.14

クワイがポツリと言った。

「……聞いた」

「え？」

「お前達の生い立ち……」

一瞬、青ざめるリオ。

それを眼の端に捉えたクワイは、視線を外して窓の外を見つめた。
「アルフから聞いたよ。全部」

「……そう」安堵の溜息。

それを、クワイは躊躇いと受け取った。突然、深々と頭を下げる。
「ごめん！」

それきり頭を上げること無く黙り込んでしまった。

リオは、暫し、そんなクワイを不思議そうに見ていたが、微笑みながら、そつと訊いた。

「なぜ、『ごめん』なの？ どうして、君が僕に謝るの？」

顔を上げたクワイの表情から、彼の戸惑いが手に取るように解った。

「だってさ……」

「同情なら、いらない」クワイの言葉を遮り、リオは言った。「気を悪くしないでね。でも、ホントに、僕は同情なんかいららないんだよ」

クワイは、何か言わなければと、唇をパクパクと動かしたが、適当な言葉は見付からなかった。

それには気付かぬ振りで、リオが言葉を継ぐ。

「だって、僕には、育ててくれた先生がいる。掛け替えの無い友達がいる。だから、今、僕は、本当に幸せなんだ。同情してもらう必要なんて、全然無いんだよ」

一つ小さく息を吐き、瞳を閉じる。

（知らなくていい過去があるなんて、……思いもしなかった）

でも、知ったからといって時の流れが変わるわけじゃない。ならば、くよくよ悩むよりも、より良い流れを創ればいいんだ。良くも悪くも、それを変えられるのは自分自身だけなのだから。

今は、なんの気負いも無しに、心から、そう思えた。

「過去は、所詮、過去でしかない。過ぎ去った時間でしかない。自分の力が及ばない時間なら尚更だよ。今の僕がどう思おうと、後悔すら出来ないんだ。だって、あの時、僕は僕自身をどうすることも出来なかったんだから。それなら、……悔やんでもしょうがないこれからのために、より良く生きていくために、過去は過去として消化するんだ。今の僕に出来るのは、それだけだから。そして、それでいいと思う。だって……、今、僕は幸せだから。本当に幸せだと、心の底から思えるから……」

それは全て、自分自身に言い聞かせる言葉。

瞼を開き、真っ直ぐにクワイを見る。

「僕は今、とても幸せだよ。だから、いらないんだ、同情なんて」
クワイは、穏やかなリオの瞳の奥底に、強い意志の力を見て取った。敵わない。そう思った。眼の前の、ひ弱そうな少年は、自分の運命を正面から見据え、勇敢に立ち向かおうとしている。それに比べ、自分は、なんと愚かしいことで悩み、もがき、他人まで傷付けたことか。

突然、猛烈な恥ずかしさに襲われる。頬がカツと赤くなるのが自分でも解った。それを隠すように俯いた。

「お前、……強いな。見掛けは、てんで頼り無さそうなのにさ」

「そう？」

皮肉を込めたはずの言葉は、しかし、楽し気なリオの笑みの前で、その威力を完全に失った。

気まずさに頭を掻くクワイに、リオは、これまで彼に見せたことの無い、明るい笑顔を向けた。

「もしも、僕が強く見えるのだとしたら、それはきっと、僕の大切

な友達のお陰だね。アルフやルーが僕の側にいてくれたから、……
これから先も、ずっといてくれるって信じられるから、彼等の強さ
が僕に伝染するんだ。だから僕も、強くなれるんだよ」
零れるような微笑み。

第7章 秘められし力 No.15

クワイは、ふと、故郷の村にいる両親や友人の許に帰ったような懐かしさを覚えた。そして、思った。自分は、何時から、こんな笑顔を忘れていたんだろう。肉親を想い、友を想い、自分の生を慈しむ心を失っていたんだろう。

その瞬間、思い出す。魔法遣い養成学校へと旅立つ日の朝、村の掟により、ただ独り見送って下さった大僧正様のお言葉を……。

『心して聞け。彼の地には、様々な念が渦巻いておる。清浄なる思いもあれば、邪悪な念もある。しかしな、クワイよ。お前はヤナイの心を、……一族の誇りを、決して失ってはならぬぞ。森に生きる全ての命あるものに対する労わりと感謝の念。それこそが、ヤナイの心ぞ。それを失った時、ヤナイは滅びる。お前は決して心を蝕まれるなよ。お前の両肩に懸かる我等ヤナイの未来を、蝕むでないぞ。』

その時のクワイには、大僧正様のお言葉の意味は理解出来なかった。しかし、今は、……自分の弱さに負け、嫉妬心から相手を思い遣る心を失い、そして、そのことにやっと気付いた今は、あの日の大僧正様のお心が、ほんの少し解ったような気がした。

クワイは唇を噛み締め、真っ直ぐに顔を上げた。彼の顔から、迷いや戸惑いは完全に消え失せていた。

「なあ、リオ。魔法、教えてくれないか。俺、立派な神官になりたいんだ」

リオが大きく頷く。

「うん。じゃあ、僕にも教えてよ、弓の使い方。ヤナイの戦士は、雲の中の鳥さえ射落とす弓の名手なんでしょう？」

クワイは口の両端を上げ、ニヤリと笑った。

「ああ。俺達は皆、弓を抱えて生まれてきたんだ。弓は、もう一本の腕みたいなもんさ。任せとけよ」

そう言い、窓に向かって弓を射る素振りをしてみせる。誇らし気なクワイ。ニコニコと笑うリオにつられるように、小さく声を立てて笑った。

暫く笑った後、フツと表情を曇らせる。ぼんやりと窓の外を見遣る、その横顔は、妙に神妙だった。

訝しんだリオが声をかけようとした瞬間、クワイが小声で呟く。

「俺も、……出逢えるかな。お前にとってのアルフやルーみたいな、本当の友達に……」

リオの満面に、輝く笑みが零れる。

「勿論さ。きつと出逢えるよ。僕等を隔てている『種族』という壁は、ここでは何の意味も持たない。人と人が、一対一で正面から向き合えば、嫌いな人より好きな人の方が、きつと多いはずだもの。それに……」

リオの言葉は、室内に突然響いた扉を開ける音と、パタパタという足音によって遮られた。

振り返った視線の先、開いたカーテンの向こうから現れた艶やかな褐色の髪。それが、クワイの横を擦り抜け、リオのベッドの上に飛び込む。

「どうしたの、ルー？」

何時もの癖で、柔らかな髪に手を掛けつつ、リオが問う。

顔を上げたルー。

「リオお、起きてたあ？」大きな丸眼鏡は、見事に鼻からずり落ち、片耳が外れている。

「うん、ごめんね、心配掛けて」眼鏡を掛け直してやりながら、ニコリと笑う。「もう大丈夫だよ」

それに笑みで答えたルー。掛け直した眼鏡の隅に映る葡萄色の髪に、視線が吸い寄せられる。

「……クワイ」自然と表情が強張る。「どうして、此处に……？」

「仲直りをしに来てくれたんだよ」リオが説明する。

ルーは意識して何時もの笑みを創った。

「そう。……良かったあ」

「それより、ルー、そんなに息を切らして、どうしたの？ 何かあったの？」何時も隣にいる黒髪の友の姿がない。不安が胸を過ぎる。それをそのまま言葉にする。「……アルフは？」

「そうだよ！ リオ、大変なんだ。アルフを止めて！」

指先がリオの袖を強く掴んだ。

碧の瞳が問い掛けるように顰められる。

リオが口を開くのを待たず、ルーは言った。

「アルフがね、……アルフが、リオが倒れたのは、夏休み前に出掛けていった場所では何かあったせいで、何かあったかを知ってるのは校長先生だけだって言って、一人で校長室に乗り込んで行っちゃったんだ。どうしたらいいの？ ボクじゃ止められないんだよ、リオお」

不安に溢れそうになる涙を必死に堪える。それでも、喉は詰まり、鼻声になる。

「リオが大変なのは解ってる。解ってるけど、でも……」

ルーは、それ以上、言葉に出来なかった。そして、する必要も無かった。既に、リオは掛け布団を跳ね除け、飛び起きていたから……。

「僕なら平気！ 行こう！」

その時になって、傍らに佇む葡萄色の髪の少年のことを思い出す。リオは気まずげに唇を歪めた。

「クワイ、ごめん。今から起きることは見なかったことにして」
短く言うと、ルーの手を握る。

その瞬間、二人の姿が、その場から掻き消えた。

さっきまで、確かに二人が居たはずの場所に、今は何も無い。僅かにベッドに残る皺が、今までそこに人がいたことを物語るだけだ。クワイは、暫し呆然と、その場に立ち尽くした。

丁度その時、所用で席を外していた保健室の主、エリザベート先生が戻ってきた。葡萄色の髪を認めると、明るく声を掛ける。

「あら、クワイ。こんにちは」次いで、殻になったベッドが眼に留まる。「リオは？」

「……帰りました」やっと、それだけ答えた。

「そう。元気になったのね。なら、いいわ」

彼女は、一向にその場から動こうとしないクワイに訝しげな視線を向けた。

「何をしてるの、クワイ。貴方も教室に戻りなさい」

「……はい」

素直に頷き、扉に向かう。

廊下に出たところで振り返り、再度、さっきまで確かにリオがいたベッドを一瞥したが、そのまま黙って扉を閉じた。

顔を上げた彼の瞳は、清々しさに輝き、口許には満足気な笑みが宿っていた。けれど、それが誰かの眼に映ることは無かった。

第7章 秘められし力 No.16

その頃、校長室では……。

「君と二人きりで会うのは、初めてですね、アルフ」

厚みのある低音の音が、柔らかな陽射し差し込む校長室に静かに響いた。机の上で指を組み、初雪のように真つ白で豊かな口髭を携えた口許には穏やかな笑みが浮かんでいる。

窓の外、逸早く朱に色を変えた木葉が一片、風も無いのにヒラリと枝を離れ、緩やかな風に舞い飛んでいく。穏やかな風景。

しかし、今のアルフには、それすら勘に触った。机に両手を付き、身を乗り出し、眼前の老人をじっと見据える。シンと静まり、冴え渡る星空を切り取ったかのような漆黒の瞳。

その視線を真正面から受け止めつつ、先生は、一瞬だけ、微かな胸騒ぎを覚えた。

（私は、どうしたというのだ？ この感覚は……、恐れ？）心の中で自問する。（バカな……。この場で、いったい何を恐れる必要があるというのだ？）

その答えに辿り着く前に、胸騒ぎは掻き消えた。変わって、深い安堵感に包まれる。

（気の、せいかな……？）

口許に微かに自嘲気味の笑みを浮かべる。その変化に、黒髪の少年は気付いていないようだ。

先生方の制止を振り切り、勢い込んで、この部屋に乗り込んできた少年。僅か一年生でしかない彼。しかし、その瞳の奥に煌く光は、安易に気を弛めれば喰い付かれる、野生の獣の危うさをはらんでいた。

そして、彼は、じっと押し黙ったまま……。

先生は、今度ははつきりと微笑んだ。

「先程から、ずっと黙ったままでですね。君が私に、わざわざ会いに

来てくれたのは、何か話があるからだろうと思い、先生方にも引き取って戴いたのですけれど……」

それでも、アルフは何も答えない。

校長先生は、色濃い自嘲を含んだ笑みと共に、深い溜息を吐いた。「どうやら、私は君に嫌われているようですね」

「別に……」

初めてアルフが口を開く。変声期を終えた声は、酷く大人びて聞こえた。考えを読まれることを嫌うかのようにスッと視線を逸らす。「嫌ってるわけじゃない」

動作すら大人びている。

先生が小さく微笑む。

「無理をする必要はありませんよ。人誰しも、好き嫌いがあるのは、やむを得ぬこと。私は、それを悪いとは思いません。嫌われている人に好かれないと思うのであれば、嫌われる理由を探し出し、それを正せばいい。それだけのことですからね」

「あんだ、リオと同じこと、言うんだな」

眼前の少年の口を吐いて出た、別の少年の名。

先生は納得の態で頷いた。

「君が私を訪ねてきた理由、……察しが付きましたよ。リオの、ことですね」

「ああ……」意外なほど、あっさりと認める。「あんだ、リオに何をさせた？ 夏休みの前日、リオは、あんだに頼まれた用事とやらのために、いつたい、何処へ行っただんだ？」

堂々とした口調。

それは一見、世間知らずで向こう見ずな生意気さとしか見えないけれど、校長先生は別の感覚で彼を見た。権力や征服欲になど決して屈することのない、強い信念と正義感。自分が正しいと信じるもののためならば、相手が誰であろうと真正面から闘いを挑む、真っ直ぐな清々しい強さ。彼は、僅か十歳の少年だが、その信念は、老齡な先生方に勝るとも劣らぬものであると感じられた。

新米のサリバン先生手を焼くのも無理は無い。心の中で思う。

先生は、敬意の念を込めて言った。

「お尋ねの件ですが、……それは、私の口からはお話出来ません」
「何だと！」テーブルを間に挟み、詰め寄るアルフ。「あんたのせいで、あいつは、何か重いものを抱え込んだんだぞ。それで、酷く悩んでる。眠れないほどだ。今日なんか、授業中に倒れた。あんた、それでも平気なのか？」

「リオ自身に関わることでですから、私が口にすべきではないと言っているのです」

柔らかく、しかし、鞭のように鋭い言葉。

第7章 秘められし力 No.17

さすがのアルフですら、それ以上、反論することが出来ない。その場に、ただ立ち尽くすだけで精一杯だった。

先生の視線が、再び温かみを纏う。

「アルフ。君はリオのことになると、急に分別を欠くようですね。魔法遣いを目指す者として、それは、あまり良い傾向ではありません。魔法遣いは、常に品行方正であるべきです。強い力を持てば持つほど、自身が、それに操られることのないように、力に群がる者達の言葉から真実の言葉を聞き分けられるように、分別を持たなければいけません。解りますか？」

「……はい」

素直に頷くアルフ。背筋までも伸びている。

先生は、満足気にニッコリと微笑んだ。

「リオの言うとおり、君は、とても正義感の強い少年ですね。その点は、実に素晴らしい。しっかり伸ばして下さい」

次の瞬間、校長先生が、孫を案じる老人の表情になる。酷く年老いてすらみえた。

「君が言うように、リオには本当に辛い思いをさせてしまいました。しかし、私は、自分のしたことを間違っていたとは思いません。リオは今後も、悩み、苦しむでしょう。ですが、そうすることによって、初めて得られるものがあるのです。リオは、今、それを模索しています。支えてやって下さい。あの子は、見掛けよりも脆い」

『支えてやってくれ』という言葉が、アルフの勘に触る。

「そんなこと、解ってるよ！」再び不遜な口調になる。

そんな彼の心を見透かすように、先生は穏やかに言葉を継いだ。

「正直に申しましょう、アルフ。今回のこと、私は自分の所業を間違っていたとは思いません。それは本心です。しかし、後悔はしました。とても悔やみました。リオは、大変優秀な能力の持ち主です

が、やはり、まだ子供です。そのことを、もっと考えてやるべきだったのではないか、と……」そこで言葉を止め、少年を仰ぎ見る。

「けれど、それは私の取り越し苦労だったようです。今日、君に会って、話をしてみても、安心しました。こんなに素晴らしいお友達がいるのなら、リオは大丈夫。今、心から、そう思っていますよ」

アルフの視線が、深い蒼の瞳に捉えられる。

そして、アルフは直感した。先生の度量の深さ。自分など、到底、足許にも及ぶものではない。

この先生が、アルフが懸念していたようなことを、リオにさせるわけが無い。素直に、そう思えた。全て、自分の思い込みだったのだ。気恥ずかしげに俯く。

その時、突如、室内に、勢いよく扉をノックする音が響き渡った。先生には、訪問者が誰か解ったようだ。

「おやおや、君を心配して駆け付けたようですね」扉に向かい声を掛ける。「お入りなさい」

待ちきれぬと謂わんばかりに、扉が押し開かれる。

「失礼します！」

先に飛び込んできたのは、ルーだった。アルフの姿を見付けた途端、彼の腕にしがみつく。

「アルフ！ 心配したんだよお！」

その勢いのまま、ペコリと校長先生に頭を下げた。

「校長先生、ごめんなさい！ アルフは何も悪くないの。だからお願い！ 退学にだけはしないで！」

先生と二人との間に、金色の光が立ちはだかる。リオだ。友を背に庇うように佇む。

確か、ついさっきまで保健室で眠っていたはずのリオが、なぜここに？ アルフは混乱し、思いをそのまま言葉にした。

「リオ！ お前、なんで……！」

しかし、彼の言葉は、怒りすら含んだリオの強い語気に掻き消された。

「それは僕のセリフだよ、アルフ」振り返らず、肩越しに低く言う。
「どうして、こんなことを……」

悔し気に唇を噛む。

それでも、校長先生の正面で姿勢を正し、深々と頭を垂れる。

「校長先生、本当にすみませんでした。元はと言えば、全て僕の責任なんです。僕が取り乱してしまつて、それを、彼等が心配してくれて……。僕が弱かつたせいなんです。全ては僕の……。ですから、どうか、罰なら僕に！ 僕に罰を与えて下さい」

リオの厳しい表情。それと同じくらい厳しい口調。

第7章 秘められし力 No.18

だが、それは、先生の穏やかな声音の前で、ただの徒労に帰すことになる。

「おやおや。リオもルーも、久しぶりに顔を見せてくれたと思ったら、何を言い出すのですか？ 私には、何のことやら……」

「え？」リオとルーが揃って驚きに眼を見開く。

校長先生は続けて言った。

「私は常々、君達の親友であるアルフに会いたいと思っていたんですよ。今日は、わざわざ、彼の方から来てくれたので、今の授業に対する貴重な意見など、話を伺っていたところです」

今度はアルフが眼を見開く番だった。

「そうですね、アルフ？」先生は、そう言い置いて、軽く片眼を瞑ってみせた。

アルフが気まずげに頭を掻く。

先生はニツコリと微笑んだ。

「私は、一度、アルフとゆっくり話をしてみたかった。彼とは良い友達になれそうですよ」言いながら、傍らに座り込むルーの髪をそつと撫でる。「心配は要りません。君達が心配するようなことは何もありませんからね」

「……良かった……」

呟くと共に、リオは、その場にヘタヘタと座り込んだ。

「リオ！」

アルフとルーが駆け寄る。

リオの額には、じつとりと脂汗が滲んでいた。無理をしていたのは明らかだ。

友を支えようとする少年二人を、大きな手が制止する。

見上げたアルフの眼の前に、眩い陽の光に縁取られた大きなシルエット。校長先生だ。先程、我を忘れて詰め寄っていた時には、さ

ほど感じなかったが、立ち上がった先生の体躯は、三千歳を超えているとすら噂される年齢に不似合いなほど、長身で堂々としていた。先生は、二人の少年を遮り、リオの小さく細い臍を軽々と抱え上げた。

その隣では、自分の役割を取られたとばかりに、ルーが不機嫌そうに唇を尖らせていた。

「やれやれ。君は誰かのために無理をしすぎますよ」校長先生の深い声。

それに対し、リオは予想以上にはつきりとした口調で返した。

「……友達です」一つ息を吐く。「アルフは、僕の大切な友達ですから」

「……そうですね」

先生はニツコリと笑った。

その情景を見つめながら、アルフは素直に思った。ああ、これで大丈夫だ。全ては上手くいくのだ、と……。

今日のリオの体調では、残りの授業を受けることは困難であると判断した校長先生は、看病役二名を付けて帰宅させることを決め、その場で事務官を呼んで、三人の早退手続きを取ってくれた。当然、看病役二名とは、アルフとルーのことである。

さらに、先生は、リオの体調不良を重くみて、体力が回復するまでは寮で寝泊りするよう勧めてくれたが、彼は、それを固辞し、森の家への帰宅を希望した。すると、特別に家まで送ってくれるという。用意されたのは、巨大な白い鳥。先生の愛鳥ハクである。

ハクの背に乗った三人は、巨大な翼が羽ばたく直前、校長先生の声を聞いた。

「サリバン先生には、私から話しておきます。少し休暇を取って休みなさい。良い体調を維持することも、良い魔法遣いとしての条件の一つですからね。それから、アルフ……」ハクが翼を広げたので、先生の顔はよく見えない。「リオが何処へ行ったのか、それは、リ

才自身が話したくなるまで待つていてあげて下さい。でも、これだけは教えてあげますよ。私はリオをヤナイ族へは行かせていませんし、仮に彼等を訪ねたとしても、ヤナイは、とても礼儀正しい一族ですよ」

「……はい。すみませんでした！」

ハクの背の上でリオを支え、深々と頭を垂れるアルフ。彼は、その時初めて、両親以外の人に深い尊敬の念を抱いた。

自分のベッドに横たわり、ホッと深く息を吐くりオ。

ふと見れば、窓の外、真つ蒼な空を真つ白な雲がのんびりと流れていく。

その雲に乗って流れていく自分を想像し、心を飛ばしながら、瞳を閉じた。

眼下に広がる一面の森。何処までも続いている。そして、その先に見えるのは、空よりも深い蒼。……あれが、海？ もっともっと高く飛べば、海の果てに、微かに霞んで見えるものがあるはず。あれは……。

突如、リオの意識は自身の躰へと駆け戻る。扉を叩く軽い音に気付いたからだ。

「どうぞ」

声は小さかったが、それに応えるように扉が開く。隙間から、ひよっこりと顔を出したのは、ルーだ。

「リオ、起きてたあ？」

何時もどおりの明るい声に癒される。ホッと肩の力を抜き、ニッコリと微笑む。

「うん。大丈夫だよ」

言いつつ、毛布を押し退け、ベッドの端に腰掛ける。そして、靴を探して俯いた時、頭上から、ルーとは別の声が降ってきた。

「もう、無理すんなよ」

顔を上げると、そこにルーの姿はなかった。代わって、アルフが戸口の壁に寄り掛かっている。惘然とした表情。リオは、無理矢理明るい笑顔を創った。

「ごめん、アルフ。君には、すっかり心配掛けちゃったね」

「いいさ、そんなことは。お前が元気ならな。校長先生だつて一週間くらいゆっくり休めつて言ってくれたんだ。短いけど、秋休みだと思つて、ノンビリしようぜ」

リオは動きを止め、アルフを見上げた。その表情に微かな困惑があった。

アルフは後ろ手に扉を閉めると、リオと並んでベッドの端に静かに腰を下ろした。何も言わず、リオの心の奥底までも探ろうとするかのように、彼の碧の瞳をじっと覗き込んだ。

気が付けば、アルフの隣で、ルーがニコニコと微笑んでいる。

窓から流れ込む爽やかな風に乗リ、小鳥の囀りが耳に心地よく響く。その風は、リオの髪を揺らし、次いで、アルフの髪を揺らした。長めの前髪の奥で輝く漆黒の瞳は穏やかだったが、そこに強い決意が漲っていることに、リオは気付いた。

沈黙に耐え切れず、リオがアルフに問い掛ける。

「何？ アル……」

じつとリオを見つめていたアルフが、ゆっくりと口を開く。

「お前が強い奴だつてこと、俺はよく知ってる。でもさ、泣きたい時、辛い時、俺やルーの前でまで、無理に笑うことなんて無いんだ。泣けよ。泣いてくれよ。俺達の前でくらい、素直になってくれよ」

「僕は、そんな……」

リオの否定の言葉は、しかし、あまりにも弱々しく、続くアルフの言葉に掻き消された。

「なあ、リオ。お前は、何をそんなに恐がつてるんだ？ どうして、そこまで自分を隠そうとするんだよ。お前が、そうやって心を閉ざしちまうから、俺達でさえ、お前の気持ちじゃ解らなくなっちゃうんだ。何でそんなに片意地張ろうとするんだよ。弱くたっていいじゃないか。たまにはダメな奴になったって、いいじゃないか。それでもいいって、そんなお前が好きだつて言ってくれる奴は、きつというよ。少なくとも、俺やルーがいる。だから、本当の自分を見せること、もう恐がるなよ」

リオの口許が、微かに歪んだ。次いで、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「僕に、生きる価値が、なくても？」

唇の震えが、言葉の重みを物語っていた。

「仮に僕が、誰にも望まれず、誰にも祝福されず、産まれ落ちた瞬間、生を否定された命だとしても、君は、今と同じ言葉を僕に掛けてくれるの？ それでも、僕は産まれる価値があったのだと、そう言ってくれるの？」

リオは、何時もよりも明るい微笑みを浮かべたつもりだったが、それは、少し歪み、哀し気な表情にしかならなかった。それを隠すように、アルフの視線を避けて俯く。震える指先は、真つ白なシーツの端を強く握り締めた。

しかし……。

「何言ってるんだか、全然解んねえよ」アルフは、リオの言葉の裏に隠された深い意味を知ってか知らずか、ただ呆れたように呟いた。

「でも、これだけは言えるぞ。何処の何方様が知らないが、お前の命について云々するなんて、俺は許さない。誰が何て言ったって、俺はお前が好きだし、ルーだって大好きだ。お前に出逢えて良かったと思ってる。これから先も、ずっと一緒に、同じ時間を過ごしていきたいと思ってる。俺やルーが、必ず護ってやる。そんなことを言う奴等から、お前のことを必ず護ってやるよ」

それは、今、リオが今一番望んでいた言葉。けれど、リオにとって、その言葉がどれほどの重みを持っているか、アルフ自身、きつと気付いていないのだろう……。

アルフは、リオの頭を片腕に掻き抱き、言葉を継いだ。

「なあ、リオ。母さんが、よく言ってたんだけどさ、誰かを幸せにしたいと思うなら、まず、自分が幸せにならなきゃいけないんだ。本当の幸せを知らない奴に、幸せは解らない。笑っていない奴に、誰かを笑わせることは出来ない。お前が、みんなを幸せにしたいと思うなら、お前が世界中で一番幸せにならなきゃいけないんだぜ」

リオの手がアルフの腕にそつと触れた。

その指先が微かに震えていることに、アルフは気付いた。背後のルーと視線を交わし、ほんの少し照れたように片手で髪を掻き上げると、ポツリと呟く。

「俺達が、付いてるだろ」

リオは黙って、しかし、大きく頷いた。アルフの腕を握る掌の力が微かに強まる。

アルフは空を見上げ、ホッと一息を吐いた。

「空、……今日も蒼いぞ。だから、笑ってくれよ。な？」

リオは、アルフの腕の隙間から空を見上げた。空は、眼に染みるほど蒼かった

上目遣いで黒髪の友を見上げる。その視線と、アルフのそれとが、柔らかく絡み合う。

アルフは優しく、労わるように微笑んだ。彼の腕はリオの頭を解放し、柔らかな月光色の髪にそつと触れた。

「……それじゃダメか？」静かな問い。「俺達だけじゃ、お前は不満なのか？」

「……そんなこと……。不満なんて、あるわけ、ないよ」

深い翡翠色の瞳が見る間に潤む。

アルフの親指がリオの目尻にそつと触れると、涙が一滴、指先を伝い、零れた。アルフの心は締め付けられるように痛んだ。

「だったら、もう無理すんなよ」リオの髪をクシャクシャと撫でる。撫でられたまま、リオは小さく首を横に振った。

「うっん。無理をしてるわけじゃない。……気付いたから」

「え？」アルフの問い。

リオが泣き笑いで答える。

「僕は、自分が歩く道を自分で選んだ。過去も何も関係ない。これからの新しい時間を、僕は、君達と、この世界で紡いでいきたい。

だから、今、こうして歩き始めたんだ。僕は、もう、決して迷わない。だって……。だって、此处には、大好きな君達がいるんだから」

リオの髪を梳くアルフの掌の温かさが、リオの心に深く染みている

った。リオは、もうそれ以上、我慢することが出来なかった。

「……アルフ、ごめん。肩、貸してくれるかな……」

リオはアルフの肩に顔を埋め、小さな背中を震わせた。それが今のリオに出来る、自分自身への精一杯の強がりだった。

そんなリオの背中を、アルフは優しく撫でた。何も言わず、ただ撫でた。今は言葉なんていらぬ。そう思った。

ルーが、そつとアルフとリオを抱き締める。

三つの温もりが、今、一つとなった。

窓の外を、木葉を揺らし、風が通り過ぎていく。それは、気の早い虫の声と呼応するように、森の息衝きの如く、優しく、そして力強く、空へと駆け抜けていった。

終
-

LURIA 　　翡翠の瞳　　空の蒼

第7章 秘められし力 No.19 最終回（後書き）

「LURIA ヽ翡翠の瞳 空の蒼」最後まで読んで頂き、本当にありがとうございました。

11月17日より続編「翡翠の鳥は飛び方を知らない」の連載を開始しました。宜しければ、そちらもご贖頂けましたら、これに勝る喜びはございません。

今後とも宜しくお願い致します。

ほしの 拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5713a/>

LURIA ~ 翡翠の瞳 空の蒼 ~

2010年10月8日14時24分発行